



KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.26

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

The geomorphological settings of the Palaeolithic sites in Kanagawa Prefecture -Sagamino Phase III~V- (Part I)	1
Project Team for Jōmon Period Studies: Change of the Jōmom Culture in Kanagawa Prefecture (VII): An Example in the first part of Late Period. An Aspect of the Horinouchi-Type Pottery Period, Part 11.....	12
Project Team for Yayoi Studies: Study of pit dwellings in the Yayoi period (5)	35
Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr.Naotada Akaboshi, A Pioneer of archaeological research in Kanagawa (18): A report of materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note"	45
Kaiyu-toki assemblages from a settlements in Kanagawa Prefecture -A case study in Hadano City-	53
Project Team for Medieval Age Studies: Remains of the medieval period in central Kanagawa (6)	65
Project Team for Early Modern Age Studies: The corpus of structural remains of the road in the Early Modern Age (6)	75
Research-aid paper Sagara Hideki: Developments of an identification method for ancient fagaceous nuts (2).....	89

研究紀要 26

かながわの考古学

かながわの考古学

二〇二二

公益財団法人 かながわ考古学財団

March, 2021

KANAGAWA Archaeology Foundation
Yokohama, Japan

2021.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

かながわの考古学

2021.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

1990（平成2）年11月に神奈川県埋蔵文化財センターより刊行された『かながわの考古学』第1集から、1995（平成7年）刊行同第5集までを引き継いで、1996（平成8）年に神奈川県立埋蔵文化財センターと財団法人かながわ財団によって、新たに研究紀要Ⅰ「かながわの考古学」が刊行されました。2000（平成12）年の研究紀要5からは財団法人かながわ考古学財団によって単独で刊行することとなりました。今回も、各時代の研究プロジェクトが設定したテーマによる研究成果と本財団の研究助成制度による本財団職員の論文を掲載しております。

本書が考古学研究の一助となることを願うとともに、皆様のご高評を頂きたく存じます。

2021（令和3年）年3月

公益財団法人 かながわ考古学財団

目 次

神奈川における旧石器時代の遺跡立地 —相模野第Ⅲ期～第Ⅴ期—（その1）	旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅷ —後期前葉期 堀ノ内式土器文化の様相 その11—	縄文時代研究プロジェクトチーム	13
弥生時代後期竪穴住居の研究（5）	弥生時代研究プロジェクトチーム	35
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（18） —通称「赤星ノート」の古墳時代資料紹介—	古墳時代研究プロジェクトチーム	45
県内集落出土の灰釉陶器の組成	奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	53
神奈川県の県央地域の中世遺跡（6） —かわらけの検討Ⅱ—	中世研究プロジェクトチーム	65
近世道状遺構の集成（6）	近世研究プロジェクトチーム	75
研究助成論文 ブナ科種子同定方法の開発（その2）	相良英樹	89

例　　言

1. 本書は、公益財団法人かながわ考古学財団の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに共同研究を行った結果を掲載するものである。

2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである。

(五十音順・◎はプロジェクトリーダー、○はサブリーダーを示す)

・旧石器時代研究プロジェクトチーム

大塚健一・◎栗原伸好・○絹川一徳・砂田佳弘・畠中俊明・三瓶裕司・脇 幸生

・縄文時代研究プロジェクトチーム

○阿部友寿・天野賢一・井辺一徳・岡 稔・小川岳人・柏谷 隆・景浦 覚・

小島 清・野坂知広・◎山田仁和

・弥生時代研究プロジェクトチーム

◎飯塚美保・池田 治・新開基史・戸羽康一・本間元樹・○渡辺 外

・古墳時代研究プロジェクトチーム

◎植山英史・○柏木善治・岸本泰緒子・新山保和・西田真由子・吉澤 健

・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

加藤久美・◎諏訪間直子・○高橋 香

・中世研究プロジェクトチーム

相良英樹・中村淳穂・◎松葉 崇・○宮坂淳一・山口正紀

・近世研究プロジェクトチーム

井関文明・川嶋実佳子・◎木村吉行・○南出俊彦・宮井 香

神奈川における旧石器時代の遺跡立地

-相模野第Ⅲ期～第Ⅴ期-（その1）

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

神奈川県内における旧石器時代の遺跡数は、2010年段階で456箇所確認されている（日本旧石器学会2010）。そのうちの大部分は、県内中央部付近を南流し、本県を東西に二分する相模川の東側に位置する相模野台地上から検出されている。各遺跡は、相模川に合流する小河川沿いに分布していることは、岡本 勇・松沢亜生や相模考古学研究会が1960年代に実施した分布調査の結果から既に把握されてきた。

日本旧石器学会の報告以降、本県では新東名高速道路建設に伴う調査が数多く実施され、相模川以西にも旧石器時代の遺跡が分布することは明確となつたが、その主体が相模野台地であることに変わりはない。

ここでは、遺跡の立地を主眼とした分析に着手した。対象とした遺跡は、始良丹沢火山灰降灰後の相模野第Ⅲ期～Ⅴ期の遺跡を対象とした。各遺跡を分析するに当たっては、その場所を一定期間利用していた結果形成されたと考えられる礫群や配石の有無、石器の出土点数の規模、石器集中部の数等を参考に時期ごとに各遺跡の性格を位置付けた。その上で、各性格に分類された遺跡及び遺跡間に存在する立地との間に有機的な関わりが存在すると仮定し、今回はそれを捉えるための第一段階の基礎的な報告である。

（栗原）

相模野第Ⅲ期

遺跡の分布

Ⅲ期は一段階古いⅡ期から比べ遺跡数が大幅に増加する。そうした要因もあり相模野台地が始まる城山付近から、台地端部までまんべんなく遺跡の分布が見られる。また周辺の多摩丘陵や大磯丘陵、また最近の調査事例では県西部にも遺跡の分布が認められ、全県的に遺跡の分布が広がっている。相模野台地の中を見てもみると、台地内を流れる境川、引地川、日久尻川、相模川のほか、これらの各支流沿いに分布している。境川流域では、橋本、古瀬B、中村、上和田城山、日久尻川流域では、栗原中丸、柏ヶ谷長ツサ、早川天神森、吉岡遺跡群、用田バイパス間連遺跡群など引地川流域でも福田札の辻、地蔵坂、上土棚、菖蒲沢大谷、南鎧治山などがあり、相模野台地全体に分布する遺跡だが、中でも特に北半より南半に密集するよう見える。

これら数多く分布する遺跡の中でも、遊動時に一時に利用された小規模な遺跡とは違い、一定期間の滞在や遊動時の拠点としての役割を担った、「拠点的な遺跡」があるのではないか、それが当時の人々の活動の一端を表しうるのではないかという想定のもと、少々条件を設定し簡単な分析を行い、その結果を遺跡分布に反映し、可視化することで見えてくる情報を元に検討を行った。

「拠点的な遺跡」としての役割を想定できる条件として、2つの条件を設定した。まず、遺跡への長期の滞在を想定できるものとして、その場での調理行為を想定し礫群を伴う遺跡とした。次に狩猟等の活動時には、持ち運びを行わないであろう大形の礫を使った台石や磨石などの礫石器が出土している遺跡、これらを複合して遺跡の分布を見てみる。最初に前提として、概期の遺跡であることの判断として、この時期の主要器種であるナイフ形石器と角錐状石器が出土している遺跡を抽出し、これらに礫群を伴う遺跡、大型礫石器



第1図 相模野第Ⅲ期の遺跡分布と抽出結果

を有する遺跡と2つの条件により絞り込みを行うと、4遺跡に限定される（第1図）。大磯丘陵に位置する原口遺跡を除く、柏ヶ谷長子サ遺跡、吉岡遺跡群、菖蒲沢大谷遺跡の3遺跡は、相模野台地中央部より南側の台地南半にあり、また概ね一定の間隔をおいて分布しており、その周辺には多くの小規模な遺跡が点在していることも見て取れる。これに石材、特に産地推定が行われている黒曜石のデータを加味して遺跡の分布を見てみると、第Ⅲ期の黒曜石利用での特徴は伊豆箱根系の黒曜石利用が圧倒しており、ほぼ相模野台地全体の遺跡から出土している。対して数の少ない高原山産、神津島産の黒曜石や、伊豆箱根系黒曜石と比べると格段に数の少ない信州系の黒曜石は、当然出土遺跡が限られるが、これらが概ね拠点的な遺跡が分布する南半に集中することも判明した。

このようなことから、当時の人々の活動の中心は台地南域にあり、このエリアから各方面へ人々が移動し、遺跡が拡散していくとも見ることが出来よう。

遺跡の立地

相模野台地は相模川と境川に挟まれ、台地内を引地川、相模川の支流である日久尻川や小出川、鳩川などにより開析を受けている。これら河川は開析、河川の蛇行、合流などにより張り出した舌状台地を形成することが多く、こうした地形に遺跡が立地する傾向にある。

河川を大きく分けると、境川水系、引地川水系、相模川水系に分けられ、水系ごとに遺跡の立地を概観してみると、最大河川である相模川水系沿いには28遺跡が分布している。相模川水系を細かく見ると、日久尻川沿いに吉岡遺跡群や用田バイパス関連遺跡群、柏ヶ谷長子サなど14遺跡、小出川沿いに慶応SFCなど4遺跡と支流沿いにも数多くの遺跡が立地する。引地川水系で現在の大和市に所在する遺跡を中心に17遺跡、

境川水系に月見野遺跡群や相模原市東部の遺跡など11遺跡が立地している。多くの遺跡が前述のとおり河川沿いの台地上、舌状台地等に立地しているが、引地川水系にある支流との合流点には、地蔵坂や上土棚、上土棚南など遺跡の集まる箇所もあり、大和配水池は水源地に位置するなど、少々特徴のある地形に立地する遺跡もある。また日久尻川沿いには深く樹枝状に開析が進んだ谷戸地形が多々あり、河川から少々離れた樹枝状に開析された入り組んだ地形上に遺跡が立地していることが多くみられ、他の河川とは少々違った様相が見て取れる。おそらく当時の人々が遊動しながら繰り返し拠点的な遺跡を利用しているとすれば、そこには何かがあったとか、目印としての特徴のある地形であったなどが考えられよう。また当時は現在のよう交通網が整備されているわけではなく河川沿いは現在の道路のような役割をしており、基本、移動は河川沿いに行われたものと思われる。

小結

今後は、遺跡間での石材の母岩別の比較や、実際の接合作業などを地道に行っていくことで、より有機的な遺跡の繋がりが見えてくるものと考えている。今回の大雑把な分析検討結果を足がかりとし、今後は、数量的な比較、より精緻な層位別分離、遺跡間での石器の接合関係や同一母岩などの検討、黒曜石の産地結果の蓄積、現在進められている県西部の発掘調査結果なども加え、より広い地域、より多くの資料、より細かな切り口により検討を重ねていく必要がある。

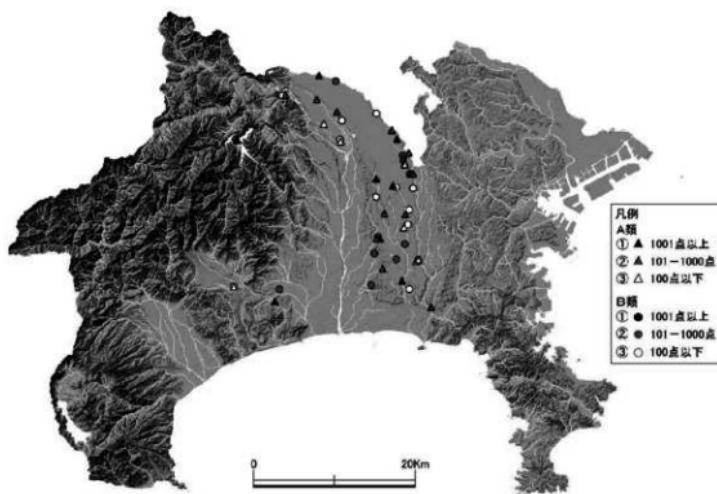
(大塚)

相模野第IV期

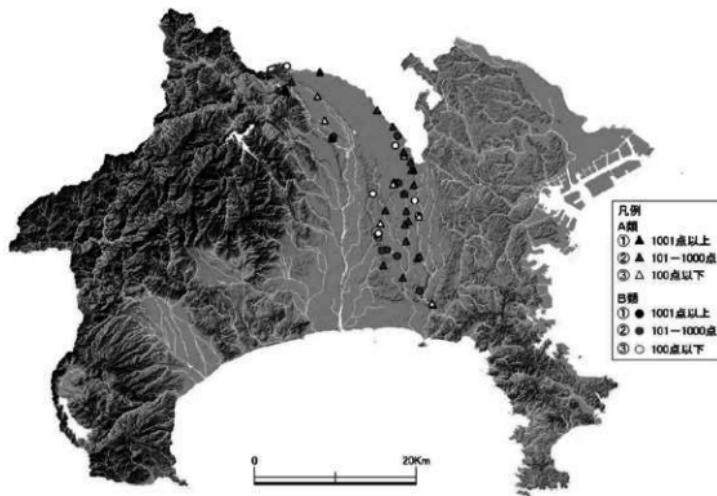
該期は、砂川刃器技法から作出された石刃・縱長剥片を素材とした各石器種及び、石器石材における在地石材の多用に特徴がある「前半」と、寸詰まりの剥片を素材とした石器種、ナイフ形石器の小型・幾何学化、石器石材における黒曜石の多用といった特徴を有する「後半」に細分されている（矢島・鈴木1976、諏訪間・堤1985、鈴木1986など）。

遺跡分布において、前半・後半のそれには極端な偏りはなく、台地を開析する日久尻川、鳩川、姥川、比留川、蓼川、引地川、境川、日黒川などの中小河川に沿った台地・丘陵上にある。しかし、前半・後半における石器群の変化に伴い、遺跡における活動や遺跡間の連鎖、生活様式の変化があると想定される。その変化を捉えるために、県内の該期遺跡のうち、前半59遺跡、後半60遺跡、計119遺跡を対象に分析を試みた。なお、県内において該期石器群が出土した遺跡のうち、点数が少なく「前半」「後半」の帰属が不明確な石器群は、今回分析から除いた。

分析にあたっては、潜在を示すと考えられる礫群の有無（A類：礫群の検出有り、B類：礫群の検出無し）、遺跡から出土した出土点数（①：1001点以上、②：101～1000点、③：100点以下）を組み合わせ、6つの遺跡類型を示した。また、遺跡で検出された石器集中部数（遺跡の利用（回帰）回数）を②の属性として付した。前半・後半を通じて特にA①類とした遺跡（前半：原口遺跡、下鶴間長堀遺跡、栗原中丸遺跡、橋本遺跡、大和配水池内遺跡、上原遺跡、中村遺跡、長堀南遺跡、吉岡遺跡群D区、南鎌治山遺跡、後半：大和配水池内遺跡、田名向原I遺跡、中村遺跡、小倉原西遺跡、田名塩田遺跡群A地区No.4、橋本遺跡、下鶴間長堀遺跡、月見野上野遺跡第1地点、小保戸遺跡、長堀南遺跡）は、石器出土点数の多さに比例して、石器集中部、つまり回帰性が高い傾向があることが判明した。出土点数が②、③の遺跡では、回帰性はあるものの、その回数はA①類遺跡と比べて低い。これらから、A①類遺跡は、それ以外の類型より重要な遺跡であり、そのため回帰性が高いことが窺える。では、その分布とそれが所在する場所、地形について見てみる。



第2図 相模野第IV期前半の遺跡分布



第3図 相模野第IV期後半の遺跡分布

A①類遺跡は、前半で10遺跡を数える。相模野台地全体を中心に分布する。宮ヶ瀬、平塚方面にもわずかながら認められる。相模野台地では、ある程度の間隔をあけて分布し、大和市、座間市がある台地中央部では、比較的近い位置に分布し、まとまりが看取される。後半の遺跡では、9遺跡を数える。宮ヶ瀬、平塚、大和市以南の分布はなくなる。一方で、台地中央部より北側の台地に分布の偏りが認められた。所在する場所、地形からの視点では、谷戸の最奥部や水源部、舌状に張り出した台地上にある。これらの場所は、空間に明瞭な形状を持ち、量塊として存在する地形である。これらは景観の中でランドマークとして認識され（樋口1975、長崎2001）、ランドマークは「平地の空間を集中化し、安定化するはたらきをする」（樋口前掲）とされている。つまり、可視的に特徴があり、目印や目標になる場所なのである。こういった場所にある遺跡は、交通の要衝、季節的な集合場所などの特異な機能を持っていたと考えられる。反対に言えば、この場所に遺跡を形成し、上記した機能を持たせたとも言えるだろう。この結果として石器の累積、「小の積み重ねの大」（砂田1996）が生じ、A①類が形成されたと思われる。

小結

遺跡で検出した礫群と遺跡から出土した石器点数と遺跡における石器集中数を基に遺跡を6類型に分けた。このうちA①類を重要な遺跡と位置づけ、その分布と立地を見た。分布では、第IV期前半と後半において、異なることを示した。立地については、ランドマークといわれる場所に形成されていることを示した。

(脇)

相模野第V期

当該期はこれまでの調査・研究により、槍先形尖頭器石器群を中心の「相模野V期前半」と細石刃石器群が主体の「相模野V期後半」と2分する編年觀と、相模野V期後半の細石刃石器群について石器群の様相の違いから後半をさらに2分して「段階V～X」と3区分する編年觀が示されている（諏訪間1988）。本稿ではこれらの編年觀に基づき、相模野台地で採用されている地層区分（L1H・B0・L1S層）にあわせ検討を加える。

資料の抽出・分析方法については相模野第III期の項以降述べているが、各層のそれぞれの石器群について石器集中の内容に「礫群や配石といった礫等の構成材を持つ構造が伴うこと」、「石器の加工に必要な器種（敲石等）を除く大形の石核石器（砥石・磨石・石皿・台石・礫器等）が共伴していること」を主眼に分類し、前者を「拠点的な遺跡」、後者を「小規模な遺跡」と規定して分布図を作成した。

今回の集成では、135の遺跡（文化層）を抽出した（第1表）。以下、地層区分ごとに記述する。

なお本稿では、双方の石器群が共伴している事例については紙面の都合上、掲載しない。

L1H層 細石刃石器群

18遺跡のうち、「拠点的な遺跡」は8地点である（第4図）。

分布を見てみると、「拠点的な遺跡」は比較的等密度の分布を示しており、小河川に1地点もしくは中河川に距離を置いて2地点分布するなどの様子が見てとれる。一方、「小規模な遺跡」は、「拠点的な遺跡」の周辺に偏在しているように見ることが出来る。

分布領域は神奈川県下、「拠点的な遺跡」は相模野台地の全域に分布するほか、県西部の伊勢原台地にも広がっている。さらに「小規模な遺跡」をまじえると東部の下末吉台地へも分布が広がっている。

L1H層 槍先形尖頭器石器群

43遺跡のうち、「拠点的な遺跡」は12地点である（第5図）。

第1表 石器組成集成一覧

層序区分	石材種 石器器種組み合わせ	遺跡数 (総合)	石材種											
			黒曜石 (信州系)	黒曜石 (伊豆箱根系)	黒曜石 (高岡山)	黒曜石 (神津島)	秩父・多摩川系石材 (全体)	丹沢山系石材 (火山岩)	丹沢山系石材 (凝灰岩)	富士・箱根系石材	真岩系石材	碧玉(黄玉) (赤玉石)	碧玉(赤玉石)	
L1H層 62遺跡	細石刃	18	17	5	5	1	6	14	13	12	6	15	11	0 0 0 0
	細石刃&武具・大形石核石器	8	8	3	4	1	5	7	7	6	3	7	5	0 0 0 0
	槍先形尖頭器	43	34	3	6	1	1	27	28	28	3	26	17	0 0 0 0
	槍先形尖頭器&遺構・大形石核石器	12	9	1	2	1	1	9	9	9	2	9	8	0 0 0 0
B0層 46遺跡	細石刃	28	27	2	2	0	1	25	24	23	8	22	13	2 0 2
	細石刃&遺構・大形石核石器	14	14	1	1	0	1	14	14	12	5	13	7	2 0 2
	槍先形尖頭器	15	13	1	2	0	1	10	9	9	4	13	7	1 0 1
	槍先形尖頭器&遺構・人形石核石器	6	6	0	0	0	0	6	6	6	3	5	5	1 0 1
L1S層 44遺跡	細石刃	16	11	1	1	0	1	14	11	11	3	13	8	0 0 0 0
	細石刃&遺構・大形石核石器	4	4	0	1	0	1	3	3	3	2	2	2	0 0 0 0
	槍先形尖頭器	21	13	2	2	0	2	15	13	13	4	16	7	1 0 1
	槍先形尖頭器&遺構・大形石核石器	2	2	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	0 0 0 0

分布では、「拠点的な遺跡」は境川沿いに中村遺跡・上鶴間上深堀向遺跡・月見野上野遺跡（5・6・12地点）が密集しているものの、一定の距離を保って分布する傾向が窺える。しかしながら相模野台地の中央から南部地域の一部には「拠点的な遺跡」の空白地帯が認められる。「小規模な遺跡」は前述の空白地域も含め分布している。

分布領域は、相模野台地や相模川を挟んだ丹沢山地や伊勢原台地へも展開している。今回集成しなかった東京都町田市とその周辺の分布状況については今後確認する必要がある。

B0層 細石刃石器群

28遺跡のうち、「拠点的な遺跡」は14地点である（第6図）。

分布では、月見野上野遺跡（1・12地点）と台山遺跡・大和配水池内遺跡と上草柳遺跡第1地点が近接するほかは、おおむね「拠点的な遺跡」は中小河川毎、ある程度の間隔を持って分布している。

分布領域では「拠点的な遺跡」が相模野台地全域と津久井城跡馬込地区でのみ認められるが、「小規模な遺跡」は相模野台地のはか、県西部へも展開していることが見てとれる。

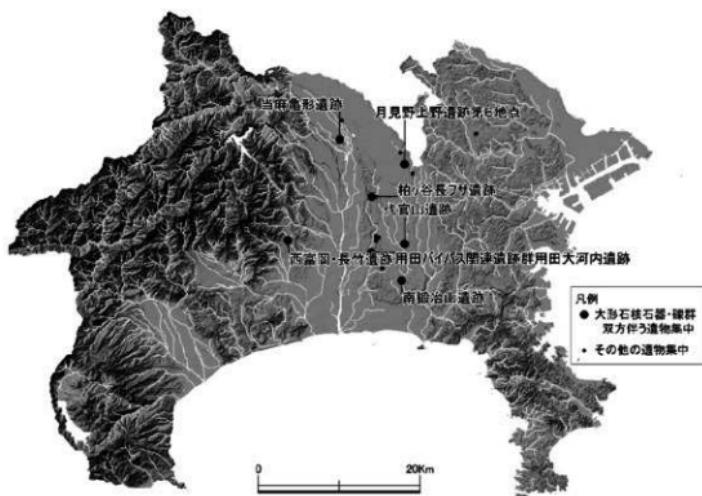
B0層 槍先形尖頭器石器群

15遺跡のうち、「拠点的な遺跡」は6地点である（第7図）。

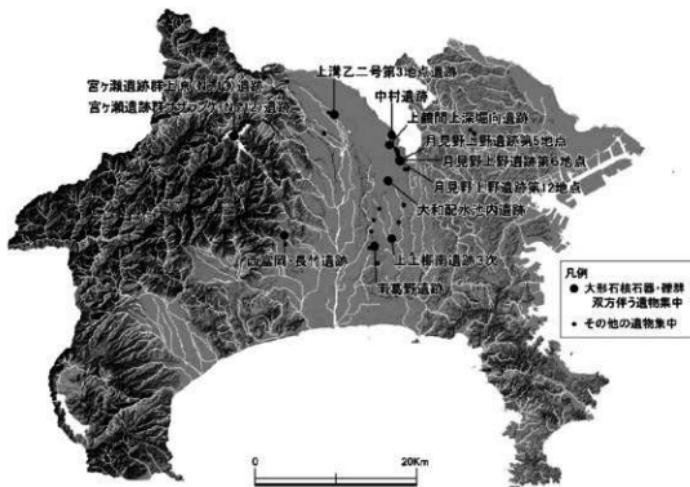
分布では、「拠点的な遺跡」は大和配水池内遺跡と上草柳遺跡第1地点が近接しているほかは、相模野台地中央部にまとまっており、そのほかは北部に風間遺跡群が位置するのみである。「小規模な遺跡」は相模野台地南部や県西部の伊勢原台地にも展開している。

全体の分布領域はやはり相模野台地中央部に偏る傾向が認められる。L1H層の槍先形尖頭器石器群同様、周囲の分布状況についてもあわせて検討する必要がある。

神奈川における旧石器時代の遺跡立地



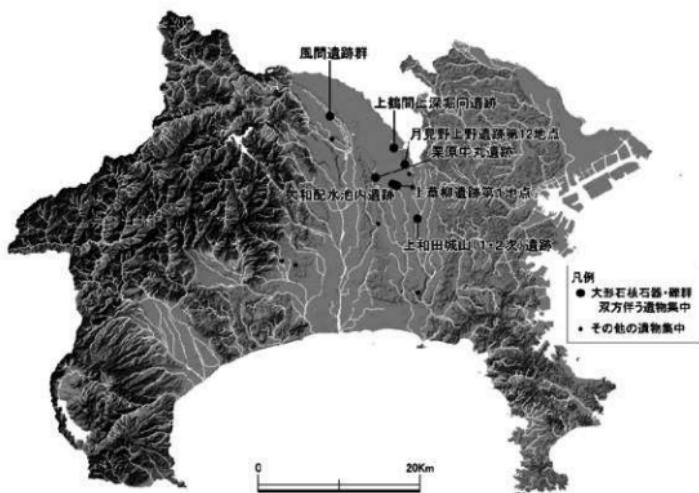
第4図 相模野第V期（L1層）細石刃石器群の遺跡分布



第5図 相模野第V期（L1H層）槍先形尖頭器石器群の遺跡分布

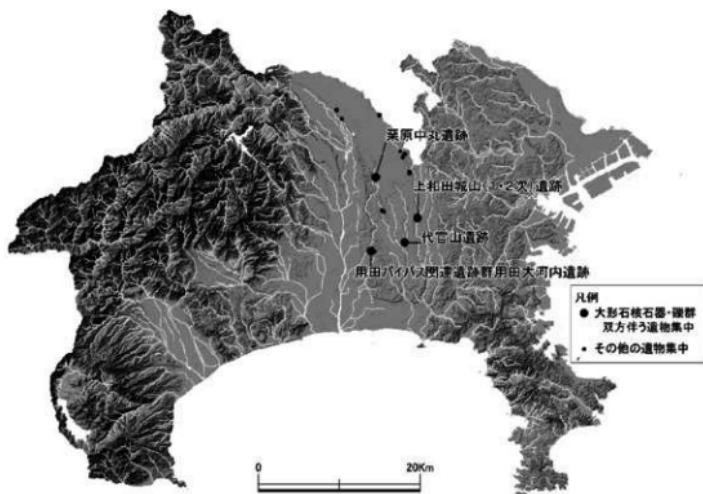


第6図 相模野第V期（B0層）細石刃石器群の遺跡分布

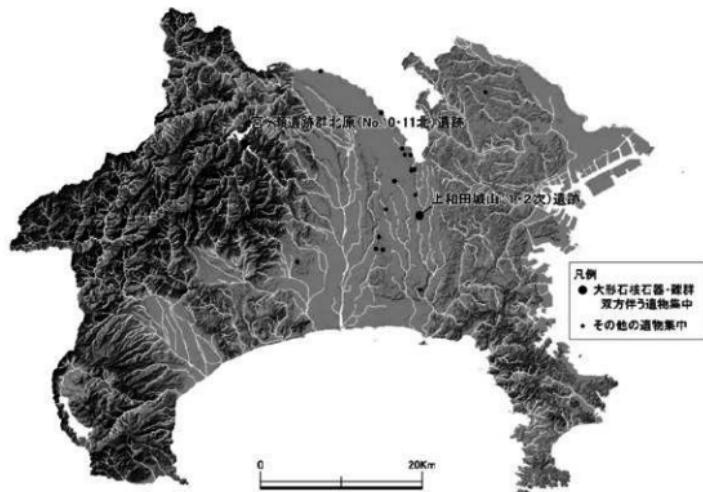


第7図 相模野第V期（B.O層）槍先形尖頭器石器群の遺跡分布

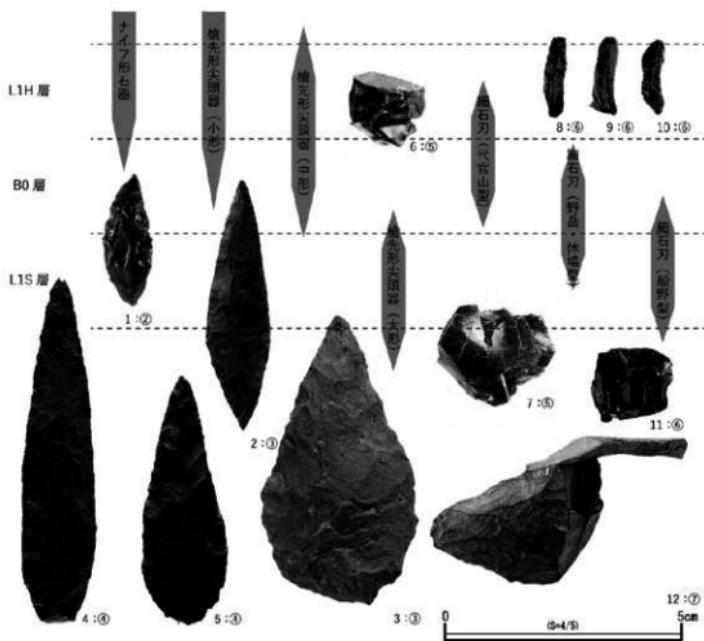
神奈川における旧石器時代の遺跡立地



第8図 相模野第V期（L1S層）細石刃石器群の遺跡分布



第9図 相模野第V期（L1S層）槍先形尖頭器石器群の遺跡分布



写真の丸数字は各種石器群の番号に対応
1～3：西富岡・長竹、4・5・8～11：柏ヶ谷長ツサ、6・7：吉岡B、12：月見野上野1
発掘調査報告書写真より転載

第10図 相模野第V期の石器群

L1S層 細石刃石器群

16遺跡のうち、「拋点的な遺跡」は4地点である（第8図）。

「拋点的な遺跡」の分布は、相模野台地の中央部から南部にかけて中小河川毎、間隔を保って位置している。

「小規模な遺跡」については相模野台地中央部から北部にかけて展開している。

分布領域は相模野台地以外には認められない。

L1S層 槍先形尖頭器石器群

21遺跡のうち、「拋点的な遺跡」は2地点にとどまる（第9図）。

分布は、「拋点的な遺跡」は丹沢山間の宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡と相模野台地中央の上和田城山遺跡（1・2次）のみであり、傾向等読み取ることは出来ない。一方、「小規模な遺跡」は伊勢原台地のほか、下末吉台地にも点在している。

分布領域は、相模野台地のほか伊勢原台地や、丹沢山間部、下末吉台地など広域に亘るよう見られるが、「小規模な遺跡」の中には、単独出土の槍先形尖頭器が含まれていることも考慮する必要がある。

小結

今回は相模野台地の層序区分に基づいて遺跡を集成・検討を加えた。

細石刃石器群では、L1H層の段階で相模野台地や県西部に距離を持って分布していた「拠点的な遺跡」が、B0層段階で相模野台地に多くの遺跡が認められ、L1S層段階では相模野台地中央部にまとまっていく様子が地図にプロットされた。一方「小規模な遺跡」はL1H層の段階では、「拠点的な遺跡」の周辺に分布する傾向が認められていたものが、B0層以降では見えづらくなる状況になっている。

槍先形尖頭器石器群では、L1H層の段階で相模野台地や丹沢山間部、伊勢原台地など広く展開していた「拠点的な遺跡」が、B0層段階では相模野台地中央部に分布域がまとまってくる様子が伺え、L1S層段階では相模野台地中央部と丹沢山間部にそれぞれ1地点となることを空間的に把握することができた。

「小規模な遺跡」についてはL1H層やB0層段階では、「拠点的な遺跡」の周辺に分布する傾向が認められていたものが、L1S層では「拠点的な遺跡」が激減する中、相模野台地のほか、丹沢山間部や伊勢原台地、下末吉台地へと分布域が広がる様子を看取することができた。こうした遺跡の消長が顕在化できる可能性を見出した今、今後の展開として、細石刃石器群で認められる「代官山型」・「野岳・休場型」・「船野型」とする3系統の石器群、槍先形尖頭器石器群での相模野第IV期からの系譜を持つ黒曜石製の槍先形尖頭器やL1H層より出現する中形の非黒曜石製槍先形尖頭器、L1S層から出現する大形の非黒曜石製槍先形尖頭器など、各系統の石器群の特徴を主体に見ことにより。さらなる顕在化が目指せるものと考えている。

本稿では提示しなかったが、細石刃石器群と槍先形尖頭器石器群が共伴する事例についても、上記系統毎の融和性などを見いだすことによって顕在化できる可能性があるものと考えている。

(三瓶)

遺跡立地の類型と疊群

第III期（78遺跡文化層）：拠点（大規模）遺跡等大半の遺跡は相模野台地南半部に位置し、伊豆箱根連山黒曜石製石器も同様の分布を示す。第IV期（119遺跡文化層）：疊群を配備する拠点遺跡はランドマークに位置し、前半期の相模川主流域環状分布から後半期の支流域線状分布へと変化する。第V期（137遺跡文化層）：拠点遺跡はランドマークに位置し、小規模遺跡は支流の下流域と合流部、段丘中段面以下に立地する（大塚・脇・三瓶 2020）。以上が相模野台地の334遺跡文化層の遺跡立地の傾向である。Ⅲ期・Ⅳ期は石器点数と疊群の有無、Ⅴ期は主要器種・疊核石器・遺構の有無を各々区分基準とし、石器石材組成を併せた分析結果である。

ランドマークとは象徴景観を形成する土地であり、象景地である。言いかえれば「いくつかの河川は、現在よりあさく、よりせまい谷であったことは確實である。この谷の見晴しのよい、とりつきやすい場所に、無土器時代の人たちはこのんで居住の地を求めていたのである」(岡本・松沢1960 pp.11)。また、相模野台地における遺跡分布は、各谷の上流域、合流部の「密集域」、「散在域」、「空白域」(小野・高橋・矢島・鈴木1971 pp.41)として遺跡群分析の緒としている。

各時期の遺跡立地は相模野台地を形成する相模川本流と支流を臨む台地上の平面的な位置とその特異点を分析の視点としている。そのため同一の遺跡文化層であっても異なる段丘面単位、あるいは同一段丘面での遺跡立地の異同には言及されていない。IV期前半の相模野台地中央から南半部の「流域遺跡」と台地中央から北半部の「大形流域遺跡」(島田1998)としてナイフ形石器の大きさと集中地点単位の重複と偏重性の分析とも異なる。また、流域河川単位に遺跡立地の丘陵地形差「山頂緩斜面、山麓緩斜面、谷側の緩斜面、急斜

面、中位段丘面、下位段丘面、谷底平野」(比田井 2005 pp.48)を検討した結果とも異なり、微細地形差によるセトルメントの変異（鹿又・里村・木村 2018）についても捨象している。

しかし、第Ⅲ期の「河川合流地点の遺跡分布」(大塚前掲書pp. 11)、第Ⅳ期の「吉岡遺跡群・用田鳥居前遺跡周辺の地形、大和配水池内遺跡、下鶴間長堀遺跡、長堀南遺跡周辺の地形」(脇前掲書pp. 29)、第Ⅴ期の「L1H層の細石刃石器群・L1S層の細石刃石器群（拠点遺跡と小規模遺跡）」(三瓶前掲書pp. 62)は微細地形図を掲載している。現況河川とともに現在では埋没谷となった微細地形を表現しているため、遺跡選定の地相、すなわち遺跡群を構成する遺跡立地の形成理由を探ることができよう。

遺跡立地 7 類型(砂田 1996・1997)は、第Ⅲ期における河川流路の平面形態に遺跡選定の方位を組み合わせ、石器出土点数に概ね合致した類型化である。上記の河川流域立地と微細地形立地を比較すると、Ⅲ期：F型からB・C・D型へ、Ⅳ期：F・G型からA・B型へ、V期L1H層：D型中心のA・C・F・G型からA・B型中心とC型、同L1S層：F型中心とB・G型がA・B型中心とC型へ変化する。各時期は一方向にのみ谷を臨む狭域テラス（DEFG型）が、本来は三方向に谷を臨む広域テラスA・B・(C)類型を明らかとする。

さて、遺跡の立地研究の課題は、同一遺跡の重複文化層の形成理由、遺跡文化層単位の形態学式論の検討、立地河川の流速と淀みの状況把握、古気候と動植物環境の実態、これらの課題を統合する微視的な遺跡群の形成論であった（砂田 1996 pp. 320）。今回のセミナーでは縦群の併存が大規模拠点遺跡を反映する生活遺構であることをあらためて確認した。

遺跡立地の考察は、「炭化物集中・縦群・石器ブロック」を「世帯認定の3点セット」として「暮らしの基盤である土地を理解すること」(鈴木 2020 pp. 93)に思いを馳せれば、より深味のある遺跡形成論へと昇華するに違いない。

(砂田)

まとめ

石器器種や石器石材、縦群などの遺構を分析対象とし、相模野旧石器編年第Ⅲ期から第Ⅴ期までの遺跡立地を見てきた。各時期の遺跡は、従前からの指摘とおり中小河川沿い展開し、各時期が複合した「定点的な遺跡が認められる（安藤 1985）。定点的な遺跡は、水源部や河川最上流部や舌状台地上に立地しており、景観という視点において、地形的に特徴的な場所で、「ランドマーク」と呼ばれる（樋口 1975、長崎 2001）。

これらの遺跡は重層的な出土はあるものの、第Ⅳ期前・後半、第Ⅴ期の細石刃石器群と槍先形尖頭器石器群などの石器群の変化によって、出土数や組成が貧弱である場合があり、定点的な遺跡として存在していても、そこでの遺跡形成に差異が認められる。形成の違いは、当時の人々の諸活動の違いによるものである。「拠点的な遺跡（第Ⅳ期では重要な遺跡）」と「小規模な遺跡」の分布の変化は、これを示していると思われる。

今回の分析方法では、環境、植生、地形などを考慮していない。また、遺跡を単位として扱ったため、遺跡内部における各石器集中部形成やその立地についても見ることはできおらず、課題が多い。今後は、多方面からの検討を行い、当時の生活痕跡である遺跡とそれを残した人々の活動の復元を行っていきたい。(脇)

*引用参考文献については紙面の都合により今年度は割愛する。

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ

-後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その11-

-神奈川県とその周辺地域の様相（下北原遺跡第14号敷石住居址出土資料の編年的な位置付けをめぐって）-

縄文時代研究プロジェクトチーム

1.はじめに

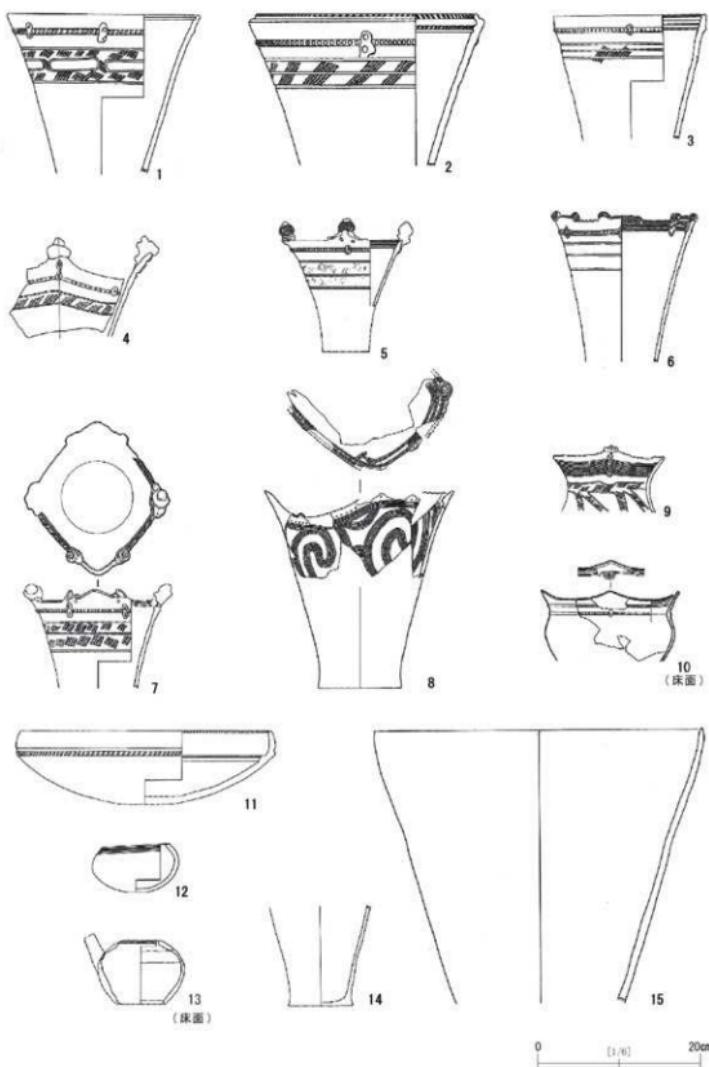
本プロジェクトでは、2009年度から2018年度にかけて、堀之内式土器文化期の様相について検討を行った。昨年度は、「かながわの土偶」をテーマとしたが、これは近年、注目される新資料の発見や、縄文時代後期集落の調査事例が多く資料数が増加していることを受けたものであった。これまで、本プロジェクトでは時期毎の県内資料の集成と分析を継続してきたところであり、引き続き加曾利B式土器文化期の様相について検討を行うところはあるが、後期前葉から中葉に分析対象となる時期をすzめるにあたって、まずは時間軸の基礎として土器編年を再検討しておきたい⁽¹⁾。県内には、堀之内2式土器と加曾利B1式土器の境界についての議論（大塚1983、石井1984、秋田1996など）で、たびたび取り上げられてきた下北原遺跡14号敷石住居出土資料（鈴木ほか1977）があり、これを分析の端緒としたい。次に、東日本を中心とした各地域において、後期前葉から中葉にかけての土器編年研究がどのような視点で捉えられているのか、代表的な論考や報告書等を取り上げて概観する。神奈川県および周辺地域の該期の土器群の成り立ちや構造の分析から、加曾利B1式土器の成立要件について考察し、堀之内2式土器と加曾利B1式土器の境界を考える一助とする。

(註)

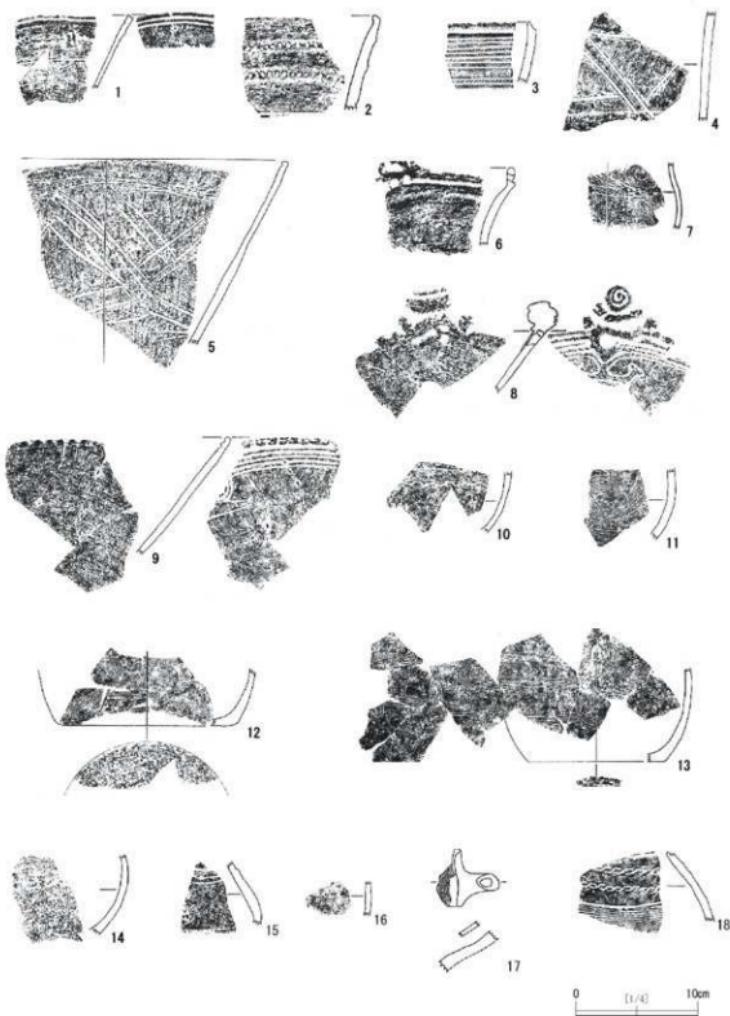
(1) 堀之内2式土器の編年については、すでに2013年当財団発行『研究紀要18』で提示しているところであり、基本的にはこれに従って分析をすzめる。また、同論考のなかで下北原遺跡14号敷石住居出土資料についても分析対象としており、堀之内2式「新段階後半」に位置付けている。今回の再検討は、各地域の研究動向を踏まえたうえでの同資料の位置付けの検討を行う。

2. 下北原遺跡14号敷石住居址出土資料について

元報告（鈴木1977）では、第14号敷石住居址土器群（以下、下北原14住資料）は大半が、第7群「縄文後期中葉の土器」（「加曾利B1式期」）に分類されているが、第1図1（報告書では図版第93-1）、第2図1・5～7は第6群（「縄文後期初頭の土器」）に含められ、「堀之内II式」に属するとされた。石井寛氏は堀之内2式の細分を論ずるなかで（石井1984）、下北原14住資料について触れ「私は鈴木正と同様、加曾利B1式初頭と考え」とし断定的ではないが、石井氏の堀之内2式に後続との判断を示した。さらに、第1図1（石井論文では第26図229）については、堀之内2c、2d式？に分類し「この一個体を混入とすれば混乱はある程度回避されるが、」と述べ抜いに慎重な態度を示した⁽²⁾。石井氏が言及している鈴木正博氏の加曾利B1式初頭（「加曾利B1a式」）は『日本先史土器図譜』（以下『図譜』）図版23の段階（「平行横線文の段階」）とされている（鈴木1980・1981）。この段階には、口縁部の降帯はほとんど消滅したが、一部に繼承する系列があり「加曾利B1a式相系列」と呼んでいる。さらに、「加曾利B1b式」には「区切り縦線文」が出現する段階とする。これに対し、大塚達朗氏は、「加曾利B1式の初頭である「1a式」には区切り手法をもたない横帶文を持つ土器すべてを想定しているが、堀之内2式を含んでいるように思われる。」



第1図 下北原遺跡第14号敷石住居址土器 (1)



第2図 下北原遺跡第14号敷石住居址土器 (2)

との見解を示し、図版23の段階を加曾利B1式初頭とした場合、「1 a式」には、それ以前を含んでいるとの判断を示し、下北原14住資料を堀之内2式終末段階に置く。また、田端遺跡の土坑出土資料をあげ、横帯文のみの土器と横帯文を区切る例が共伴する例が多いとした。(大塚1983)

秋田かな子氏(秋田1996)は当該資料を床面出土と覆土出土のものを分けて評価し、前者については「堀之内2式で問題ない」としたうえで、後者資料に注目する。秋田氏の堀之内2式から加曾利B1式土器への変遷觀は、精製深鉢形土器の口部形態・突起形状の変化、単位文なし区切り文のあり方、内面沈線の位置変化を中心として組み立てられている。この視点から、覆土出土資料を堀之内2式終末とする。また、「石神類型」(下北原第7群第1類H・J・K型を中心)に着目し、「区切り文というものの大元は、堀之内2式と“石神類型”が交渉する中から取り込まれていくのではないか」と述べた。下北原14号資料の精製深鉢について「単位文を持たない横帯紋」が特徴的であり、区切り文が顕在化する段階を加曾利B1式古段階との考え方を示した。堀之内2式終末段階の「石神類型」との交渉を示す資料として、口縁部下に多条の横線を巡らせたような装飾(「横線帯」)をもつ資料(第1図9)を取り上げている。「横線帯」は堀之内2式の刻みを有する隆帶と対応するのではないかとする(註1)。

堀之内2式と加曾利B1式の境界問題の議論に関して、下北原14住資料の評価を概観したが、『図譜』図版23を加曾利B1式初頭の標識として(註2)、区切り文を持たない横帯文の顕著な段階設定の可否・連続性、そして区切り文の出現の経緯についての検討に進展している。

(註)

- (1) 石井氏も触れていたように2d・2e式については一括資料が少ないという課題が残されていた。
- (2) 秋田氏は関東地方における「石神類型」の在り方を(秋田1997)で再論している。
- (3) 福田貝塚出土の注口土器の型式認定についての議論(秋田1994、鈴木1995)は、標識資料の理解方法におよんでいる。

3. 周辺地域の編年研究動向

■南関東東部

新屋雅明氏の論考(新屋2015)および、これに対する大塚達朗氏の評価(「解題」(大塚2015))を取り上げ、当該期の土器編年研究について概観する。なお、新屋氏の論考については前節では触れていないこと。また、氏の論考は寿能泥炭層遺跡出土資料を検討するなかで考察されたものであること、大塚氏の解題の内容は「第9回縄文セミナー」での議論の問題点にも及んでおり、新屋氏の方法論とともに土器編年研究の方向性理解が端的に示されていること等から変則的ではあるが、ここでみていくこととする(註3)。

新屋氏は、堀之内2式から加曾利B1式への平行沈線文土器の変化を模式図(第3図)として提示した。ここでは、器形・口縁部形態・内文の発達・口唇部への加飾等が変遷を捉えるうえでの特徴とされる。1段階は平行沈線文以前の段階、2段階「荒立段階」(『図譜』図版58)、3段階「下北原第14号敷石住居段階」、4段階「高田・矢作段階」(『図譜』図版23)、5段階「権現台・廻戸段階」(『図譜』図版24)として、各段階の標識的な資料が示された。堀之内2式と加曾利B1式



第3図 堀之内2式から加曾利B1式への口縁部形態変化の模式図(新屋2015)

の境界については、『図譜』の設定基準にもとづき「荒立段階」を堀之内2式、「高田・矢作段階」を加曾利B1式に位置付けた場合、その中间に位置する「下北原第14号敷石住居段階」が問題となるとし、「高田・矢作段階」における関東地方全域での齊一性の傾向を重視し、下北原14住資料を堀之内2式末に置いた。また、同資料については、注口土器の文様モチーフと描出法に着目し、14住資料では「櫛歯状工具によって自在にモチーフを描く」のに対し、同遺跡第1環方形配石遺構出土の注口土器では「沈線が用いられること」「底部付近に横位に区画を施している手法が確立してくる」との差異を指摘している。さらに、14住資料の注口土器のモチーフと描出法は深鉢形土器（第1図8）にも採用されているとしている。この横位沈線による区画は、後年、鈴木正博氏が「単横線区画の多条束線連続入り組み文」（鈴木1995）と呼んだ資料と共通する特徴である。さらに、鈴木氏は『図譜』図版23の注口土器にみられる区画が「多条束線」によって描かれるものを「多条横線区画の多条束線連続入り組み文」と命名し、加曾利B1式の典型（標識）と捉える。『図譜』図版22の資料については、秋田かな子氏による独自の詳細な分析から堀之内2式の後半に位置付ける考えが提示されている（秋田1994・2015・2016）。これらは、下北原14住資料の評価への接近方法として重要な視点となっており、また各自の思考法方法と手法の差異が明瞭になっており、解消し得ない課題として残されている。

大塚達朗氏は「解説」（大塚2015）のなかで、新屋氏の「組成論的な立場」からの分析姿勢を評価し、異なる器種間の「横断的な連絡具合を分析すること」に力点を移していく新屋氏の思考方法に可能性を見出し、研究者各自の視点（都合）により「一括遺物が使いまわされる事態（自己言及性）」を批判した。大塚は、「記述の束」を積み重ねることによっては、概念の実体化ははかれないと主張する^(注2)。

（註）

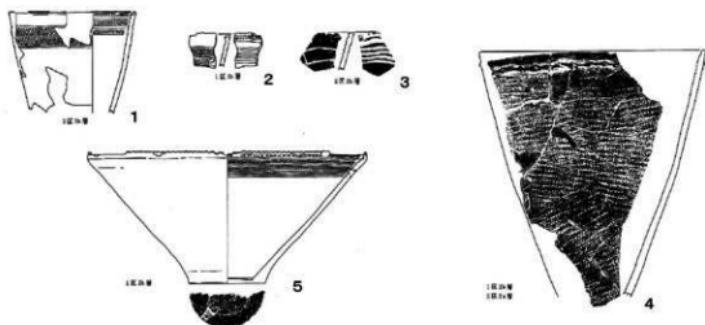
- (1) 新屋氏の論考は「初出一覧」等によれば、1985年に國學院大學文学部史学科博士課程修士論文として提出されたもので、2節を取り上げた論考が相次いで発表され、加曾利B式編年を中心とした議論が盛んにおこなわれた時期に執筆されたものと考えられる。
- (2) 大塚達朗氏は、前出の論考（大塚1983）について「拙論は、当時筆者の指導のもと寿能泥炭層遺跡出土加曾利B式土器資料整理に参加してくれた新屋氏ら学生諸君にとって参考になればと考え、まとめたものである」（大塚2015）と論文執筆の目的を明らかにしている。また、大塚氏は山内型式論の検討をつうてその前提となる漸進的変化と異所的布置、そこから招来される細分主義の方針に疑問を呈し、この方針を「私もかつて真に受けたことがあった。」（大塚2000）として、（大塚1983）をあげている。山内型式論という準拠枠における細分主義は埴輪土器が一系統であるとの別の謂であること（葛原論法）を主張し、型式の実在性が保証されない事態が生じるとする。

(山田)

■東関東

東関東の堀之内式2式土器と加曾利B1式土器の境界に関する論考としては菅谷通保氏が南関東部後期中葉土器群の様相（菅谷1996）を論述する中で千葉県の資料を取り上げている。以下に要約する。

菅谷氏は『図譜』掲載の資料中の「堀之内新型式」と「加曾利B式（古い部分）」を繋ぐ資料として千葉県市川市堀之内貝塚の昭和26年調査資料と埼玉県春日部市神明貝塚出土の土器を挙げている。これらは「口縁下の刻みをもつ隆帯が消失し、胴部紋様帶が多帯化しかつ幅狭となり、内紋の幅が拡大しやはり多帯化して直線的に巡る」点で菅谷氏が堀之内2式新段階とした『図譜』図版58-1・2、東京都日暮里延命院貝塚第6段階貝層、神奈川県下北原遺跡14号敷石住居址よりも後出であるとしており、下北原遺跡14号敷石住居址を堀之内式土器とともに加曾利B1式初頭として提示している。またこれらは「口唇部が直線的に外反し「く」の字状の外縁削ぎ落としが見られない」点で『図譜』で「加曾利B式（古い部分）」とされた



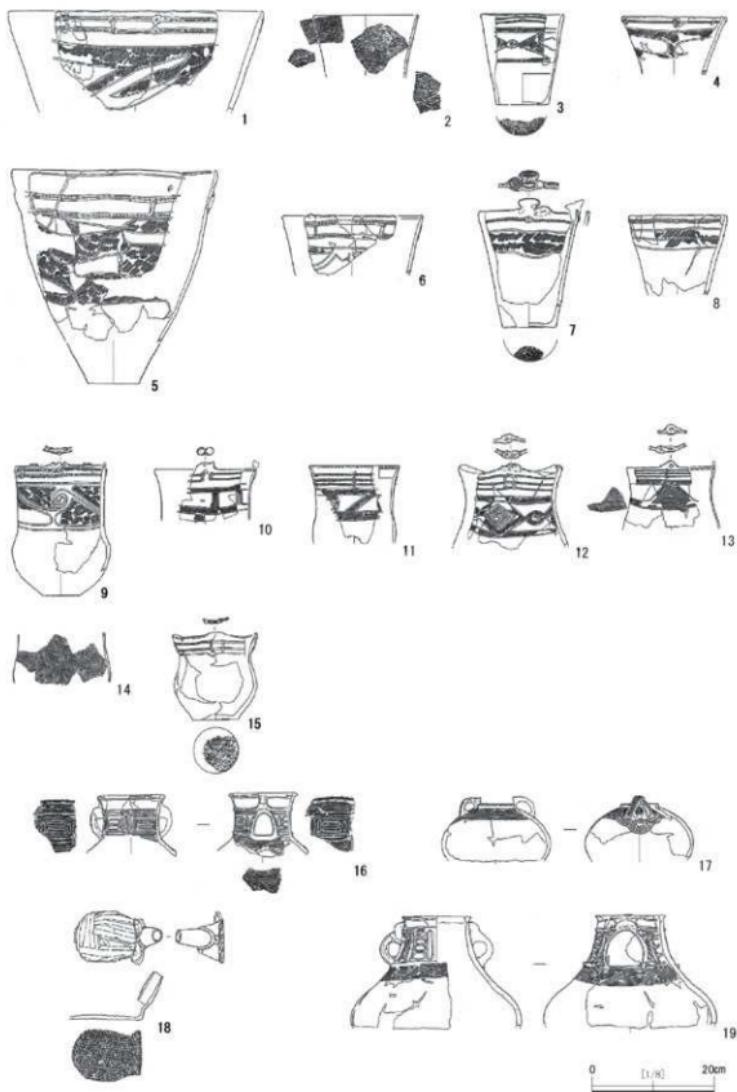
第4図 千葉県市川市堀之内貝塚 昭和26年調査資料

図版23-1の高田貝塚例より古相を示すとしている。これらには胴部紋様中に単位紋は見られないが、千葉県堀之内貝塚の昭和26年調査資料には第4図2・3のような「区切り紋の祖形は既に出現している」と考えられ、横帶のみの胴部紋様は同時に存在する」と考えており、この一群の土器を堀之内2式・加曾利B1式のいずれに含めるかについては『図譜』図版23-1の高田貝塚例の「内紋の構成が成立した段階として加曾利B1式初頭に置くのが筆者の考え方」として加曾利B式に含めている。ただし、「今のところこの種の土器は西関東寄りの分布の偏りを見せており、北東関東の様相如何によっては、堀之内2式に編入することにやぶさかでない」と述べ西関東寄りの地域性を示唆しつつ、堀之内2式に編入する可能性についても述べている。

『研究紀要18』(縄文プロジェクト2013)において神奈川県内の堀之内2式の編年を行う中で、あくまで便宜的とした上で堀之内2式と加曾利B1式との境界を「精製土器の口縁部を飾ってきた紐線文と8の字添付文の消失と、横帶文を除いた斜行文・三角文をはじめとする各文様系統の途絶、あるいは無単位横帶文への收縮へ、また堀之内1式から2式へと存続してきた下北原系土器の消失に置く」ものとしている。この基準は堀之内2式の編年に主眼を置いていたものであり、加曾利B1式において消失する堀之内式の要素を述べたもので加曾利B1式になって加わる新要素については十分に述べられていないが、紐線文とした口縁下の隆帶の消失を基準の一つとしていることは菅谷氏の論考と共通している。一方で菅谷氏が加曾利B1式初頭の様相とした文様帶の多帯化や、区切り文の成立については述べていないが少なくともこれらを堀之内2式の新段階後半の要素とはしておらず、菅谷氏の論考と概ね変遷観が一致するものと思われる。

また阿部芳郎氏は「堀之内2式土器の構成と地域性一下総台地における堀之内2式土器成立期の様相」とした論考(阿部1998)の中で堀之内2式を3段階に細分しており、2c式とした終末段階に千葉県船橋市宮本台貝塚第2号住居跡、茨城県土浦市上高津貝塚A地点第XVI2層出土の土器をあげている。宮本台貝塚第2号住居跡からは刻み目を有する横帶と8の字添付文を有するが口縁部の文様帶が幅狭化した朝顔形の深鉢が出土し、上高津貝塚A地点第XVI2層では同様の土器に内文が認められており、概ね下北原遺跡14号敷石住居址と併行関係にあり、菅谷氏の論考と同様な変遷観をとるものと思われる。

(菅谷)



第5図 林中原I遺跡SI01出土土器

■北関東

北関東をめぐる研究動向については、1996年から『後期中葉の諸様相』、『後期前半の再検討』および『縄文後期土器の研究と現状』と題して群馬県を会場に検討されてきている（縄文セミナーの会1996・2002・2012）。この中で、秋田かな子氏により提唱された「石神類型」（秋田1996）は、暫定的に長野県小諸市石神遺跡J19号住居址出土資料に基づいて設定されたが、その発生や変遷にはなお不明な点が多いとされていた（秋田1997ほか）。近年、鈴木徳雄氏は吾妻川流域を主に西毛地域から浅間山麓地域において出土例の多いことや、系統的な変遷がたどること等から同地域での形成を推定している（鈴木2012・2018）。このような見方には、秋田氏も同様な見解を示している。（秋田2016）広域に分布する「石神類型」は関東地方では堀之内2式（後半）との共伴事例も多く、各地域の類型の生成と相互関係に影響を及ぼしていると考えられ、また下北原14住資料中にも関連をうかがわれるものがあり（第1図8、第2図10～18）、同資料の編年的な時期決定のみならず、地域間の同調関係を解明する手掛かりとして重要な問題提起となっている。また、群馬県西部から長野県・新潟県の一部を中心に分布するとされる、仮称「林中原型」深鉢が鈴木徳雄氏により設定された（鈴木2012）。「林中原型」は、口部に8字状貼付文を伴う複数条の細隆起線帯をもち、体部は膨張して無紋であり、底部は突出しない。網代底を持つ平底を呈するという特徴を有する。底部の立ち上がりについては、標準的な朝顔形深鉢とは異なっており、「小仙塚類型」につながる深鉢の体下部の形態との連続性が推定されている（鈴木前出）。

下北原14住資料中、第1図9について秋田氏は「“石神類型”自体」と評価し、横蒂文の施文される朝顔形深鉢を主体とする同資料に“石神類型”そのものが伴う事例と捉えている。さらに、8については“石神類型”的指標とした多条沈線が朝顔形深鉢に採用された資料と考えている（秋田1997）。秋田氏の指摘は中部地方との注口土器の共有を含め、“石神類型”的影響が様々な形態をとることを示した。第5図は群馬県長野原町に位置する林中原I遺跡で検出されたSI01出土土器の一部である。かながわ編年（縄文時代プロジェクト2013）では堀之内2式中段階から新段階に位置付けられると考えられる。1～8は、朝顔形深鉢で胴部に施文されるモチーフは編年的位置を示すものと考えられる。底部は張り出さず、口縁部の外傾は弱い個体が多い。これは、中部の項での指摘と共通する。9～15は“林中原型”深鉢である。15は、下北原14住資料（第1図10）とは、緩い波状を呈する口縁部形状、頸部がくびれ、この上部に刻目が加えられた横位の隆帯が貼り付けられる点、胴部は膨らむ器形を呈する等、類似点が多い。第1図10は鉢形に近い器形をとり、また口縁部内面に刻目がみられるなど内面文様が発達しており、相違も指摘される。16～19は注口土器で有頸（16・19）と無首（17）のものがある。18には石神文様が施文されている。第1図10～18と共通する。

(小島)

■中部

堀之内2式新段階を中心に、中部地方について長野県と山梨県に分けて確認するが、ここではとくに「石神類型」に注目する。

まず、長野県について綿田弘実氏により提唱された「ひんご2式」を通してその特徴を抽出する。綿田氏は近年、長野県下水内郡栄村豊栄に所在する、ひんご遺跡の成果にもとづき、堀之内1式併行の土器を「ひんご1式」、同2式併行を「ひんご2式」と命名し、その内容を示した（平林ほか2018、鈴木2018）。このうち、ひんご2式はSB12出土土器にもとづき設定されたものである。SB12出土土器は、神奈川編年の堀之内2式中新段階に位置づけられる一群である（縄文プロジェクト2013）。綿田氏によると、朝顔形深鉢に近似するもの



第6図 長野・山梨県の関連土器(上段:長野県ひんご遺跡、下段:山梨県関連資料)

の口縁部の外傾が乏しい直胴形深鉢が多く、菱形文・三角文が描かれる（第6図31-19～22）。これに栗林類型（31-17・18・23・24）や南三十稻場2式の元屋敷類型が共存する。粗製土器に無紋土器が多くを占めるのは長野県側の影響とされる。ひんご遺跡では、堀之内2式土器を第6類とする。その新段階とされる土器には、宝珠状突起や内面文の発達が認められ（44-131・45-133・46-151）、関東地方にみられる底部が外側に張り出す器形（31-21）とともに、長野県に特徴的な湾曲のないバケツ状器形（31-20・39-80・44-129・44-131）が多い（直胴形深鉢）。口縁部文様帶は関東に共通するものの、胴下半部が丸みをもつ器形「林中原型」も多い（40-86）。45-133は波状口縁内面に沈線帯と雲形意匠を描き、6類の新段階に位置づけられる。45-140には口縁部に刻み隆帯がなく幅狭い4段の縄文帯が巡り、内面に沈線帯がある。45-146は、緩い波状口縁で、2段の縄文帯が巡る。この2点は6類終末段階とされる。第7類の石神類型は、堀之内2式後半に併行し、浅間山麓の群馬県側、長野県側から千曲川流域に分布の中心があるとされる。7類には、深鉢として、口縁部が外反し胴部下半部が丸みをもつもの（A器形、33-40・38-77・40-92・45-143）と、バケツ形を呈するもの（B器形、30-1・45-134～138）の2種がある。A器形が第6類の林中原型深鉢、B器形が直胴形深鉢を継承する。これらは、口縁部に多条の細隆線、集合沈線による横線帯、胴部に長方形、三角角、環状の意匠を連鎖状沈線で描く。口縁部に集合沈線を施す厚手・大形土器も少なくない（平林ほか2018、p.71）。45-134・136・137・143は、刻み隆線、文様に縄文を施すなど、6類の特徴を残す古手の個体である。横線帯と連鎖状沈線は、45-134・135に櫛齒状工具、その他に単沈線で施される。45-134・138の横線帯と並走する沈線間列点文は、6類の刻み隆線を転写、移動した文様とされる（平林ほか2018、p.86）。

これらをまとめた総括にてつぎのような特徴が示される。堀之内2式新段階に併行するものとして、栗林類型が浅鉢に近い形態をとり、無文が多い（30-4・38-74）。深鉢は文様体幅が狭まり、口縁部の3単位突起と内面文様が発達する（44-131・45-133・140）。堀之内2式中段階後半に粗型が現れた石神類型（第7類）は、新段階に発達し、堀之内2式的な土器（第6類）を上回って有文土器の主流を占める。この類型には、林中原型深鉢の器形を受け継ぐA器形と、直胴形深鉢からのB器形がある。薄手で精製度が高い小形土器が主流であるが、本遺跡には中・大形深鉢（40-87）もある。この時期には、内面文様が発達した浅鉢と、石神類型と共に文様を描く注口土器と蓋形土器が多出する。從来石神類型は、浅間山麓が分布の中核地域と考えられてきたが、そのなかでも法量・器種が多様で、有文土器に占める割合が高いのが本遺跡の特徴とされる（平林ほか2018、p.130）。

山梨県に目を向けると、三田村美彦氏による『山梨県史』で示された堀之内2式新段階は、朝顔形深鉢の体部文様が幅狭となり横帯化が徹底され、口縁部内面に沈線をめぐらせるもので、長野県や神奈川県に共通した様相をもつ（三田村1999、縄文時代プロジェクト2013）。『山梨県史』にて堀之内2式新段階とされた遺構から出土した深鉢には、内文をもつものがあり（第6図1・4・10）、姥神16号土坑（9）のように多条細沈線が施されるものに、姥神16号土坑（10）で無文化・大形化するものが共存する。また、無文化の傾向は、1、2、4にも認められる。5、6、8、9が石神類型にあたる。注口土器では、社口19号住（3）にみられるように頭部が発達するものと、頭部の発達が認められないものがあり、後者が加曾利B1式期につづく。

上記の分析および秋田かな子氏などが示す石神類型は、いずれも堀之内2式後半段階に位置づけられる（秋田1997、三田村1999、平林ほか2018、鈴木2018）。なかでも堀之内2式新段階に共存する石神類型の存在（第1図9）は、下北原遺跡14号住居址から出土する石神類型を含む土器の位置を示唆するものといえよう。

(阿部)

■南東北

南東北における堀之内式土器から加曾利B式土器への変遷については、福島県いわき市愛谷遺跡の出土資料を使って大枠の理解を普及させた馬目順一氏の報告が知られている（馬目1982）。馬目氏は、南東北（特に福島県域）における縄文後期前半の土器編年として、在地の土器型式である網取I式（後期初頭：称名寺式併行）→網取II式（後期前葉：堀之内I式併行）→堀之内2式（後期前葉）→加曾利B式（後期中葉）という大枠の変遷を示して、いわき市愛谷遺跡の出土資料からも具体的な変遷が追えることを図示した（第7図）。特に、堀之内2式土器から加曾利B1式土器への変遷に関しては、南東北では独自型式の設定に至っていないこと、関東地方との関連性の強さを強調している。堀之内2式段階では、薄手小型の土器が多くなり、胴部下半を無文帶とし、胴部上半には沈線を多く加える壺形土器、沈線と沈線の間に小刺突を加える土器、磨消繩文が大難把に付けられる土器が出現していくという。やがて口縁部に1条から2条の突帯を巡らし、外側は無文、内側に多条沈線を配したり、磨消繩文が帯状になって弧線で区切られるという変化は、大枠では関東地方とも共通する事象である。同時に、縄文を多用せず、横位連繫の入組文を配するなど北からの影響（仙台湾周辺か北東北からか）と思われる異系統の土器も混在しており、その独自性が指摘されている。加曾利B1式段階においても、帯状の磨消繩文を基調とする傾向は同様だが、磨消繩文に大きな刺突文を加える土器は該期の関東地方には見られない土器であり、これも北からの影響と考えられている。器形に地域性が強く出るという一般的な指摘もなされている。

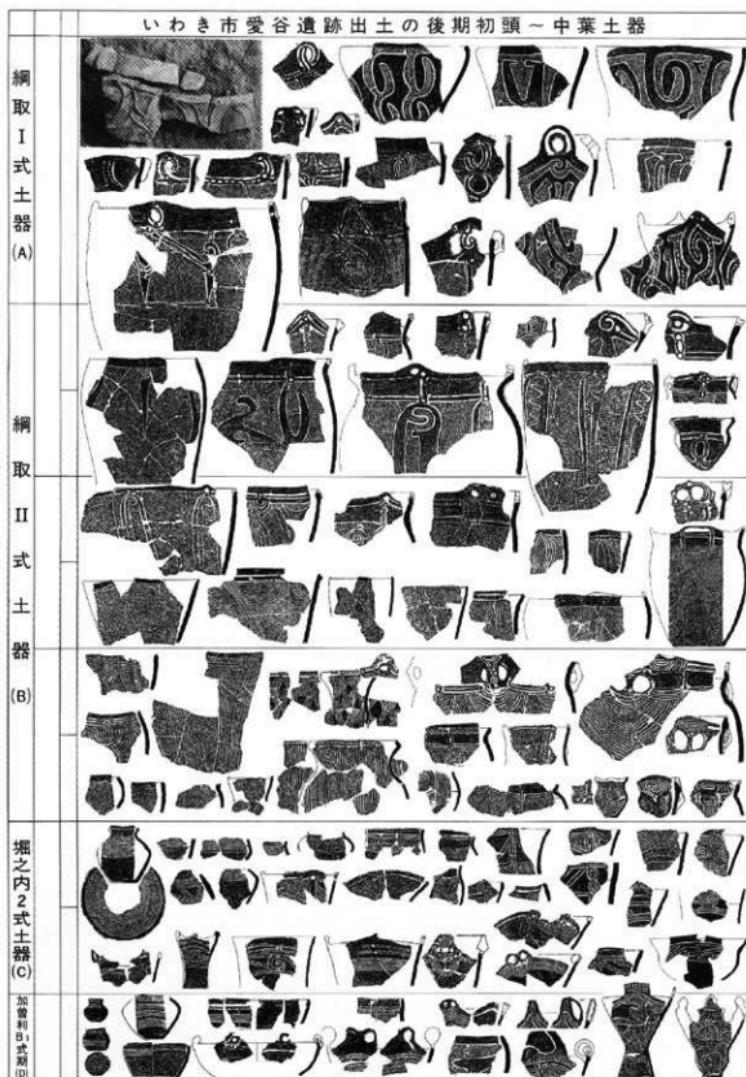
南東北の独自性、独自型式の設定については、古くから鈴木克彦氏（鈴木2005）によって指摘され続けてきているが、あまり広く受け入れられるところまでは至っていない。豊富な資料に恵まれないいわき市番匠地遺跡の出土資料から番匠地式の提唱もなされているようであるが、独自型式はいまだ浸透していないようである。近年でも阿部芳郎氏（阿部2020）によって南東北の独自性と関東地方への影響について論じられており、福島県郡山市町B遺跡出土資料を主体に、堀之内2式土器から加曾利B1式土器への変遷の独自性（地域性）を明らかにしている。堀之内2式土器の特徴の一つでもある口縁部の貼付文についても、細い粘土紐上に縱方向の刻みが連続的に施されるものが多いが、徐々に横方向の刻みが増加し、押捺も米粒状の小さな押捺に変化していくという。口縁部の断面形態も「く」の字状に内折するものは極めて少ない。また、口縁部突起があまり発達せず、突起直下に單位文が配置される点や胴部文様における横帯文の展開も特徴的とされる。口縁部に複数の沈線で文様帯を区画する手法や口縁部直下の単位文が、関東地方における加曾利B式の成立に影響を与えた可能性を指摘している。南東北における堀之内2式土器から加曾利B式土器への変遷については、「一部で関東地方と共通する部分を持ちながらも、胴部紋様の変遷も含めて独自の変遷を遂げている」ことが強調されるのである。阿部氏も将来、独自型式を設定すべきとの見通しを示している。

さて、南東北の資料をもって、下北原遺跡第14号敷石住居址出土資料との直接的関連を指摘することは難しいが、阿部氏が強調するように、地域間における相互関係を把握するという観点から検討を継続すれば、一樣ではない堀之内2式土器から加曾利B1式土器への変遷の実態を把握することができるものと考えられる。

(野坂)

■北海道

北海道において縄文時代後期の土器は、1930（昭和5）年前後に「北海道薄手繩紋土器群」のうちの「前北式」（今日の統繩文時代前半の土器を包括していた型式）の一部と認識されていたが、その後ほどなく縄文時代後期の土器を示す名称として野幌式が提唱（河野・名取1938）された。「関東地方で加曾利B式と呼ばれていた」と記載される。



第7図 いわき市愛谷遺跡出土の縄文後期初頭～中葉の土器（馬目1982）

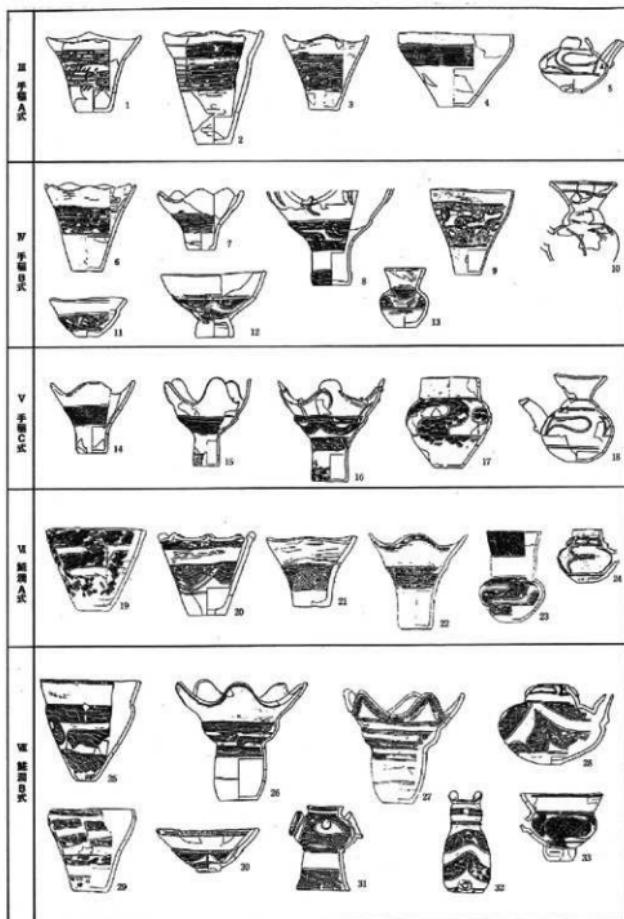
れてゐるものに形式上（原文ママ）類似してゐる土器と、其の祖形を含み、奥羽地方でも亀ヶ岡式より古い所に此の類似形が見られてゐる（名取1939）との記述があり、当初から加曾利B式との影響関係に着目されていたことが窺い知れる。戦後、道内各地で行われるようになった発掘調査による資料の蓄積を受け、徐々にではあるが型式の細分化が進められた。今日、北海道における加曾利B式併行期の土器としては、手稲式（・手稲式・船泊上層式）と鰐淵式（・エリモB式）が挙げられる。前者を加曾利B1式併行、後者を加曾利B2式・B3式併行とする認識が一般的である。いずれも道央圏を中心に分布し、道南地方でも一定数が出土する。一方、道東地方や道北地方では、まとまって出土した遺跡自体が少ない上、道東地方においては手稲式が見られないなど、型式で分布傾向に違いが表れてもいる。

手稲式は札幌市手稲遺跡（大場・石川1956）で出土した資料の再検討を通じ、吉崎昌一氏が提唱した（吉崎1965）。平口縁と波状口縁があり、文様は斜行縄文のみを施すものと、縄文地の上に平行沈線を数条巡らせ、これを蛇行する弧線文が縦に貫くものがある。後者では、胴部上半に文様帶を構成し、口縁部と胴下半部は広く無文であるものが多い。また、丸みを帯びた波状口縁が大ぶりに発達したものもある。深鉢が多いが、浅鉢、壺、注口土器等も一定数があり、オロシガネ状土製品という特長的な遺物がともなうことも知られている。

船泊上層式は礼文島船泊第四遺跡（児玉・大場1952）出土土器の主体をなす土器群（I類の一部およびII～VI類）を一型式としたものである。深鉢形を主体とし、地文の斜行縄文の上に引かれた横走する平行沈線文、これを連結する縦の短い直線の沈線、三角形を連続的に構成する鋸歯状沈線文を特徴とする土器である。手稲式では胴部上半に文様帶が横環するが、船泊上層式では口縁部と胴部に文様帶を巡らせて、頸部を無文帶が横環する。船泊上層式に典型的な文様帶の配置は、もう一段階古い、入江式や大津式（大津VII群）等と共通するものである。こうした諸特徴から、吉崎昌一氏は船泊上層式を手稲式に先行する土器型式として位置づけた（吉崎1965）。

鰐淵式は1931（昭和6）年、松下亘氏が発掘した小樽市鰐淵遺跡の一括資料を元に設定された（名取・松下1969）。すでに設定されていたエリモB式（大場・脣谷1953）に類似しているものの、エリモB式に施されている口縁部の特徴的な突瘤文が見られなかったことから、エリモB式の先行型式の可能性が目されたものである。鰐淵遺跡の出土資料が断片的であったことから設定当初は全体像が定かでなかったが、その後の発掘によってまとまった数の復元個体が得られ、具体的な内容が明らかになってきた。地文に羽状縄文を施すことと、口縁部や頸部のくびれ部分に上下を太めの沈線で区切った中に縦位の刻み列を充填的に施す点で、手稲式とは区分されている。沈線内を充填する羽状縄文については沈線の区画に間わらず横走する。一方、鰐淵式に後続する可能性が指摘されているエリモB式では、区画する沈線の向きに沿って、多方向に羽状縄文が施文される。異形台付土器、釣手付土器など器種が手稲式以上に多彩化することも鰐淵式の大きな特徴である。

手稲式・鰐淵式とも器形・文様は加曾利B式に類似するが、精製土器・粗製土器の違いは加曾利B式ほど明瞭ではない。手稲式において特徴的な平行沈線と縦位の沈線は加曾利B式とおおむね共通するが、鰐淵式において顕著化する縄文帶の文様や配置は加曾利B式と異なる印象がある。また、加曾利B式において顕著な底面の網代痕、平行沈線や貼付による内面施文が絶じて希薄であることも北海道の特徴として挙げられる。堀之内式併行期とみられる涌元式においては底面に網代痕と木葉痕が一定数認められるが、その段階においてさえも、堀之内式や加曾利B式に比べるならば決して多いとは言い難い。これはおそらく堀之内式



第8図 小樽市忍路土場遺跡出土の加曾利B式土器併行土器（鈴木2008）

の影響があまり及んでいないことによる地域的な傾向であろう。

北海道は土壌の発達が遅く、総じて包含層が薄い。何らかの好条件がなければ、出土遺物の新旧が層位的に表れることが少ない。手縫式（船泊上層式）・鮫縫式（・エリモB式）に関しては同様で、型式学的な諸特徴の変遷を、まずは北東北や東日本全体の類例と突き合わせることで、新旧を推考してきた経緯がある。とりわけ手縫式と鮫縫式は同一遺跡同一層から混在して出土することが多く、胎土、焼成も酷似することか

ら、かつては両者を分けずに行われることもあった。しかし、小樽市忍路土場遺跡（道理文1989）では河川堆積によって複数の包含層が形成されており、後期初頭の余市式から船泊上層式、手稻式、鱗潤式、その後の堂林式までが初めて層位的に明らかとなった。そして、加曾利B式併行の手稻式については三段階、鱗潤式については二段階に細分案が示された（第8図）。

船泊上層式については、手稻式より一段古い型式とした吉崎説（吉崎1965）に対して、手稻式と同時期の土器型式であるとする見解もあった（鷹野1978）。船泊上層式はそれ以前の入江式など北海道的な土器の系譜を引きつ加曾利B式の影響が現れたもので、東北地方に展開していた十腰内II群や宮戸IIa式と対比できる手稻式はより本州的な土器であるとして、両者の型式的な相違を時間差ではなく系統の違いに求めたものである。しかし、忍路土場遺跡における層位的発掘の成果を受けて、吉崎説の正しさが裏付けられた形となつた。「船泊上層式がウサクマイC式に後続し、手稻式に先行する土器群であることは前後の土器や層位によって確認された。（中略）今後はもう一段古いものとし、口縁部及び口頭部が完全に無文帶となる時期をもって手稻式とした方が良いのかも知れない。本報告においては手稻式の最も古い段階としておく」（道理文1989）と記載されている。平行沈線文が複数巡るモチーフから、船泊上層式も加曾利B1式の影響を受けていることは間違いないであろう。ただし、現状では、「手稻式の最も古い段階」というより、吉崎説のように一段古い土器型式とみなす見解が広く定着している觀がある。

エリモB式に関しては、鱗潤式に後続するもので、突瘤が主体的に施される堂林式との間を埋める型式とする見解（鷹野1981）がある一方、鱗潤式とエリモB式を不可分とする見解（森田1981）もあり、この点については現在もなお定まっていない。

(影浦)

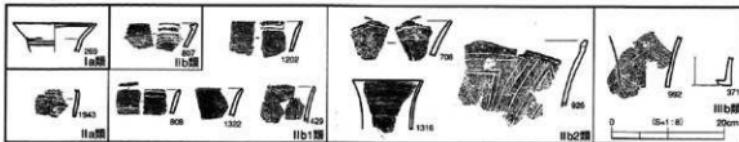
■北陸

北陸地方（新潟県）における堀之内2式末から加曾利B1式並行併行期の土器編年について、品田高志氏による十三本塚北遺跡の報告での分析（品田2001、以下「報告」）を中心として概観する。報告書では、後期土器を系統からA群からL群の12群に大分類し、AからD群土器群の変遷から第II～IV期の時期大別を設定した（第1表）。第IV期はD群の「多条細沈線文系土器」の時期でありa期とb期に細分された。併行関係について、第IVa期は堀之内1式末から堀之内2式のある段階までを想定し、第IV期の後半b期は「堀之内2式後半」と対比させつつも、下限は加曾利B1式まで下る可能性」が示唆されている。第IVb期の土器群については、多条細沈線文が「さらに細線化し、口縁部には平行細沈線文が多帯化して施される段階」を想定している。第1表では、「+「元屋敷20I・21I」」を充当している。ここでは、堀之内2式土器のほか加曾利B1式の可能性のあるもの；K群土器：堀之内2式系土器（第9図）についてみていく。K群土器は、層位的には廃棄場の「上層位となる1～2層」でD群土器と同じ傾向を示しているとされている。同群土器は器形によって、鉢形土器（第I類）、深鉢形土器（第II類）に大別され、胴部破片は第III類として一括されたが、報告書掲載の実測図からは、器形は深鉢形となる土器が多いものと判断される。さらに各類は器形と施文される文様により細分される。

文様は内・外面、口唇部に加えられる。口唇部内面に1～2条の沈線を巡らすもの（Ia類、IIb1類、IIb2類）と、より多条化したもの（「報告」では「内面文が発達したもの」Ib類）がある。また口唇端部に刻目が加えられるものがある。外面の文様は、第I類鉢形土器では、2～3条の平行沈線をめぐらせるもの（a類）、無文、細い沈線文、「斜位短線帶」を作り構成をとるもの（b類）に分類されている。第II類深鉢形土器、第III類では、「胴部上半に縱長の対弧文を横位に連続的に描く磨消繩文」（IIb1類）、「細沈線文帶」、さら

第1表 十三本塚北遺跡土器群変遷試案（品田2001）

時 期 区 分	越後の土器型式名等	標 識 的 資 料	開 東	東 北 南 部	北 陸
十三本塚北中期段階 I	a 中期前葉段階				新崎・上田
	b 中期中葉～後半段階	—			
	c 中期末葉段階	加曾利 B IV	大木10		
十三本塚北後期下層段階 II	a 1 三十幅輪式成立期	万葉寺林SK183	称名寺 1	網取 I 古段階	
	2 三十幅輪式古段階	原J13p7			
	b 三十幅輪式古段階	城之原R24p30	称名寺 2	網取 I 新段階	
		+			
十三本塚北後期中層段階 III	1 三十幅輪式新段階	馬下船場遺跡	堀之内 1 古段階	網取 II 古段階	
	2 三十幅輪式新段階	岩野原10ML1 十三本塚北SKp1734			
	a 古 南三十幅場式古段階	(+ 岩原 II D4p3)			鬼屋 I
十三本塚北後期上層段階 IV	b 新 南三十幅場式古段階	向農 II Clp1 城之原O3p140	堀之内 1 中段階		
	b 南三十幅場式古段階	岩野原RFp6(一部)	網取 II 新段階		
	a 南三十幅場式新段階	アチャヤ下段(一部) 十三本塚北SK932		堀之内 1 新段階	鬼屋 II
十三本塚北後期上層段階 V	b 南三十幅場式新段階	(+ 元原敷20I・21II)	堀之内 2 ~ 加曾利 B 1	網取 II 新段階 ~網取直流	
			加曾利 B 1		



第9図 K群土器の器形部分類図（品田2001）

に入り組み文を伴うもの（II B 1類、II b 2類、III a 類、「石神類型」）、沈線区画内に条線文、縦文を施すものの（II B 1類、III類 a 類）、三角形を重ねた磨消縄文の施文されるもの（II b 2類、III b 類）、無文（II b 2類）、平行する沈線を数条巡らせるもの（II b 2類）がある。「報告」では触れられていないが、（II a 類、1943）は蛇行懸垂文の一部とこれに接続する渦巻文から系譜がたどれるものと考えられる。

「K群土器」について文様を中心に注目される特徴をあげると、内面文様の発達の度合い、口唇端部の刻目の有無、外面の各文様モチーフ（縦長の対弧文、平行する横位沈線を巡らす、「斜位短線帯」、「細線文帯」、三角形の磨消溝文）がある。縦長の対弧文および（IIa類、1943）は、C群「十三本塚北型類」（鈴木2018）第IVa期からの系譜をたどれる。また、横位に連続する三角形の磨消溝文の施文されるもの（926・992）については、神奈川編年（繩文プロジェクト2013）では「古段階」に位置付けられ、堀之内2式末までは時期的に隔たりがある。口縁部に平行沈線を巡らす土器群、多条の細沈線を施す土器群、「石神類型」との関連が推定される土器群（1316）が分析対象にされ一群の土器群として捉えられたことは、「報告」のなかで第IVb期の段階設定がなされたことを踏まえ、「南三十石場式新段階」と堀之内2式から加曾利B1式との併行関係の分析をすすめるうえで重要な視点を提示したものと評価できる。「報告」では第IVb期の土器群の内容は、

出土資料の少なさから明示されなかったが、その後、南三十稻場式最終段階（金子2001）、アチャヤ平5期（金内2002）として豊富な資料として具体的に示された⁽²¹⁾。これらの論考では、基本的には南三十稻場式（在地系土器）深鉢を中心とした系統変遷により段階を設定し、「明確な共伴関係」（金内2002）の確認にはいたっていないことから、保留しつつも堀之内2式から加曾利B1式の古い段階と並行関係を推定するという方針をとる。また、在地系とされる「南三十稻場式最新段階」を含む金子のA群土器（金子2012）は、阿賀野川以北に多く見られることが指摘されている。

2002年に開催された第15回縄文セミナーでは、鈴木正博氏により口縁部直下に多条の沈線を回す「奥三面14類」（金子2002；「南三十稻場（最新）」）について言及があり、「特に、横帯の磨消縄文の前後に多条の横線文をやるというのは、この私どもの加曾利B1a式の、あるいはその直前の所にも十分に共通すべきもの」との見解が示された。また、その成立を求める必要があるとの問題を提起し、富山県方面の資料に注目した。さらに、このような特徴は随所に見られるとし、堀之内2式と加曾利B1式の境界問題の議論について自身の視座を明確にした。

「口縁部直下に多条の沈線を回す」土器群について、秋田かな子は、「横線帶」と呼称し堀之内2式終末段階の「石神類型」との交渉の中で、堀之内2式の刻みを有する隆帯から変化したものではないかとする。（秋田1996）下北原遺跡第14号敷石住居址出土資料では第1図9および第1図8、第2図12、13、14等が検討対象となる。

鈴木徳雄氏は、南三十稻場式新段階（堀之内2式並行の新しい部分）における口辺部に横位の集合沈線（「口辺部横線帶」）が充填される“元屋敷類型”から遷移した新しい“類型”を仮称“長割類型”とし、この編年的な位置付けについて、長割遺跡での共伴関係から「現状では概ね堀之内2式に並行するものであると捉えることができる。」として、加曾利B1式まで下ることには否定的な見解を示した。長割類型の特徴である「口辺部横線帶」の形成については、「石神類型」との交渉（「石神文様」に先行する“初期石神文様”的影響）による元屋敷類型の在地的な自立的变化であり、「加曾利B1式期への変化の前哨」とされた。（鈴木2018）

これらの論考では、堀之内2式末から加曾利B1式初頭の変遷を捉えるにあたって、口縁部に施される「横線帶」の発生と展開（南三十稻場式の最新段階）、および「石神類型」の変遷と編年的位置付けが、下北原遺跡14住資料の理解に関連しては中心的な課題となっている。

（註）

- (1) 金子優子氏は、元屋敷遺跡出土資料から「ひとつの類型」a類を設定し、同遺跡包含層出土資料をこれに充てている。
 (金子2001) 口縁部に横位の多条細沈線文を施すこの類型は、十三本塚北遺跡K群II B1類の一部と同様である。なお、(金子2002)では「当日資料1-14類」として提示された。
 (山田)

■東海

ここでは東海地方について概観する。尾張・三河・遠江地方が該当する。良好な資料が出土した遺跡は、東海地方を代表する集落である静岡県浜松市所在の蜆塚遺跡、愛知県西尾市所在の八王子貝塚、愛知県豊田市所在の今朝平遺跡などがある。

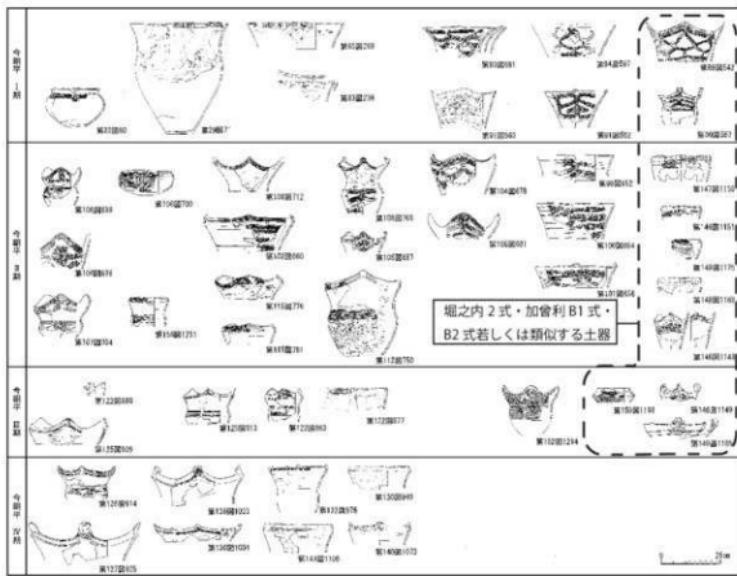
蜆塚遺跡は古くからその存在は知られ、麻生優氏（麻生1962）・久永春男氏（久永1969）・増子康眞氏（増子1994）・向坂鋼二氏（向坂1970・1971）など先学の研究が蓄積され、器形や文様などから近畿地方の一乗寺K1式・元住吉山I式土器との対応が捉えられている。分布は「静岡県西部から愛知県にかけての東海地方に分布しているが、客体として含まれる事例は、東は伊豆半島、北は八ヶ岳南麓から伊那谷にかけての長

野県南部、岐阜県山間部あたりまで広がっている。」(向坂1994)と把握され、後期土器については「近畿地方まで分布が認められ、一乗寺K1式・元住吉山I式との弁別、ひいては分布図の確定がむずかしい。」(向坂1994)との様相が示されている。蜆塚貝塚第2トレンチ下層出土土器に伴って加曾利B2式土器が出土しており、時間軸を検討する上で重要な資料である。これら後期の土器群は「後期中葉に地域色の強い型式が東海地方に成立したことを見出す点で重要な意味を持っているが、不明な点も多く、その細分や他地域との関係の問題は今後の研究課題である」(鶴岡1994)と指摘されている。

八王子貝塚は明治時代からその存在は知られ、調査・研究の対象となっており、明治34年に発掘され、その報告が東京人類学会雑誌に掲載され(大塚1901)、以降(小栗1973)など多数の調査・報告があり東海地方で著名な貝塚となっている。八王子式土器は標識土器とされ(山内 1939)、その具体的な特徴は「平縁の深鉢形土器は口縁の細紐状隆線が省略され、胴部の磨消繩文帶の絡げ縄構図は齊一性を失う。帯繩文を数段めぐらすだけのものが一般的となる。波状口縁の深鉢形土器においては『く』の字形に屈折した口辺部の文様が簡単になるが、胴部文様帶には同心円またはV字形を核とした絡げ縄構図が採用され、盛行する。」(久永1969)や比較的多くの資料が掲載されている『西尾市史』Iなどを主体にその内容が検討されてきた。近年には八王子貝塚の発掘調査報告書(松井2000・2001・2002・2003・2005)が刊行され、その詳細に基づいて、(増子2010)・(百瀬2013)・(東海縄文研究会2015)・(森本2019)などの研究により八王子式のさらなる解明が行われている。今朝平遺跡は1978年に発掘調査が行われ、縄文後期から晩期の遺構や遺物が豊富に認められ、配石遺構や土製品などの特徴を有することが明らかとなっている。2019年には報告書(長田ほか2019)が刊行され、遺跡の実像が解明されている。豊富な出土量を有する土器の主体は後期前葉から中葉で「今朝平I期:堀之内2式・北白川上層2期・下内田式、今朝平II期:加曾利B1式・北白川上3期・八王子式、今朝平III期:加曾利B2式・一乗寺K式・西北出式、今朝平IV期:加曾利B3式・元住吉山I式・蜆塚KII式・長谷式」(森本2019)と各段階に区分され、周辺地域との対比関係も併せて具体的に把握されている。また「後期中葉八王子式に含まれる土器群が豊富であり、近年指摘される八王子式の古段階かと新段階への変遷を示す資料として評価されよう。特に八王子式の特徴の一つでもある三単位波状口縁深鉢のうち、頭部に無文帶を有する一群が一定量観られる点は、八王子貝塚における型式変遷を補う土器群として注意されよう。またこれらに伴うであろう加曾利B式土器など異型式土器が一定量存在する点も、後期中葉土器群の豊富さとして評価できよう。」(長田2019)と東海地方のみならず編年の広域的な関係をも把握しうる重要な成果であることが指摘されている。

從来から齊一性の強い土器と言われている加曾利B1式期土器を捉える上で、東海地方を概観した。八王子式成立過程の様相をみると西日本系土器や堀之内2式土器の器形や文様要素が融合し東海地方の土器として成立しているようであるが、その後も断片的に他地域の土器が移入している。堀之内2式や加曾利B1式またはそれらに後続する土器が客体的に出土しており、他地域から波動的に移入していると考えられ、東海地方と関東地方の時間軸を繋ぐ上の手がかりとなるものと考えられる。今後これら東海地方はもとより、周辺地域の土器分布図や密度などの詳細も含めて事例の増加と相互関係の把握や広域編年の確立に努めていく必要がある。

(天野)



第10図 今朝平遺跡の土器変遷 S=1/20 (今朝平道路土器変遷図1-2 (長田2019) に加筆・改変)

4. おわりに

各地域における後期前葉から中葉にかけての土器編年研究について概観した。

かながわ縄文（縄文時代プロジェクト 2013）も、これに依拠している石井寛氏の編年研究（石井 1984）については、「今なお堀之内 2式土器細分研究の一つの到達点を示している。」（加納 2008）と評せられているが、他の論考とともに堀之内 2式と加曾利 B1 式の境界問題は解決されなかった。もとより本稿においても未解明なままであるが、連続し均一で切れ目が見出し難い土器型式変遷観を前提とした議論の進め方は再検討の余地があるとも考えられる。

(山田)

(引用・参考文献)

- 秋田かな子 1994「加曾利 B1式注口土器の成立（予察）－王子ノ台遺跡出土の注口土器から－」『東海大学校地内遺跡調査報告 4』東海大学校地内遺跡調査委員会・東海大学校地内遺跡調査団
- 秋田かな子 1996「南関東西部の加曾利 B式土器－構造的理解に向けて－」『第9回縄文セミナー－後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 秋田かな子 1997『“石神類型”覚え書き』『東海大学校地内遺跡調査報告 7』東海大学校地内遺跡調査委員会・東海大学校地内遺跡調査団

- 秋田かな子 2016 「縄文時代後期注口土器の変化と画期－南関東地方にみる諸相から－」『東海史学』第50号 東海大学史学会
- 安達厚三 1995 「八王子貝塚」『日本古代遺跡辞典』大塚初重・桜井清彦・鈴木公雄編 吉川弘文館
- 阿部芳郎 1998 「堀之内2式土器の構成と地域性－下総台地における堀之内2式土器成立期の様相－」『縄文時代』第9号 縄文時代文化研究会
- 阿部芳郎 2020 「加曾利B1式土器の成立過程と地域間関係－東北地方南部・北陸地域の型式間関係を中心に－」『考古学刊』第16号 明治大学文学部考古学研究室
- 新屋雅明 2015 「第1章 加曾利B式土器の再検討」『縄文時代後・晩期土器編年の研究－加曾利B式～安行式土器群の変遷－』六一書房
- 石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究（予察）」『調査研究集録』5冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 大塚又兵 1901 「三河國幡豆郡西の町貝塚に就き」『東京人類學會雑誌』第16卷第179号 東京人類學會
- 鶴岡聖説 1994 「鶴岡K式土器」『縄文時代研究辞典』宇沢充則編 東京堂出版
- 大塚達朗 1983 「縄文時代後期加曾利B式土器の研究（I）」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』2号 東京大学文部考古学研究室
- 大塚達朗 2000 「第3章 山内型式論の再検討」『縄文土器研究の新展開』 同成社
- 大塚達朗 2015 「解題」『縄文時代後・晩期土器編年の研究－加曾利B式～安行式土器群の変遷－』 六一書房
- 大場利夫・眉谷昌康 1953 『エリモ遺跡』 日高教育研究所
- 大場利夫・石川徹 1956 『手稲道路』 手稲町役場・手稲町教育委員会
- 小栗鉄次郎 1932 『西尾市大字上町八王子貝塚』 愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第10 史蹟其八 名勝其四 天然紀念物其十 愛知県郷土資料刊行会
- 長田友也 2019 『今朝平遺跡 第一分冊 遺構・土器』 豊田市埋蔵文化財調査報告書第79集 豊田市教育委員会
- 長田友也 2019 『今朝平遺跡 第二分冊 土製品・石器・自然化学分析・考察』 豊田市埋蔵文化財調査報告書第79集 豊田市教育委員会
- 長田友也 2020 「愛知県今朝平遺跡発掘調査報告・補遺」『三河考古』第30号 三河考古学談話会
- 金内 元 2002 「アチャヤ平遺跡上段・斜面部出土土器の様相と時期区分」「アチャヤ平遺跡上段」朝日村文化財報告書第21集 新潟県朝日村教育委員会・新潟県
- 金内 元 2002 「アチャヤ平遺跡上段・斜面部出土土器の様相と時期区分」「アチャヤ平遺跡上段」朝日村文化財報告書第21集 新潟県朝日村教育委員会・新潟県
- 金内 元 2012 「下越地方における縄文時代後期前葉末～中葉の土器について」『新潟県の考古学II』 新潟県考古学会
- 金子優子 2001 「元屋敷遺跡出土の縄文時代後期前葉土器について」『新潟県考古学談話会報』第23号 新潟考古学談話会
- 金子優子 2002 「奥三面における後期前半の土器様相」『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』 縄文セミナーの会
- 加納 実 2008 「堀之内式土器」『絶賀 縄文土器』 アム・プロモーション
- 柳原功一 1986 『豆生田第3遺跡』 大泉村埋蔵文化財調査報告第4集 大泉村教育委員会
- 柳原功一 1987 『姥神遺跡』 大泉村埋蔵文化財調査報告第5集 大泉村教育委員会
- 柳原功一ほか 1997 『社口遺跡第3次調査報告書』 高根町教育委員会・社口遺跡発掘調査団
- 工藤肇 2000 「柏原I～IV式について」「苦小牧市埋蔵文化財センター所報2」 苦小牧市埋蔵文化財センター
- 河野広道・名取武光 1938 「北海道の先史時代」「人類学・先史学講座」第六巻 雄山閣
- 児玉作左衛門・大場利夫 1952 「礼文島船泊砂丘遺跡の発掘に就て」『北方文化研究報告』第七輯 北海道大学北方文化研究室
- 品田高志 2001 『十三本塚北遺跡』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第37集 柏崎市教育委員会
- 縄文時代プロジェクト 2013 「神奈川県における縄文時代文化の変遷IX－後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その4－堀之内2式土器の変遷－」『研究紀要』18 公益財團法人かながわ考古学財团
- 縄文セミナーの会 1996 『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』 縄文セミナーの会

- 縄文セミナーの会 2002 a 『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』 縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会 2002 b 『第15回縄文セミナー後期前半の再検討-記録集』 縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会 2012 『第25回縄文セミナー 縄文後期土器の研究と現状』 縄文セミナーの会
- 菅谷通保 1996 「南関東東部後期中葉土器群の様相」『第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相』 縄文セミナーの会
- 杉浦牧太郎 1974 「八王子貝塚」『西尾市史』1 西尾市
- 鈴木克彦 2005 「東北南部後期前葉、中葉の番匠地編年の再検討」『縄文時代』第16号 縄文時代文化研究会
- 鈴木克彦 2008 「宝ヶ峯式・手稲式土器」『絶賛 縄文土器』 アム・プロモーション
- 鈴木徳雄 2012 「堀之内式土器研究の諸問題」『第25回縄文セミナー-縄文後期土器研究の現状と課題』 縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄 2018 「縄文後期前半における土器型式の存立構造-関東信越地域の「型式」と諸「類型」」『地域考古学』3 地域考古学研究会
- 鈴木正博 1980 「加曾利B1式精製土器様式（概説）」『大田区史（資料編）考古II』 東京都大田区
- 鈴木正博 1981 「第1章 加曾利B1式土器研究の基礎」『中葉貝塚の研究II』 貝塚文化研究会
- 鈴木正博 1995 「「土偶インダストリ論」から観た堀之内2式土偶-土偶の編年的位置は土器から。土偶間の動態性は土偶から-」『茨城県考古学協会誌』第7号 茨城県考古学協会
- 鈴木保彦 1977 『下北原遺跡』 神奈川県埋蔵文化財報告14 神奈川県教育委員会
- 廣野光行 1978 「北海道における縄文時代後期中葉の土器の編年について」『考古学雑誌』第63巻第4号 日本考古学会
- 廣野光行 1981 「北海道の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』 雄山閣
- 東海縄文研究会 2015 「東海縄文研究会第12回研究会（愛知4）八王子式土器-西尾市八王子貝塚出土土器-（資料集）」
- 名取武光 1939 「北海道の土器」『人類学・先史学講座』第十卷 雄山閣
- 名取武光・松下亘 1969 「縄文後期文化・北海道」『新版 考古学講座3』雄山閣
- 浜松市教育委員会 1960 『規塚遺跡その第三次発掘調査』 浜松市教育委員会
- 浜松市教育委員会 1961 『規塚遺跡その第四次発掘調査』 浜松市教育委員会
- 浜松市教育委員会 1962 『規塚遺跡総括編』 浜松市教育委員会
- 久永春男 1969 「縄文後期文化・中部地方」『新版考古学講座 先史文化』第3巻 雄山閣
- 平林 郁ほか 2018 「ひんご遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書118 長野県埋蔵文化財センター（財）北 海道埋蔵文化財センター 1989 『小樽市 忍路土場遺跡・忍路5遺跡』北埋調報第53集
- 増子康眞 2010 「東海西部の縄文後期中葉型式群の形成と終末」『古代人』69 名古屋考古学会
- 松井直樹 2000 『八王子貝塚I-縄文時代中期・後期前葉編-』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集 西尾市教育委員会
- 松井直樹 2001 『八王子貝塚II-縄文時代後期中葉前半編-』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集 西尾市教育委員会
- 松井直樹 2002 『八王子貝塚III-縄文時代後期中葉後半編-』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集 西尾市教育委員会
- 松井直樹 2003 『八王子貝塚IV-石器・石製品・骨角器・土偶・土製品・小形土器-』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集 西尾市教育委員会
- 松井直樹 2005 『八王子貝塚V-縄文時代中期・後期前葉期-』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集 西尾市教育委員会
- 馬日朔一 1982 「南東北」シンポジウム堀之内式土器の記録』 市立市川考古博物館
- 三田村美彦 1999 「第12章 山梨県の考古学編年」（13）後期『山梨県史 資料編2 原始・古代2』 山梨県
- 向坂綱二 1995 「規塚遺跡」『日本古代遺跡辞典』大塚初重・桜井清彦・鈴木公雄編 吉川弘文館
- 向坂綱二 1996 「規塚式土器」『日本土器辞典』大川清・鈴木公雄・工業善通編 雄山閣
- 百瀬長秀 2013 「八王子貝塚層位資料」『三河考古』23 三河考古刊行会
- 森田知忠 1981 「北海道縄文後期の土器」『縄文土器大成3』 講談社
- 森本隆寛 2019 爱知県豊田市今朝平遺跡出土の後期前葉土器群について』『東海からみた後期前葉土器群』その2 東海

縄文時代研究プロジェクトチーム

縄文研究会第8回例会 東海縄文研究会

山内清男 1939a『日本遠古之文化 補註付・新版』先史考古學會

山内清男 1939b「加曾利B式（古い部分）」『日本先史土器図譜』(1967再版) 先史考古學會

吉崎昌一 1965「北海道」『日本の考古学II』河出書房新社

領塚正浩 1994「縄之内貝塚の考古資料（1）—東京大学人類学教室昭和26年発掘資料について—」『市立市川考古学博物館年報』22号 市立市川考古博物館

弥生時代後期竪穴住居の研究（5）

弥生時代研究プロジェクトチーム

はじめに

今回は綾瀬市・大和市・海老名市・厚木市・伊勢原市・秦野市内における竪穴住居の集成と分析を行い、特徴の把握を行う。本稿では、上記分析対象地域を県央地域と呼称する。

今回の執筆・編集はプロジェクトメンバーによる検討結果に基づき、飯塚、渡辺、戸羽が行った。

県央地域における竪穴住居跡の特徴

帰属時期別住居軒数

帰属時期：県央地域で集成した竪穴住居跡は1141軒である。これらの帰属時期は後期：779軒、庄内併行期：126軒、中期後半～後期：21軒、中期後半～古墳時代前期：1軒、後期～古墳時代前期：22軒、不明：192軒である。分析の対象とした竪穴住居跡は時期不明を除いた軒数の大半を占める、後期および庄内併行期に帰属するものとした。

住居形態など

平面形態：後期779軒のうち最も多いのは隅丸（長）方形412軒で、次いで楕円形109軒、円形30軒、（長）方形61軒、不整形2軒である。平面形態不明のものは165軒である。このうち、短軸方向上に炉跡が存在する住居（短軸住居）が15軒（可能性があるもの7軒を含む）あり、海老名市河原口坊中遺跡（1次：5軒・2次：2軒）で7軒、同市本郷遺跡で3軒、同市中野桜野遺跡で2軒、綾瀬市神崎遺跡で2軒、海老名市社家宇治山遺跡で1軒が確認されている。

庄内併行期126軒のうち最も多いのは隅丸（長）方形74軒で、次いで（長）方形が32軒、楕円形5軒、円形3軒である。平面形態不明のものは12軒である。このうち短軸方向上に炉跡が存在する住居（短軸住居）が、3軒あり、海老名市河原口坊中遺跡（2次）で2軒、同市本郷遺跡で1軒が確認されている。

長短車：長短車は住居の長軸の数値を短軸の数値で除し、それに100を乗じたものである。値が大きくなれば、長軸短軸の差が大きくなり長方形に、小さくなれば正方形に近づき、最低の値は100となる（弥生時代研究プロジェクトチーム1995）。後期で算出できたのは143軒で、基本統計量は最大186.4、最小100.0、平均118.4、中央値114.2という値を示した。庄内併行期で算出できたのは49軒で、基本統計量は最大136.9、最小100.0、平均113.7、中央値112.9という値を示した。

方形指数：後期では149軒算出できた。方形指数10～20未満が22軒と最も多く、次いで20～30未満20軒、30～40未満20軒、60～70未満19軒、50～60未満18軒と続く。方形指数10～70未満の間に集中するが、突出した軒数となる区分ではなく、各方形指数区分において同程度の軒数が存在する。

庄内併行期では67軒で算出できた。方形指数40～50未満が17軒と最も多く、30～40未満9軒、70～80未満9軒、10～20未満7軒、20～30未満7軒、50～60未満7軒と続く。方形指数40～50未満が突出して多く、それに前後する指数10～40未満および50～80未満に分散する傾向が看取される。

主軸方位：北東方向（N-O-E）および北西方向（N-O-W）を0°～180°の間で角度を計測した後、10°ごとに住居軒数の集計を行ってグラフ化した。円が角度を、角度の軸が該当する住居の軒数を示している。90°

を超えるものは南方向に主軸を取る住居である。なお、グラフの構造上 180° の軸に主軸方向 $170\sim180^{\circ}$ 未満の南東方向および南西方向の住居軒数が重複してしまうことから、今回は 180° の軸を南東方向と南西方向の2軸にして軒数表示を行うこととした。

後期において北東方向を主軸とする住居は158軒ある。その内訳は、 $0\sim10^{\circ}$ 未満23軒、 $10\sim20^{\circ}$ 未満36軒、 $20\sim30^{\circ}$ 未満29軒、 $30\sim40^{\circ}$ 未満12軒、 $40\sim50^{\circ}$ 未満13軒、 $50\sim60^{\circ}$ 未満21軒、 $60\sim70^{\circ}$ 未満6軒、 $70\sim80^{\circ}$ 未満10軒、 $80\sim90^{\circ}$ 未満8軒と、 $0\sim30^{\circ}$ 未満および $50\sim60^{\circ}$ 未満に集中して分布する。

南東方向を主軸とする住居は41軒ある。その内訳は、 $90\sim100^{\circ}$ 未満9軒、 $100\sim110^{\circ}$ 未満5軒、 $110\sim120^{\circ}$ 未満4軒、 $120\sim130^{\circ}$ 未満7軒、 $130\sim140^{\circ}$ 未満2軒、 $140\sim150^{\circ}$ 未満4軒、 $150\sim160^{\circ}$ 未満2軒、 $160\sim170^{\circ}$ 未満5軒、 $170\sim180^{\circ}$ 未満3軒である。41軒中、厚木市恩名神原遺跡で39軒、海老名市河原口坊中遺跡（1次）で7軒が見つかっている。

北西方向を主軸とする住居は227軒ある。その内訳は、 $0\sim10^{\circ}$ 未満18軒、 $10\sim20^{\circ}$ 未満13軒、 $20\sim30^{\circ}$ 未満25軒、 $30\sim40^{\circ}$ 未満33軒、 $40\sim50^{\circ}$ 未満33軒、 $50\sim60^{\circ}$ 未満23軒、 $60\sim70^{\circ}$ 未満18軒、 $70\sim80^{\circ}$ 未満42軒、 $80\sim90^{\circ}$ 未満22軒と $20\sim60^{\circ}$ 未満、 $70\sim90^{\circ}$ 未満に集中して分布する。

南西方向を主軸とする住居は16軒ある。その内訳は、 $90\sim100^{\circ}$ 未満6軒、 $100\sim110^{\circ}$ 未満4軒、 $110\sim120^{\circ}$ 未満2軒、 $120\sim130^{\circ}$ 未満2軒、 $140\sim150^{\circ}$ 未満1軒、 $150\sim160^{\circ}$ 未満1軒、 $170\sim180^{\circ}$ 1軒である。16軒中、厚木市宮の里遺跡で11軒が見つかっている。

このほか、真北（ 0° ）を主軸とするものが3軒存在する。

庄内併行期に北東方向を主軸とする住居は32軒ある。その内訳は、 $0\sim10^{\circ}$ 未満7軒、 $10\sim20^{\circ}$ 未満5軒、 $20\sim30^{\circ}$ 未満9軒、 $30\sim40^{\circ}$ 未満5軒、 $40\sim50^{\circ}$ 未満3軒、 $60\sim70^{\circ}$ 未満2軒、 $70\sim80^{\circ}$ 未満1軒、と $0\sim40^{\circ}$ 未満に集中する。

南東方向を主軸とする住居は13軒ある。その内訳は、 $90\sim100^{\circ}$ 未満5軒、 $100\sim110^{\circ}$ 未満1軒、 $110\sim120^{\circ}$ 未満3軒、 $120\sim130^{\circ}$ 未満1軒、 $130\sim140^{\circ}$ 未満1軒、 $170\sim180^{\circ}$ 2軒である。13軒中、厚木市恩名神原遺跡で10軒が見つかっている。

北西方向を主軸とする住居は48軒ある。その内訳は $0\sim10^{\circ}$ 未満3軒、 $10\sim20^{\circ}$ 未満6軒、 $20\sim30^{\circ}$ 未満3軒、 $30\sim40^{\circ}$ 未満6軒、 $40\sim50^{\circ}$ 未満6軒、 $50\sim60^{\circ}$ 未満6軒、 $60\sim70^{\circ}$ 未満8軒、 $70\sim80^{\circ}$ 未満5軒、 $80\sim90^{\circ}$ 未満5軒と比較的各区分に分散する傾向が見られる。

南西方向を主軸とする住居は3軒ある。その内訳は、 $90\sim100^{\circ}$ 未満1軒、 $150\sim160^{\circ}$ 未満1軒、 $170\sim180^{\circ}$ 1軒である。3軒とも海老名市本郷遺跡で見つかっている。

主柱穴：住居跡での主柱穴本数が確認できたものについて集計した。なお、軒数には柱穴配置により、本数が推定可能な遺構を含む。後期では304軒中、主柱穴4本の住居217軒で約71%、次いで主柱穴0本の住居76軒で約24%と主柱穴4本と0本のものが大きな割合を占める。主柱穴18本は厚木市恩名神原遺跡Y42号住居跡の事例である。

庄内併行期では62軒中、主柱穴4本の住居が42軒で約68%、主柱穴0本の住居が9軒で約25%の割合を占める。後期と同様に主柱穴4本と0本の住居が大きな割合を占める。主柱穴12本のものは厚木市恩名神原遺跡Y33号住居跡の事例である。

地形と立地

分布する地形面：後期では台地・丘陵の分布が主体であるが、住居軒数779軒のうち、372軒が自然堤防

上で確認されている。遺跡としては相模川左岸に位置する海老名市河原口坊中遺跡・同市中野桜野遺跡・同市社家宇治山遺跡が該当する。庄内併行期においても台地・丘陵の分布が主体であるが、126軒中、23軒が自然堤防上に分布している。遺跡としては海老名市河原口坊中遺跡・同市社家宇治山遺跡が該当する。

水系：後期では779軒中、相模川水系に372軒、玉川水系に192軒、目久尻川水系に117軒と分布する。このほか、戸張川水系40軒、恩曾川水系37軒、小鮎川水系11、歌川水系10軒である。庄内併行期では126軒中、目久尻川水系に26軒、相模川水系に23軒、戸張川水系に20軒、大根川水系に14軒と分布する。このほか、恩曾川水系12軒、渋田川水系12軒、境川水系10軒、引地川水系9軒である。

住居付帯施設

炉跡：後期では779軒中388軒で確認されている。その内訳は地床炉350軒、枕石炉31軒、枕粘土炉1軒、粘土板炉2軒、その他4軒である。その他は土器片炉3軒、土器片が敷かれた炉が1軒である。枕石炉が確認された主な遺跡として、海老名市本郷遺跡で12軒、同市河原口坊中遺跡（1次：7軒、2次：1軒、4次：3軒）で11軒、厚木市宮の里遺跡で3軒、同市恩名神原遺跡で2軒が挙げられる。1つの住居跡に炉が2基以上存在する住居は25軒存在し、うち15軒が海老名市河原口坊中遺跡（1次：11軒、4次：4軒）で確認されている。

庄内併行期では126軒中64軒で確認されている。その内訳は地床炉50軒、枕石炉8軒、枕粘土炉1軒、粘土板炉1軒、その他4軒である。1つの住居跡に炉が2基以上存在する住居は2軒存在する。

入口穴・梯子穴：入口穴は後期に24軒、庄内併行期に9軒で確認されている。

貯蔵穴：後期に40軒で確認されている。そのうち周堤を有するものは7軒、複数基あるものは1軒である。海老名市本郷遺跡SK II 地区1号住居跡では壁際に大型の土坑が配されている。

庄内併行期には14軒確認されている。そのうち周堤を有するものは2軒で、複数基あるものは2軒確認されている。海老名市本郷遺跡SK II 地区9号住居跡では入り口側と奥壁側に貯蔵穴が確認されている。

周溝：後期で全周するものは77軒（9.9%）部分的に存在するものは91軒（11.7%）、存在しないものは505軒（64.8%）、不明は106軒（13.6%）である。

庄内併行期で全周するものは28軒（22.2%）、部分的に存在するものは17軒（13.5%）、存在しないものは69軒（54.8%）、不明は12軒（9.5%）である。

住居廃絶など

拡張：後期で24軒が確認されている。主な遺跡として、厚木市宮の里遺跡で10軒、海老名市河原口坊中遺跡で5軒、同市本郷遺跡で3軒が挙げられる。綾瀬市神崎遺跡4号住居跡では2回の拡張が行われている。

庄内併行期では2軒確認されている。複数回の拡張が行われている住居跡は確認されていない。

焼失：後期では45軒あり、そのうち炭化物や焼土などが検出されているのは29軒である。主な遺跡として海老名市本郷遺跡29軒、同市河原口坊中遺跡（1次：11軒、2次：1軒、4次：3軒）15軒、厚木市恩名神原遺跡4軒が挙げられる。

庄内併行期では14軒確認されており、炭化物や焼土などが検出されているのは13軒である。主な遺跡として、海老名市本郷遺跡4軒、大和市大塚戸遺跡3軒、同市県営高座渋谷団地内遺跡3軒が挙げられる。

出土遺物

遺物：出土遺物で主体となるのは土器類、石器類であるが、ここではそれ以外に特徴のある遺物を出土した住居跡と遺物名を列挙する。

後期：海老名市中野桜野遺跡 1 号住居跡：凹石・輕石製品・剥片、同遺跡 2 号住居跡：輕石製品、同遺跡 3 号住居跡：凹石、同市河原口坊中遺跡（1 次）P20 地区 YH28・P21 地区 YH29・30・P22 地区 YH39・48 号堅穴建物址：ガラス玉、同遺跡 P21 地区 YH2 号堅穴建物址：鉄製品、同地区 YH6・P22 地区 YH13 号堅穴建物址：銅環、同地区 YH8 号堅穴建物址：銅環・ガラス玉、同遺跡 P22 地区 YH4・56 号堅穴建物址：銅鍔、同地区 YH43 号堅穴建物址：銅鍔、同遺跡（2 次）3 号住居跡：小銅鐸、同遺跡 70・127 号住居跡：ガラス玉、同市本郷遺跡 KA 地区 7 号住居跡：ミニチュア、同遺跡 SKII 地区 25 号住居跡：軽石製品、同遺跡 SKIII 地区 2 号住居跡：軽石製品、同遺跡 SKV 地区 16 号住居跡：管玉未製品、同遺跡 RC 地区 19 号住居跡：縫、同遺跡 RC 地区 34 号住居跡：炭化木製鍼、同遺跡 RC 地区 71 号住居跡：有頭石錐、厚木市宮の里遺跡 34 号住居跡：ミニチュア、同遺跡 77 号住居跡：管状土錐、同市 119 号住居跡：銅鏡、同遺跡 146 号住居跡：土錐？、同遺跡 154 号住居跡：ガラス小玉、伊勢原市石田・大久保遺跡第 2 地点：台付鉢、綾瀬市神崎遺跡 2 号住居跡：土玉・銅鍔、同遺跡 4 号住居跡：凹石

庄内併行期：海老名市河原口坊中遺跡（4 次）26・35 号堅穴建物址：銅環、同市本郷遺跡 KA 地区 2 号住居跡：ミニチュア・銅鍔、同遺跡 SKII 地区 9 号住居跡：軽石製品、同遺跡 SKII 地区 16 号住居跡：軽石製品・管玉未製品、同遺跡 RC 地区 8・64 号住居跡：ミニチュア、厚木市恩名神原遺跡 Y-34 号住居跡：土製紡錘車、秦野市小南遺跡 H1 号住居跡：石錐・石棒、同遺跡 H36 号住居跡：手培り型土器、同遺跡 H42 号住居跡：縫、同遺跡 H69 号住居跡：ミニチュア

おわりに

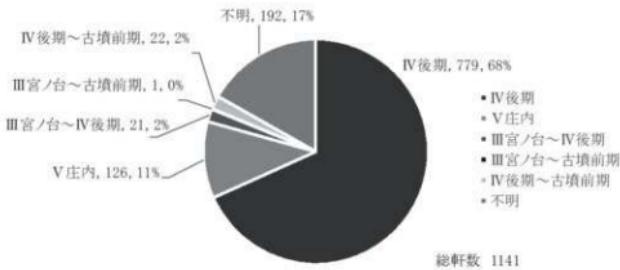
今回は綾瀬市・大和市・海老名市・厚木市・伊勢原市・秦野市内における堅穴住居の集成と分析を行った。今後も神奈川県内における堅穴住居のデータベースの作成作業を継続する。県内各地域または市町村ごとの分析を行ったのち、過去に行った集成のデータを含めて総合的な分析・比較を行う予定である。

第 1 表 対象遺跡一覧表

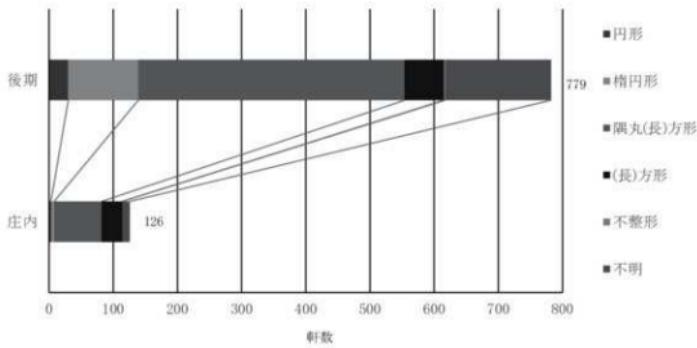
番号	出所	遺跡名	形狀	刊行年	刊行年	出典
1	大和市	大和戸遺跡	10	大和市教育委員会、大和戸遺跡地盤整備調査報告書	1999	『大和戸遺跡』大和市文化財調査報告書 001集
2	大和市	高須高麗の山遺跡内	9	高須高麗遺跡地盤整備調査報告書	1999	『高須高麗の山遺跡内遺跡』
3	綾瀬市	神崎遺跡	8	綾瀬市教育委員会	2010	『神崎遺跡調査報告書』
4	同	同前戸牛鶴遺跡	67	同前戸牛鶴遺跡出土なみの考古学的分析	2014	『同前戸牛鶴遺跡出土なみの考古学的分析』報告書 200
5	同	同前戸牛鶴遺跡	279	同前戸牛鶴遺跡出土なみの考古学的分析	2014	『同前戸牛鶴遺跡出土なみの考古学的分析』報告書 201
6	同	同前戸牛鶴遺跡	77	同前戸牛鶴遺跡出土なみの考古学的分析	2015	『同前戸牛鶴遺跡出土なみの考古学的分析』報告書 202
7	同	同前戸牛鶴遺跡	87	同前戸牛鶴遺跡出土なみの考古学的分析	2017	『同前戸牛鶴遺跡出土なみの考古学的分析』報告書 004
8	海老名市	小野松遺跡	39	小野松遺跡出土なみの考古学的分析	2009	『小野松遺跡出土なみの考古学的分析』報告書 21
9	同	本郷半泽遺跡	1	他の古墳陪塚	2011	『神奈川県考古名文』本郷半泽遺跡 第 16 回発表会
10	同	本郷半澤遺跡	246	東北セミコム株式会社、本郷半澤遺跡調査	1993	『東北セミコム』
11	同	本郷半澤遺跡	4	東北セミコム株式会社、本郷半澤遺跡調査	1999	『東北セミコム IV』
12	同	本郷半澤遺跡	7	東北セミコム株式会社、本郷半澤遺跡調査	1999	『東北セミコム V』
13	同	本郷半澤遺跡	26	東北セミコム株式会社、本郷半澤遺跡調査	1999	『東北セミコム VI』
14	同	子ノ神遺跡	11	足立市教育委員会、子ノ神遺跡調査報告書	1998	『子ノ神』(N)2
15	厚木市	厚木牛山遺跡	49	厚木市教育委員会牛山遺跡調査報告書	2000	『厚木牛山遺跡早期調査報告書』
16	同	同	103	同上牛山遺跡調査報告書、KU文化財研究所	2000	『同上牛山遺跡報告書』
17	同	同	17	厚木市教育委員会、厚木・大和戸遺跡調査地盤整備調査報告書	2000	『神奈川県牛山遺跡、厚木・大久保遺跡解説点』
18	同	同	20	KU文化財研究所	2000	『厚木牛山遺跡解説点』、厚木戸遺跡解説点
19	同	同	7	KU文化財研究所	2000	『厚木牛山遺跡解説点』、厚木戸遺跡解説点
20	同	同	3	伊勢原市立長所・大和戸遺跡出土古墳調査	2000	『神奈川県牛山・大和戸遺跡出土古墳調査報告書』
21	同	同	2	株式会社古里堂	2007	『神奈川県牛山・大和戸遺跡出土・厚木・大久保遺跡解説点』
22	伊勢原市	吉田・神谷遺跡	1	同上文化財研究所	2012	『神奈川県牛山・大和戸遺跡解説点』
23	同	同	10	同上文化財研究所	2008	『伊勢原市牛山・内藤戸遺跡解説点』、厚木戸遺跡解説点
24	同	同	20	KU文化財研究所	2008	『厚木牛山・内藤戸遺跡解説点』
25	同	同	7	KU文化財研究所	2008	『厚木牛山・内藤戸遺跡解説点』
26	同	同	8	株式会社アーバンワールドワークシステム	2007	『高森・吉田・大和戸遺跡第二次測量実施報告書』
27	同	同	12	同上文化財研究所	2010	『同上・吉田・大和戸遺跡第三次測量実施報告書』
28	同	同	1	他の古跡・高森・吉田・大和戸遺跡	2009	『他の古跡・高森・吉田・大和戸遺跡報告書』
29	同	同	8	伊勢原市立牛山遺跡調査報告書	1998	『牛山遺跡』
30	同	同	14	市川市立山元なみの考古学的分析	1997	『小野松遺跡』(n=28) 東芝・久保・鳥居松美(山=29) 岩井・川口・神代洋研究報告書 23



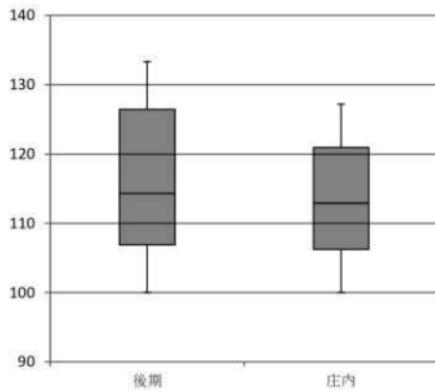
第1図 対象遺跡分布図



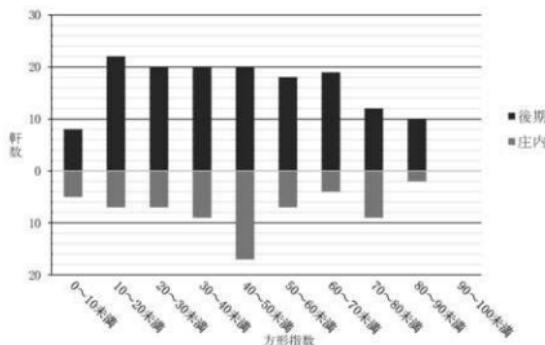
第2図 時期別住居軒数



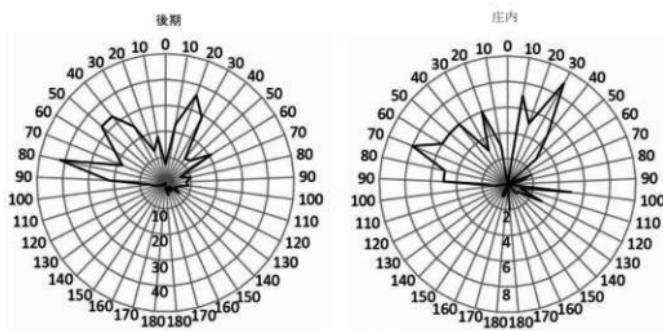
第3図 住居平面形態



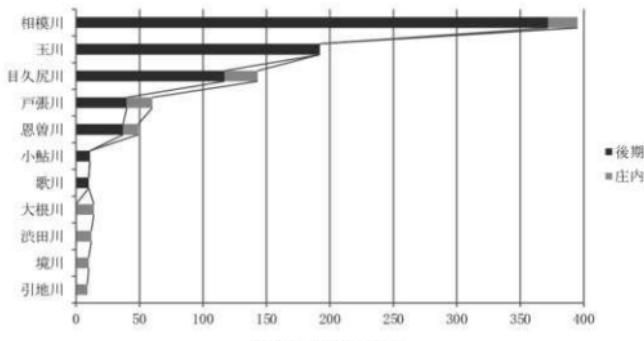
第4図 長短率



第5図 方形指数分布



第6図 主軸方位分布



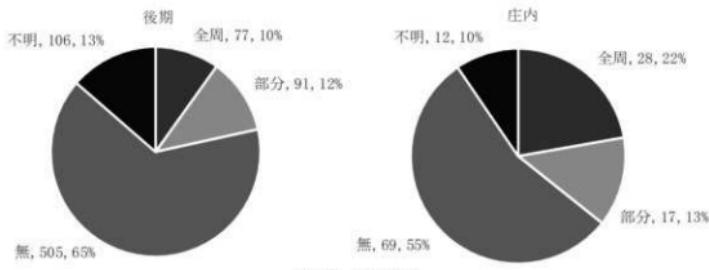
第7図 水系別住居軒数

第2表 炉跡形態

	種別	軒数	確認数/確認総数(%)	確認数/住居総軒数(%)
後期	地床炉	350	90.2	44.9
	枕石炉	31	8.0	4.0
	枕粘土炉	1	0.3	0.1
	粘土板炉	2	0.5	0.3
	その他	4	1.0	0.5
	小計	388	100.0	49.8
庄内	種別	軒数	確認数/確認総数(%)	確認数/住居総軒数(%)
	地床炉	50	78.1	39.7
	枕石炉	8	12.5	6.3
	枕粘土炉	1	1.6	0.8
	粘土板炉	1	1.6	0.8
	その他	4	6.3	3.2
	小計	64	100.0	50.8

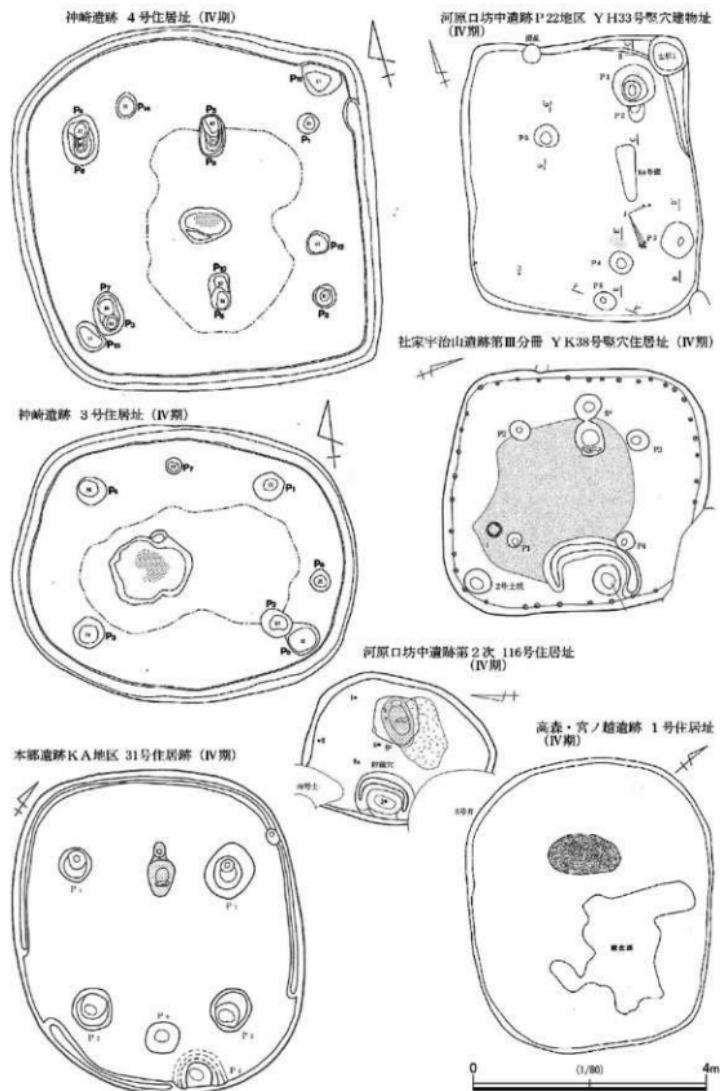
第3表 主柱穴本数

	主柱穴数	軒数	確認数/確認総数(%)	確認数/住居総軒数(%)
後期	0本	74	24.3	9.5
	1本	2	0.7	0.3
	2本	4	1.3	0.5
	3本	1	0.3	0.1
	4本	217	71.4	27.9
	5本	4	1.3	0.5
	6本	1	0.3	0.1
	18本	1	0.3	0.1
	小計	304	100.0	
庄内	主柱穴数	軒数	割合(%)	確認数/住居総軒数(%)
	0本	15	24.2	11.9
	1本	1	1.6	0.8
	2本	1	1.6	0.8
	3本	2	3.2	1.6
	4本	42	67.7	33.3
	12本	1	1.6	0.8
	小計	62	100.0	



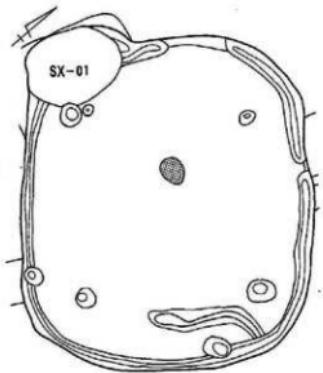
第8図 周溝の有無

弥生時代後期堅穴住居の研究（5）

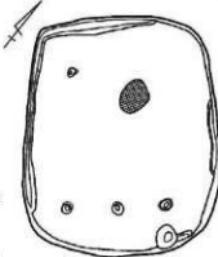


第9図 堅穴住居跡平面図 (1)

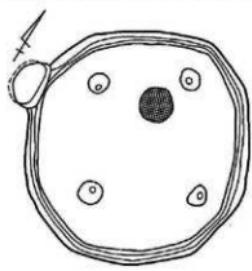
大塚戸遺跡 第3号住居址（V期）



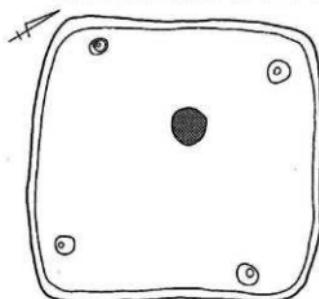
大塚戸遺跡 第12号住居址（V期）



県営高座渋谷団地内遺跡 第5号住居址（V期）



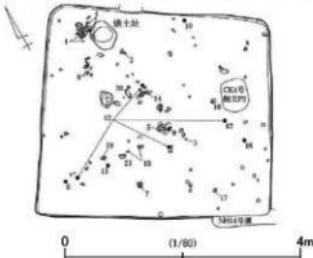
県営高座渋谷団地内遺跡 第2号住居址（V期）



河原口坊中遺跡第2次 43号住居址（V期）



社家宇治山遺跡第1分柵 YK25号窓穴住居址（V期）



第10図 窓穴住居跡平面図（2）

考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（18）

－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－

古墳時代研究プロジェクトチーム

例　　言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に關係する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第25号には横浜市域の1268-1（継続掲載）を掲載した。本資料は横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷古墳の調査時のノートで数年に渡って掲載し、前回までに概ね紹介を終えた。本編では1268-2、1268-3の内容の紹介と、主に1268-1の資料内容との照合、検討を行う。
- ・番号は埋蔵文化財センタ一年報14～19に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は植山英史が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は〔調査（踏査）年月〕〔資料保管場所〕〔記載内容概略〕とし、2. は〔遺跡及び〕遺物（遺構）概要〕〔掲載図書〕〔掲載図書概略〕〔小結〕などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に關しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡位置図

年報番号横浜市 01268-1、-2、-3 濑戸ヶ谷古墳（11） 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

〔調査（踏査）年月〕 1943・1950年

〔資料保管場所〕 東京国立博物館

〔瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート11〕

1. 赤星ノートの内容

01268-2、3はスケッチブックで、主に埴輪の写真や埴輪の解説などが書かれている。埴輪の写真は瀬戸ヶ谷古墳以外の古墳から出土した紋形埴輪などの完形品の写真である。埴輪の特徴のメモとスケッチなどもある。メモには「日本の美術 第19号」「神奈川県建築史図説」などの記載もあり、これらの図書を参考に赤星氏が神奈川県史刊行の際にまとめた資料と推定される。また写真には瀬戸ヶ谷古墳の発掘調査時に撮影した遺物出土状況写真が含まれている。調査時の写真是計6枚で、以下、この写真について紹介する。

写真1・2は盾形埴輪の写真である。それぞれ大形の2片が異なるカット割りで撮影されている。埴輪は草の上に置かれて撮影されており、取り上げられたものを撮影したと推定される。写真3は埴輪列の状況写真で、「前方部東側面の円筒列（横須賀考古学会発掘）」と記載されている。『紀要25』で瀬戸ヶ谷古墳全体の埴輪出土位置図（第2図・再掲）を紹介したが、前方部東側に「昭和25.1.22 横須賀考古学会○発掘16個（？）円筒列」の記載があり、同地点を撮影したもの可能性がある。写真4・5は盾形埴輪の出土状況写真で「楯下半部出土」と記載されている。写真1・2は盾形埴輪の楯部分の上半部で、写真4・5は盾形埴輪の下部の円筒部分の写真であることから、同一個体の可能性も考えられるが、写真からは判断出来ない。写真6は「瀬戸ヶ谷古墳（1）」「紀要12」の写真6で紹介した円筒埴輪・朝顔形埴輪の出土状況写真と同じ個所を撮影したと考えられる。『紀要12』の写真は『神奈川県史資料編20』に掲載されているもので「（昭和18年撮影）」と記載されている。この写真是斜めから撮影しているのに対して、本写真はほぼ直上から撮影されている。同資料は台紙に貼られた写真で「横浜瀬戸ヶ谷古墳（戦前）」の記載がある。また、写真のカットは『紀要23』第2・3図の埴輪出土状況図と類似することを同稿で指摘した。

盾形埴輪について他に記載がある赤星ノートの資料は『紀要25』で紹介した埴輪出土位置図がある（第2図）。同図には、後円頂部の西側の埴輪列の中に「楯」の記載がある。また、後円部からくびれ部にかけて下段と2段目の埴輪列の間に「形象列」があり、この中にも「楯」の記載が見られる。この埴輪出土位置図に書かれた「楯」と写真との関係だが、写真1・2については一旦取上げたと推定されるもので、出土位置は不明である。また写真4・5についても拡大写真であり、後円頂部のものか、埴丘の形象埴輪列のものか判別するのは困難である。瀬戸ヶ谷古墳出土の盾形埴輪は、東京国立博物館が所蔵しているものと知られている。展示されていた同博物館所蔵の盾形埴輪は、楯部の下半から円筒部の上端にかけて残存しており、楯部の上部及び円筒部の下部は復元されている。一方、写真1・2の盾形埴輪の楯部は上部が残存しているもので、残存部は東京国立博物館所蔵の復元部分と類似する。このため、写真1・2の個体は同博物館所蔵の盾形埴輪の楯部上部の可能性がある。写真4・5との比較では、写真の円筒部は下部まで残存しているが、東京国立博物館所蔵のものは円筒部の下部が復元されており、やや様相が異なる。写真1・2との比較も同様であるが、楯部の残存度や詳細な形状など更に検討が必要と思われる。

写真撮影の年代について整理すると、写真6は『神奈川県史資料編20』の記載及び赤星ノートの出土状況図が作成されたと考えられる時期から、昭和18年の調査時に撮影されたものである。写真4については、



舟形上半部出土

写真1(上)・写真2(下) 舟形埴輪写真



前方部東側面の円筒列（横須賀考古学会発掘）

写真3 前方部東側面の円筒埴輪列

前述したように「前方部東側面の円筒列（横須賀考古学会発掘）」の記述から、昭和25年の調査の前方部東側埴輪円筒列写真である可能性が考えられる。写真の遺物以外の特徴を見ると、写真1・2・4～6は横割りのカットで写真1・5・6の上端には、バーフォレーション状の穴の跡が見られる。写真3は縦割りのカットで穴の跡は見られない。写真1・5・6及び写真1とセットになっている写真2、写真5とセットになっている写真4も昭和18年調査時の写真で、写真3のみが昭和25年調査時の写真である可能性が考えられるが、推定の域を出ない。



橋下半部出土

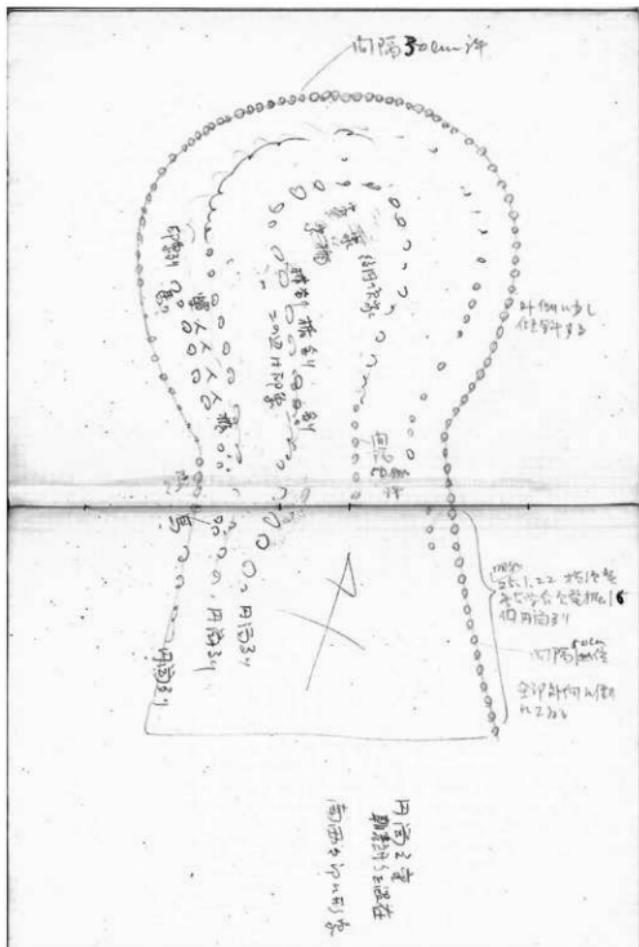
写真4(上)・写真5(下) 盾形埴輪下半部出土状況



写真6 円筒埴輪・朝顔形埴輪出土状況

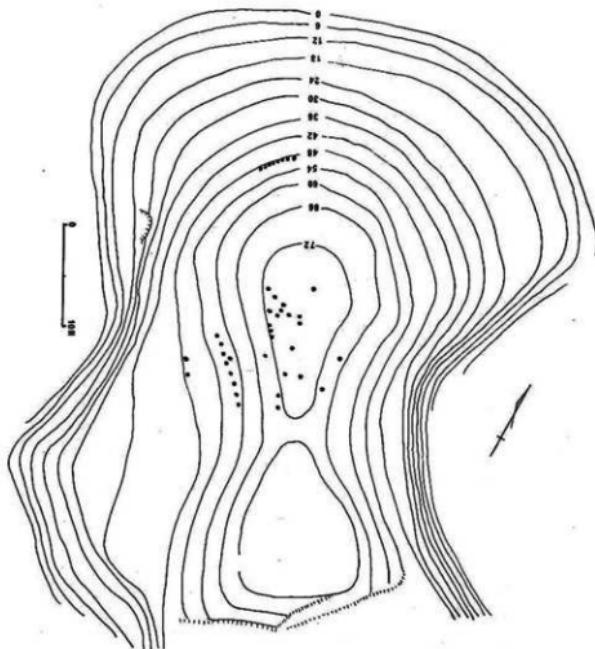
最後に赤星ノートに記載されている埴輪出土位置図（第2図）と、今まで紹介した出土状況図や写真などとの関係や、前回掲載した『神奈川県史資料編20』に掲載されている古墳実測図（第3図）の埴輪位置との違いについて見ていくこととする。赤星ノートの埴輪出土位置図は、前述したように図に昭和25.1.22の記載が見られることなどから、最終的な追記を実施したのは昭和25年以降と考えられるが、記載された埴輪の位置については昭和18年の調査を含んでいると考えられる。今まで紹介した資料の中には、埴輪の出土位置が記載されているものが幾つか存在している。『紀要16』では後円部西側斜面の人物埴輪を中心とした埴輪列のスケッチ図を紹介した。第2図の後円部西側に記載された「形象列」「馬?」「人」「人」「人」「櫛」は、このスケッチ図の埴輪列を示していると推定される。また、『紀要18』で紹介した埴輪片の出土図は、後円部西側斜面の人物埴輪を中心とした埴輪列の東側上方の状況を描いたものと推定される。今回紹介した写真6の円筒埴輪・朝顔形埴輪の写真は、『紀要23』で紹介した出土状況図と同一箇所で、出土位置の図から後円部東側の前方部との接続部付近で、埴頂部に近い斜面のものと考えられる。『紀要23』では後円部と前方部の接続部で古墳の主軸線上に出土の×印が描かれた大刀形埴輪の図も紹介している。第2図では主軸線上に当たる箇所には埴輪の記載は無いが、後円部の埴頂東側に「この辺は形象」と書かれ、最も前方部に近い個所の形象埴輪に「劍」と書かれており、これが該当する可能性がある。『紀要24・25』では、家形埴輪の出土状況図を紹介した。出土状況図には位置関係を示していると考えられる「ホ」、「ヘ」、「ト」などの記載が認められるが、基点となる位置については今まで紹介してきた資料の中からは読み取れない。第2図には後円部の中心から北寄り一帯に「後円頂家」「家」「家」「家」の記載があり、その他の位置には「家」の記載はないため、後円部埴頂の家形埴輪の出土状況図である可能性が考えられる。

次に『神奈川県史資料編20』に掲載された第3図は、一見して第2図に較べて埴輪出土位置のドットが少ないことが判る。第3図の後円部東側傾斜面の前方部寄りには、一列に並んだドットが描かれているが、こ



第2図 墳輪出土位置図

これは図の位置関係から、先に紹介した人物埴輪を中心とした埴輪列と推定される。また、後円部東側で前方部との接続部に近い個所には、墳頂付近の斜面に2点のドットがある。この2点のうちいずれかが、今回紹介した写真6及び『紀要23』の出土状況図等の円筒埴輪・朝顔形埴輪の可能性が考えられる。後円部墳頂部の西側には多数のドットがあり、第2図の「この辺に形象」と書かれた一帯の形象埴輪列に対応する可能



第3図 濱戸ヶ谷古墳実測図（『神奈川県史資料編20』）

性がある。また、後円部中心より僅かに東側に位置するドットは第2図では「家」「家」「家」と書かれた付近に当たる。第3図のドットは1点であるが『紀要25』で紹介した図には、「箱形」の基部が出土したと推定される書き込みがある。ドットはこの「箱形」に対応する可能性も考えられるが、位置関係が確定していないためここでは推定に留める。『神奈川県史資料編20』に掲載された実測図の埴輪出土位置ドットは、今まで紹介してきた赤星ノートの資料に記載されているものが多く、特に主に昭和18年の調査を記録し、昭和25年の調査以降に追記されたと思われる方眼ノートの詳細記録と合致する点が多い。但し、同図にある後円部端の標高48mラインに並ぶ埴輪列など、今まで紹介してきた資料には詳細が書かれていないものもあり、他の資料も使用して作成したと推定される。

(植山)

【掲載図書】

『神奈川県史』資料編20 考古資料 1979

引用・参考文献

植山英史「考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡 濱戸ヶ谷古墳1～9」『研究紀要 神奈川の考古学』12～18・23～25
東京国立博物館 1986『東京国立博物館図録 考古遺物編』(関東III)

横浜市歴史博物館 2001「濱戸ヶ谷古墳」横浜の古墳と副葬品』

県内集落出土の灰釉陶器の組成

- 秦野市の事例について -

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

はじめに

近年、新東名高速道路建設に伴う発掘調査等により、今まで調査されることのなかった神奈川県西部の山間地の調査事例が増加している。その結果、奈良・平安時代の集落の様相も新たに明らかになりつつある。秦野市の事例としては、寺山中丸遺跡、戸川稻荷木遺跡、三郷部東耕地遺跡、柳川竹ノ上遺跡などの調査成績により、山間地においても当該期の集落が一定の水準で営まれていたことをうかがわせている（公財かながわ考古学財団2017～2020『年報23～26』）。その中で灰釉陶器もある一定の出土量が認められることから、集落出土の灰釉陶器の組成を整理する必要性を感じ、まず現段階までの出土事例の集成を試みることとした。今年度は秦野市の事例について取り上げる。なお、最も出土量の多い草山遺跡（神奈川県埋蔵文化時センター1990『草山遺跡III』）については、すでに報告書において集成されているためここでは扱っていない。

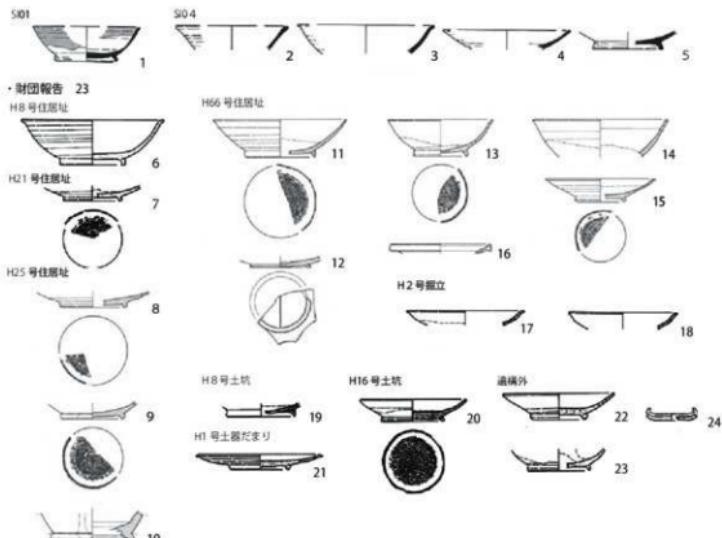
例 言

- ・図版は報告書の表現方法を踏襲し、縮尺は1/6とした。各遺跡の報告書ごとに集成している。
- ・遺構の年代観や灰釉陶器の年代観については、各報告書に従った。
- ・窯式については統一して略号を用い、黒笛90号窯式をK90、折戸53号窯式を053と表記した。



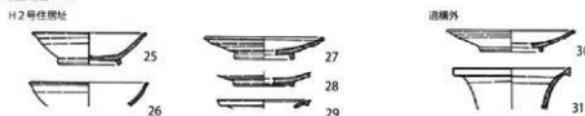
1 : 小南遺跡

・9708 地点 (秦野市)



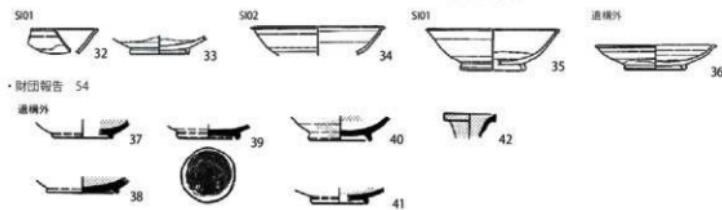
2 : 東北久保・鳥居松遺跡

・財団報告 23



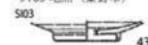
3 : 鉢／木道跡

・9208 地点 (秦野市)



4 : 根丸島遺跡

・9105 地点 (秦野市)



第2図 秦野市域出土灰釉陶器 (S=1/6)

県内集落出土の灰釉陶器の組成

5 : 大原 117 遺跡

- ・201003 地点 (秦野市)
- 2号竪穴建物



- ・財団報告 189
H1号窓穴

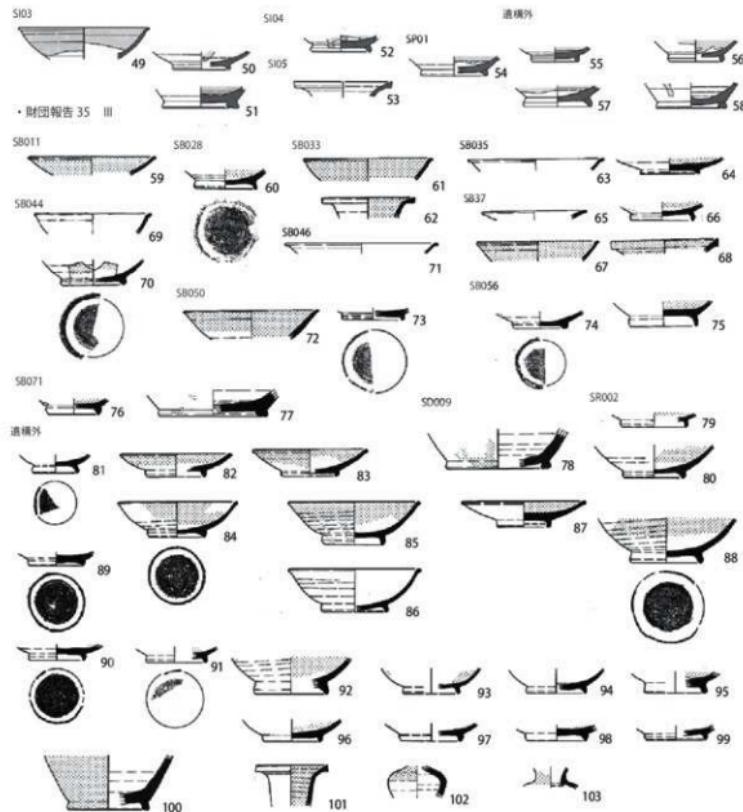


6 : 下大根峯道路・峯遺跡

- ・下大根 20C 地区 (秦野市)
- 20C-505 号住居



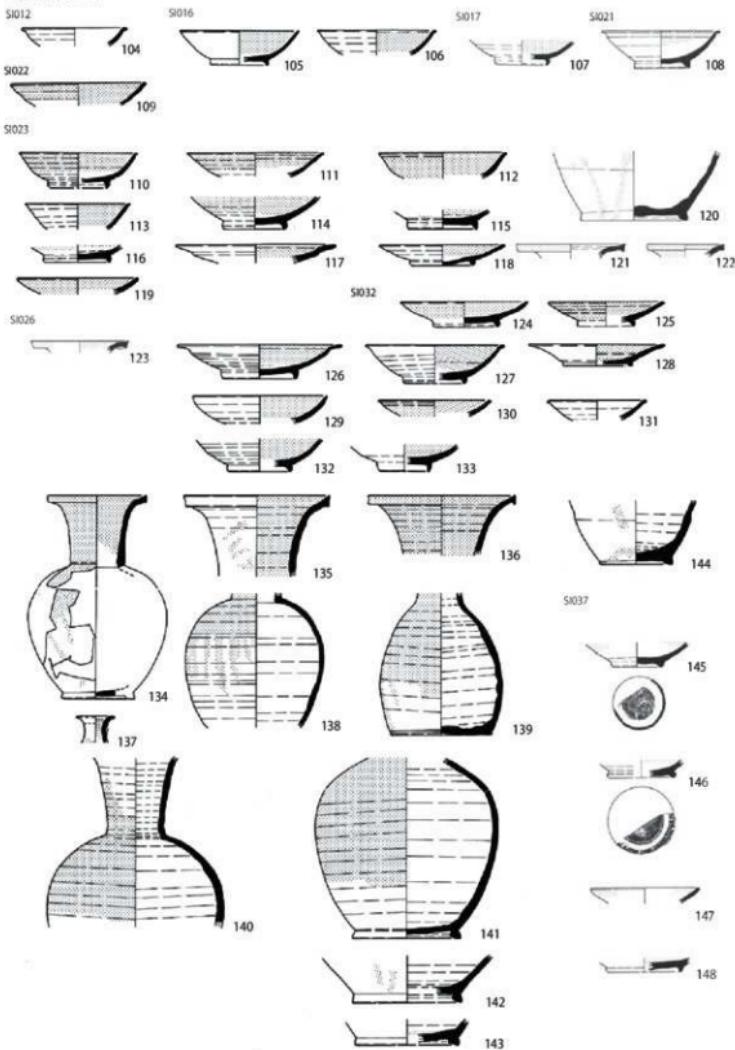
- ・2001-05 地点 (秦野市)



第3図 秦野市域出土灰釉陶器 2 (S=1/6)

6：下大根峯遺跡

・財団報告 35-II

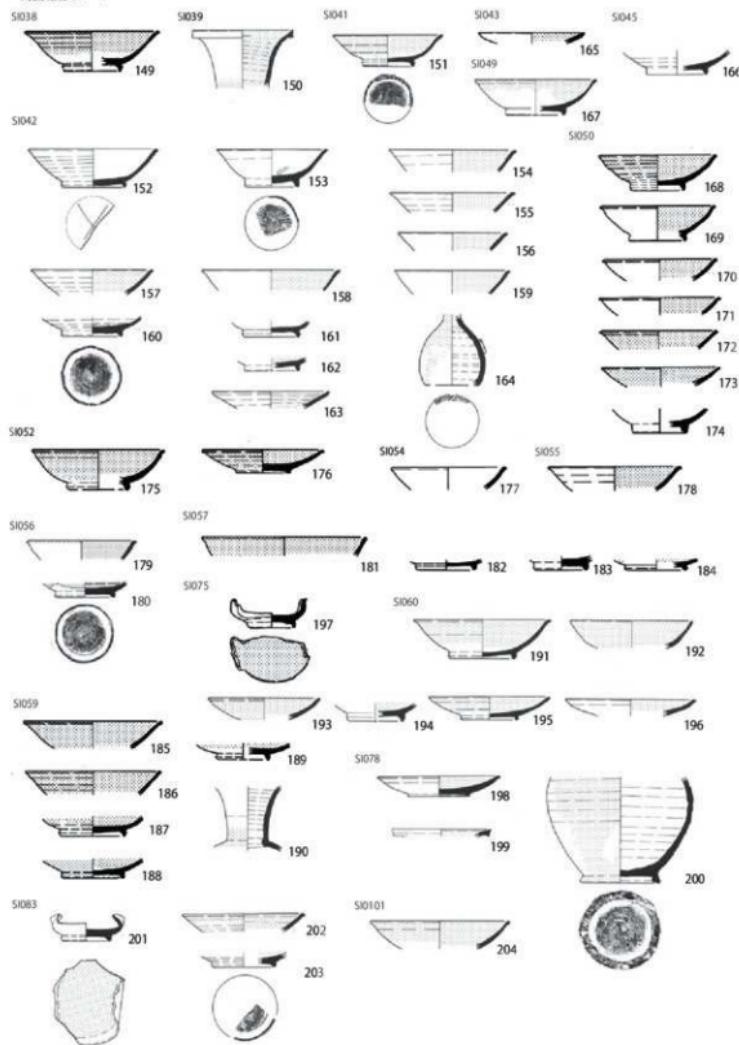


第4図 奈野市域出土灰釉葉陶器 3 (S=1/6)

県内集落出土の灰釉陶器の組成

6 : 下大根峯遺跡

・財団報告 35 II

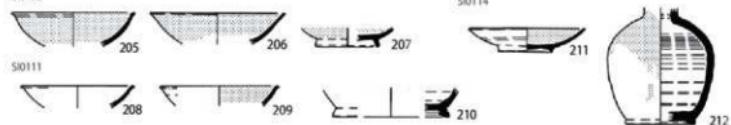


第5図 秦野市域出土灰釉陶器 4 (S=1/6)

6 : 下大槻峯遺跡

・財団報告 35 II

SI0102

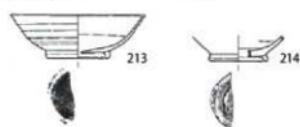


7 : 鶴巻上原遺跡

・鶴巻上原 2013-03 地点

1号掘立柱建物跡

遺構外



・鶴巻上原 0702 地点

2号溝状遺構



8 : 東田原中丸遺跡

・2000-03 調査

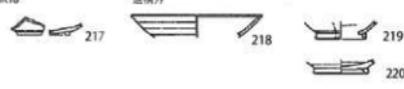
SI101



9 : 寺山中丸遺跡

SK18

遺構外



10 : 草山遺跡

・草山No24 1983

SI02

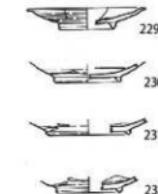
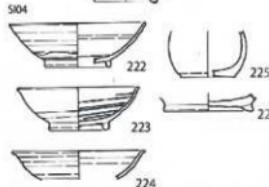
221

SI04

SK04

227

遺構外



・草山No24 第3次

SI03

233

SI05

234

SI06

236

SK01

235

SK02-03

237

・草山 1976
第17号竪穴住居跡

SK02-03

238



・財団報告 105

1号竪穴建物

2号竪穴建物

SI02

242

SI03

243

244

245



第6図 奈野市域出土灰釉軸葉陶器 5. (S=1/6)

県内集落出土の灰釉陶器の組成

11：太岳院遺跡

- ・200202 地点
H1 号住居跡



13：尾尻八幡神社前遺跡

- ・尾尻八幡神社前遺跡 1983

H7 号竪穴住居跡

254



・尾尻八幡神社前遺跡 2011

9001-SI03



9311-SI07



9505-SI26



263

9505-SI02



261

9505-SI07

14：今泉荒井遺跡

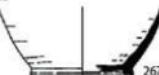
H23 号土坑



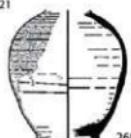
15：西大竹小原遺跡

- ・97A1 地点

SI02



SI21



923



925



・95A2 地点



・96A5 地点



16：曾屋入船町遺跡

- ・9402 地点

SI01

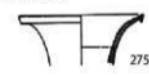


274

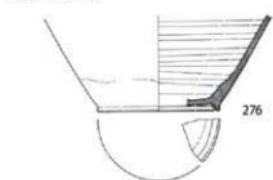
17：中里遺跡

- ・財团報告 30

H3 号竪穴状遺構



H3 号竪穴状遺構



造境外



第7図 秦野市域出土灰釉陶器 6 (S=1/6)

第1表 灰釉陶器出土一览

県内集落出土の灰釉陶器の組成

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

番号	登録名	機種名	機種の年代	機種	初期登録日	登録式	備考	参考文献
99								
100								
101								
102								
103								
104								
105								
106								
107								
108								
109								
110								
111								
112								
113								
114								
115								
116								
117								
118								
119								
120								
121								
122								
123								
124								
125								
126								
127								
128								
129								
130								
131								
132								
133								
134								
135								
136								
137								
138								
139								
140								
141								
142								
143								
144								
145								
146								
147								
148								
149								
150								
151								
152								
153								
154								
155								
156								
157								
158								
159								
160								
161								
162								
163								
164								
165								
166								
167								
168								
169								
170								
171								
172								
173								
174								
175								
176								
177								
178								
179								
180								
181								
182								
183								
184								
185								
186								
187								
188								
189								
190								
191								
192								
193								
194								
195								
196								
197								
198								
199								
200								
201								
202								
203								
204								
205								
206								
207								
208								
209								
210								
211								
212								
213								
214								
215								
216								
217								
218								
219								
220								
221								
222								
223								
224								
225								
226								
227								
228								
229								
230								
231								
232								
233								
234								
235								
236								
237								
238								
239								
240								
241								
242								
243								
244								
245								
246								
247								
248								
249								
250								
251								
252								
253								
254								
255								
256								
257								
258								
259								
260								
261								
262								
263								
264								
265								
266								
267								
268								
269								
270								
271								
272								
273								
274								
275								
276								
277								
278								
279								
280								
281								
282								
283								
284								
285								
286								
287								
288								
289								
290								
291								
292								
293								
294								
295								
296								
297								
298								
299								
300								
301								
302								
303								
304								
305								
306								
307								
308								
309								
310								
311								
312								
313								
314								
315								
316								
317								
318								
319								
320								
321								
322								
323								
324								
325								
326								
327								
328								
329								
330								
331								
332								
333								
334								
335								
336								
337								
338								
339								
340								
341								
342								
343								
344								
345								
346								
347								
348								
349								
350								
351								
352								
353								
354								
355								
356								
357								
358								
359								
360								
361								
362								
363								
364								
365								
366								
367								
368								
369								
370								
371								

県内集落出土の灰釉陶器の組成

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

神奈川県の県央地域の中世遺跡（6）

－かわらけの検討Ⅱ－

中世研究プロジェクトチーム

はじめに

これまで、本プロジェクトチームでは、中世の中心である鎌倉市、小田原市以外の県内の中世遺跡の発掘調査報告の集成を行ってきた。現在も県央部では発掘調査が盛んに行われており、特に伊勢原市では多くの中世遺跡が発見され注目されている。県央部から県西部の地域では、中世資料の蓄積もここ数年で著しく増加している状況が見受けられる。

今回は、引き続き厚木市の集成を行った。今回取り扱う城際遺跡の報告書では、684点のかわらけが掲載され、鎌倉と小田原を除けば、県内屈指の出土量といえる。報告書によれば、中世前期のかわらけは非常に少なく、鎌倉から何かしらの方法で持ち込まれた可能性が指摘されている。中世後期のかわらけは、全てロクロ成形で、混入物を多く含む粉質土がほとんどである。寸法は、極小（5cm代）、小型（8～9cm）、中型（10cm前後）、大型（12～13cm代）4グループに分類できるが、分化の変遷は判然としない（渡辺2010）。本プロジェクトにおける今後の研究の中心遺跡となると考えられるため、今後数回にわたり報告を行うこととする。

例言

1. 神奈川県内の県央・県西地域については、明確な地域区分があるわけではない。今回は、厚木市城際遺跡の一部を掲載する。
2. これまでの基礎データの集成に基づき抽出を行っているが、集成以降に刊行された書籍については、適宜検討に加えることにしている。
3. 図版の掲載は、残存率1/2以上の遺物を取り上げた。縮尺は1/3とした。
4. 計測表の項目は、以下のとおりである。
 - (1) 成形：報告書に明記されていない場合は、図版や写真から推測している。
 - (2) 寸法：口径×底径×器高を記載、復元等は（ ）で記した。報告書に記載がない場合は、図版の測量値を〔 〕で記した。手づくねの底径については、報告書に記載されている場合は、それを記した。
 - (3) 残存状況：報告書に記されているとおりとした。
 - (4) 年代：報告書に記載がある場合は記した。
 - (5) 備考：型式の特徴や付着物等が記載されている場合は記した。

【参考文献】

- 服部実喜 1992 「南武線・相模における中世の食器様相(1)－中世初頭の様相－」『神奈川考古』第28号
神奈川考古同人会
- 服部実喜 1994 「南武線・相模における中世の食器様相(2)－中世前期の様相－」『神奈川考古』第30号
神奈川考古同人会
- 服部実喜 1995 「南武線・相模における中世の食器様相(3)－中世後期の様相I－」『神奈川考古』第31号
神奈川考古同人会
- 服部実喜 1995 「南武線・相模における中世の食器様相(4)－中世後期の様相II－」『神奈川考古』第32号
神奈川考古同人会
- 渡辺清史他 2010 「城際遺跡」かながわ考古学財團調査報告250
- ※その他のかわらけの参考文献は研究紀要7「神奈川県内の「かわらけ」集成（6）」に記載

城際道路（文獻番号 厚木市-22）

番号	報告書図番号	出土位置	かわらけ				
			成形	寸法(cm)	残存状況	年代	備考
1	第48図-1	3号漢	ロクロ	(5.0)×(4.1)×1.8	1/3	16世紀以降	
2	第48図-2	3号漢	ロクロ	(5.5)×(4.8)×1.7	1/4	16世紀以降	
3	第48図-3	3号漢	ロクロ	4.9×4.4×1.7	ほぼ完形	16世紀以降	
4	第48図-4	3号漢	ロクロ	(6.1)×4.5×1.8	3/4	16世紀以降	
5	第48図-5	3号漢	ロクロ	6.0×4.4×1.7	ほぼ完形	16世紀以降	
6	第48図-6	3号漢	ロクロ	(7.1)×(5.2)×2.1	1/3	16世紀以降	
7	第48図-7	3号漢	ロクロ	(6.8)×5.3×2.3	2/3	16世紀以降	
8	第48図-8	3号漢	ロクロ	7.1×5.6×2.6	完形	16世紀以降	口縁部に寸付着
9	第48図-9	3号漢	ロクロ	5.5×4.4×1.9	完形	16世紀以降	
10	第48図-10	3号漢	ロクロ	(5.8)×(3.8)×2.0	1/2	16世紀以降	
11	第48図-11	3号漢	ロクロ	(7.0)×(4.7)×2.3	1/3	16世紀以降	
12	第48図-12	3号漢	ロクロ	6.9×4.8×2.1	ほぼ完形	16世紀以降	口縁部に寸付着
13	第48図-13	3号漢	ロクロ	6.8×4.5×2.3	ほぼ完形	16世紀以降	
14	第48図-14	3号漢	ロクロ	7.0×4.5×2.2	完形	16世紀以降	
15	第48図-15	3号漢	ロクロ	6.0×5.1×1.5	ほぼ完形	16世紀以降	
16	第48図-16	3号漢	ロクロ	(6.6)×(5.2)×1.9	1/2	16世紀以降	
17	第48図-17	3号漢	ロクロ	5.8×4.5×1.8	完形	16世紀以降	
18	第48図-18	3号漢	ロクロ	5.9×4.0×1.8	完形	16世紀以降	
19	第48図-19	3号漢	ロクロ	(7.0)×(5.2)×1.9	1/2	16世紀以降	
20	第48図-20	3号漢	ロクロ	(7.4)×4.7×2.0	1/2	16世紀以降	
21	第48図-21	3号漢	ロクロ	7.4×5.5×2.3	完形	16世紀以降	
22	第48図-22	3号漢	ロクロ	7.2×5.6×1.7	完形	16世紀以降	
23	第48図-23	3号漢	ロクロ	(7.0)×(4.7)×2.0	1/3	16世紀以降	
24	第48図-24	3号漢	ロクロ	7.3×4.8×2.0	完形	16世紀以降	口縁部に寸付着

神奈川県の県央地域の中世遺跡（6）

番号	報告書図面番号	出土位置	かわらけ				
			成形	寸法(cm)	残存状況	年代	備考
25	第48図-25	3号溝	ロクロ	5.6×4.6×1.8	ほぼ完形	16世紀以降	
26	第48図-26	3号溝	ロクロ	(6.4)×(4.2)×1.9	1/4	16世紀以降	
27	第48図-27	3号溝	ロクロ	7.1×4.3×2.1	3/4	16世紀以降	
28	第48図-28	3号溝	ロクロ	(7.0)×(4.6)×1.7	1/3	16世紀以降	
29	第48図-29	3号溝	ロクロ	7.2×4.5×1.9	1/2	16世紀以降	
30	第48図-30	3号溝	ロクロ	8.3×6.3×2.6	完形	16世紀以降	
31	第48図-31	3号溝	ロクロ	(9.8)×6.4×2.9	2/3	16世紀以降	口縁部にすす付着
32	第48図-32	3号溝	ロクロ	(10.0)×(7.0)×3.1	1/4	16世紀以降	
33	第48図-33	3号溝	ロクロ	9.3×6.8×3.0	ほぼ完形	16世紀以降	
34	第48図-34	3号溝	ロクロ	9.7×6.2×2.4	完形	16世紀以降	
35	第48図-35	3号溝	ロクロ	9.1×6.6×2.4	完形	16世紀以降	口縁部にすす付着
36	第48図-36	3号溝	ロクロ	(10.1)×(7.1)×2.6	1/4	16世紀以降	
37	第48図-37	3号溝	ロクロ	(9.6)×(6.0)×2.8	1/4	16世紀以降	
38	第48図-38	3号溝	ロクロ	(9.4)×(6.4)×2.8	1/4	16世紀以降	
39	第48図-39	3号溝	ロクロ	9.4×6.3×3.0	完形	16世紀以降	
40	第48図-40	3号溝	ロクロ	(12.4)×(7.0)×3.5	1/2	16世紀以降	口縁部～内面にすす付着
41	第48図-41	3号溝	ロクロ	(12.4)×(7.4)×3.6	1/4	16世紀以降	
42	第48図-42	3号溝	ロクロ	11.9×7.3×3.2	1/8	16世紀以降	
43	第48図-43	3号溝	ロクロ	(11.2)×(6.9)×3.1	1/4	16世紀以降	
44	第48図-44	3号溝	ロクロ	(12.6)×7.7×3.6	4/5	16世紀以降	
45	第48図-45	3号溝	ロクロ	11.7×7.8×3.6	ほぼ完形	16世紀以降	
46	第53図-1	6号溝	ロクロ	(7.4)×5.0×2.1	1/4	16世紀以降	
47	第53図-2	6号溝	ロクロ	(12.6)×(8.8)×3.4	1/3	16世紀以降	
48	第56図-1	7号溝	ロクロ	(7.5)×(5.0)×2.3	1/4	16世紀以降	
49	第56図-2	7号溝	ロクロ	(8.2)×(5.3)×2.3	1/3	16世紀以降	

中世研究プロジェクトチーム

番号	報告書図面番号	出土位置	かわらけ				
			成形	寸法(cm)	残存状況	年代	備考
50	第59図-1	8号溝	ロクロ	(10.9)×(7.4)×2.7	1/4	16世紀以降	
51	第62図-1	11号溝	ロクロ	(12.2)×6.2×3.3	3/4	16世紀以降	
52	第64図-2	12号溝	ロクロ	5.4×4.4×1.8	一部欠損	16世紀	
53	第64図-3	12号溝	ロクロ	8.7×7.2×2.9	完形	16世紀	
54	第64図-4	12号溝	ロクロ	(8.5)×(6.6)×(2.6)	ほぼ完形	16世紀	
55	第64図-5	12号溝	ロクロ	8.8×6.2×2.9	ほぼ完形	16世紀	
56	第64図-6	12号溝	ロクロ	(11.7)×(7.9)×3.1	1/5	16世紀	
57	第64図-7	12号溝	ロクロ	(12.7)×(8.0)×3.6	1/3	16世紀	
58	第64図-8	12号溝	ロクロ	(10.8)×(5.6)×3.3	1/2	16世紀	
59	第64図-9	12号溝	ロクロ	(12.4)×7.8×3.4	3/4	16世紀	
60	第64図-10	12号溝	ロクロ	(11.9)×7.1×3.4	3/4	16世紀	
61	第64図-11	12号溝	ロクロ	(11.7)×(7.7)×3.1	1/2	16世紀	
62	第74図-1	13号溝	ロクロ	(10.0)×6.7×2.9	3/4	16世紀	
63	第74図-2	13号溝	ロクロ	13.5×7.5×4.2	4/5	16世紀	
64	第74図-3	13号溝	ロクロ	17.0×11.3×(5.0)	完形	16世紀	
65	第74図-4	13号溝	ロクロ	16.3×10.3×4.8	3/4	16世紀	
66	第85図-1	14号溝	ロクロ	(6.1)×4.8×2.1	3/4	16世紀	
67	第85図-2	14号溝	ロクロ	8.1×5.2×2.2	ほぼ完形	16世紀	
68	第85図-3	14号溝	ロクロ	10.8×6.7×(3.2)	ほぼ完形	16世紀	
69	第88図-3	15号溝 上層	ロクロ	5.1×4.6×1.6	完形	16世紀	
70	第88図-4	15号溝 上層	ロクロ	4.8×4.3×1.7	完形	16世紀	
71	第88図-5	15号溝 上層	ロクロ	5.1×4.9×1.6	完形	16世紀	
72	第88図-6	15号溝 上層	ロクロ	4.8×4.4×1.6	ほぼ完形	16世紀	
73	第88図-7	15号溝 上層	ロクロ	5.0×4.5×1.5	完形	16世紀	
74	第88図-8	15号溝 上層	ロクロ	5.3×4.7×1.7	一部欠損	16世紀	

神奈川県の県央地域の中世遺跡（6）

番号	報告書図面番号	出土位置	かわらけ				
			成形	寸法(cm)	残存状況	年代	備考
75	第88図-9	15号溝 上層	ロクロ	5.1×4.4×1.6	完形	16世紀	底部にスノコ底
76	第88図-10	15号溝 上層	ロクロ	5.9×4.8×1.7	4/5	16世紀	
77	第88図-11	15号溝 上層	ロクロ	5.2×4.5×1.7	完形	16世紀	
78	第88図-12	15号溝 上層	ロクロ	8.1×6.9×2.3	完形	16世紀	
79	第88図-13	15号溝 上層	ロクロ	8.0×6.3×2.3	ほぼ完形	16世紀	
80	第88図-14	15号溝 上層	ロクロ	8.2×6.4×2.5	完形	16世紀	
81	第88図-15	15号溝 上層	ロクロ	8.5×6.4×2.5	完形	16世紀	
82	第88図-16	15号溝 上層	ロクロ	8.5×6.4×2.5	4/5	16世紀	
83	第88図-17	15号溝 上層	ロクロ	8.2×6.8×2.6	完形	16世紀	
84	第88図-18	15号溝 上層	ロクロ	9.1×7.3×2.5	ほぼ完形	16世紀	
85	第88図-19	15号溝 上層	ロクロ	8.7×7.6×2.6	ほぼ完形	16世紀	
86	第88図-20	15号溝 上層	ロクロ	8.7×6.3×2.9	完形	16世紀	
87	第88図-21	15号溝 上層	ロクロ	8.9×7.0×2.6	完形	16世紀	
88	第88図-22	15号溝 上層	ロクロ	8.7×6.8×2.8	一部欠損	16世紀	
89	第88図-23	15号溝 上層	ロクロ	8.7×6.9×2.6	完形	16世紀	
90	第88図-24	15号溝 上層	ロクロ	8.9×6.6×2.9	完形	16世紀	
91	第88図-25	15号溝 上層	ロクロ	(10.4)×(7.5)×2.9	1/2	16世紀	
92	第88図-26	15号溝 上層	ロクロ	10.5×7.8×3.2	3/4	16世紀	
93	第88図-27	15号溝 上層	ロクロ	(9.6)×(6.8)×3.1	2/3	16世紀	内外面に寸す付着
94	第88図-28	15号溝 上層	ロクロ	12.2×6.5×3.4	3/4	16世紀	
95	第88図-29	15号溝 上層	ロクロ	(10.3)×(6.0)×2.9	2/3	16世紀	
96	第88図-30	15号溝 上層	ロクロ	(12.5)×(8.0)×3.2	1/6	16世紀	
97	第110図-13	15号溝 下層	ロクロ	5.1×4.4×1.5	完形	16世紀	
98	第110図-14	15号溝 下層	ロクロ	5.5×4.5×1.6	完形	16世紀	
99	第110図-15	15号溝 下層	ロクロ	5.1×4.8×1.7	完形	16世紀	

中世研究プロジェクトチーム

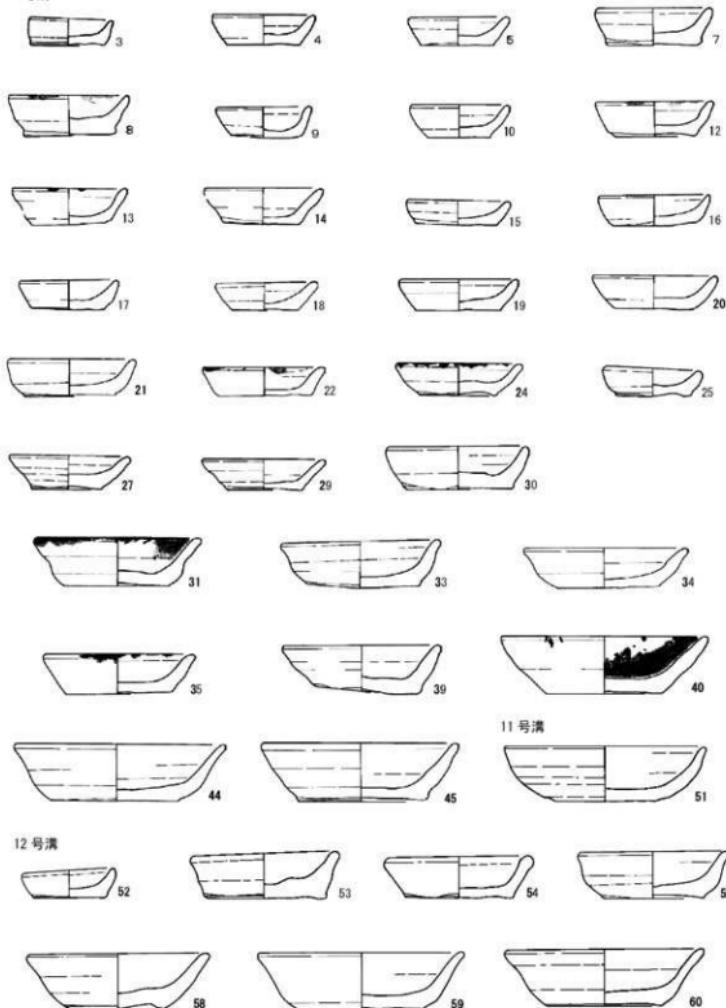
番号	報告書図面番号	出土位置	かわらけ				
			成形	寸法(cm)	残存状況	年代	備考
100	第110図-16	15号溝 下層	ロクロ	5.2×4.7×1.6	完形	16世紀	
101	第110図-17	15号溝 下層	ロクロ	5.4×4.5×1.4	ほぼ完形	16世紀	
102	第110図-18	15号溝 下層	ロクロ	8.7×7.4×2.5	完形	16世紀	
103	第110図-19	15号溝 下層	ロクロ	7.8×6.7×2.1	1/2	16世紀	
104	第110図-20	15号溝 下層	ロクロ	8.6×7.3×2.3	一部欠損	16世紀	
105	第110図-21	15号溝 下層	ロクロ	8.5×6.4×2.6	2/3	16世紀	
106	第110図-22	15号溝 下層	ロクロ	8.5×5.8×2.4	完形	16世紀	
107	第110図-23	15号溝 下層	ロクロ	(9.1)×4.2×3.8	1/2	16世紀	
108	第117図-1	24・25号溝	ロクロ	5.3×4.1×1.7	完形	16世紀	
109	第117図-2	24・25号溝	ロクロ	6.6×4.8×2.1	完形	16世紀	
110	第117図-3	24・25号溝	ロクロ	6.6×5.0×2.2	完形	16世紀	
111	第117図-4	24・25号溝	ロクロ	(6.8)×(4.6)×2.0	1/4	16世紀	
112	第117図-5	24・25号溝	ロクロ	(7.6)×(5.2)×2.2	1/3	16世紀	
113	第117図-6	24・25号溝	ロクロ	7.0×4.3×2.2	完形	16世紀	
114	第117図-7	24・25号溝	ロクロ	6.7×4.6×2.1	一部欠損	16世紀	
115	第117図-8	24・25号溝	ロクロ	(7.3)×5.0×2.2	2/3	16世紀	
116	第117図-9	24・25号溝	ロクロ	(6.3)×(4.2)×2.1	1/4	16世紀	
117	第117図-10	24・25号溝	ロクロ	(6.7)×(4.3)×2.6	1/2	16世紀	
118	第117図-11	24・25号溝	ロクロ	(6.1)×(3.3)×2.2	2/3	16世紀	
119	第117図-12	24・25号溝	ロクロ	6.7×5.0×2.5	ほぼ完形	16世紀	
120	第117図-13	24・25号溝	ロクロ	7.2×5.1×1.9	3/4	16世紀	
121	第117図-14	24・25号溝	ロクロ	(8.0)×(5.7)×1.9	1/5	16世紀	
122	第117図-15	24・25号溝	ロクロ	7.6×5.0×2.1	3/4	16世紀	
123	第117図-16	24・25号溝	ロクロ	(8.9)×(5.0)×2.2	1/6	16世紀	
124	第117図-17	24・25号溝	ロクロ	7.3×4.5×2.0	一部欠損	16世紀	

神奈川県の県央地域の中世遺跡（6）

番号	報告書図面番号	出土位置	かわらけ				
			成形	寸法(cm)	残存状況	年代	備考
125	第117図-18	24・25号溝	ロクロ	7.8×5.6×2.3	完形	16世紀	
126	第117図-19	24・25号溝	ロクロ	(8.4)×(4.3)×2.3	1/4	16世紀	
127	第117図-20	24・25号溝	ロクロ	(6.8)×(5.0)×1.6	1/4	16世紀	
128	第117図-21	24・25号溝	ロクロ	(7.3)×(5.2)×2.0	1/2	16世紀	
129	第117図-22	24・25号溝	ロクロ	(6.2)×4.3×1.8	1/2	16世紀	
130	第117図-23	24・25号溝	ロクロ	6.1×4.3×1.8	完形	16世紀	口縁部にすず付着
131	第117図-24	24・25号溝	ロクロ	6.8×4.6×1.5	ほぼ完形	16世紀	
132	第117図-25	24・25号溝	ロクロ	(9.6)×(6.0)×2.5	1/5	16世紀	
133	第117図-26	24・25号溝	ロクロ	8.5×6.1×2.4	完形	16世紀	
134	第117図-27	24・25号溝	ロクロ	(10.8)×(6.0)×2.6	1/5	16世紀	
135	第117図-28	24・25号溝	ロクロ	(11.2)×(7.7)×3.1	1/6	16世紀	
136	第117図-29	24・25号溝	ロクロ	11.3×6.8×3.4	一部欠損	16世紀	
137	第117図-30	24・25号溝	ロクロ	10.0×6.0×2.9	一部欠損	16世紀	
138	第117図-31	24・25号溝	ロクロ	(10.5)×(7.8)×2.9	1/4	16世紀	
139	第117図-32	24・25号溝	ロクロ	(10.8)×(6.0)×3.3	1/3	16世紀	
140	第117図-33	24・25号溝	ロクロ	9.9×6.5×3.2	2/3	16世紀	
141	第117図-34	24・25号溝	ロクロ	10.5×5.5×3.2	3/5	16世紀	
142	第117図-35	24・25号溝	ロクロ	12.2×7.5×3.6	3/4	16世紀	
143	第117図-36	24・25号溝	ロクロ	12.7×8.0×3.7	3/4	16世紀	
144	第117図-37	24・25号溝	ロクロ	12.1×7.8×3.3	一部欠損	16世紀	
145	第117図-38	24・25号溝	ロクロ	(11.5)×(7.0)×3.9	1/4	16世紀	
146	第117図-39	24・25号溝	ロクロ	(13.4)×(7.9)×3.5	1/5	16世紀	

城際遺跡

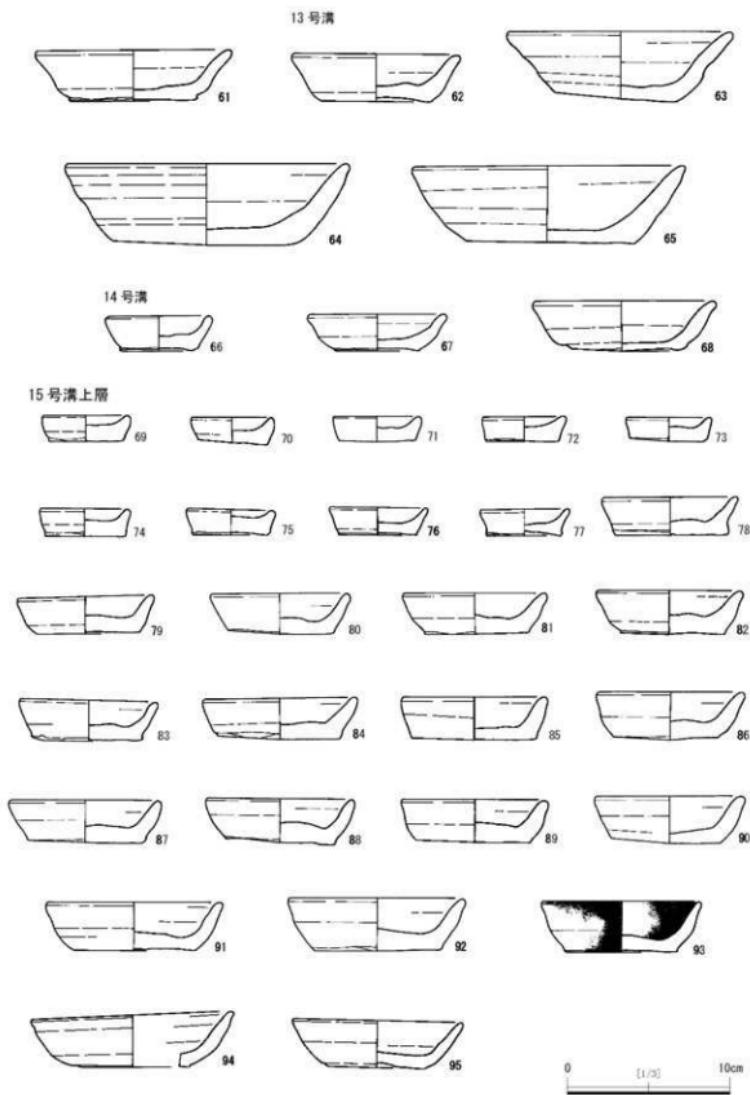
3号溝



0 [1/3] 10cm

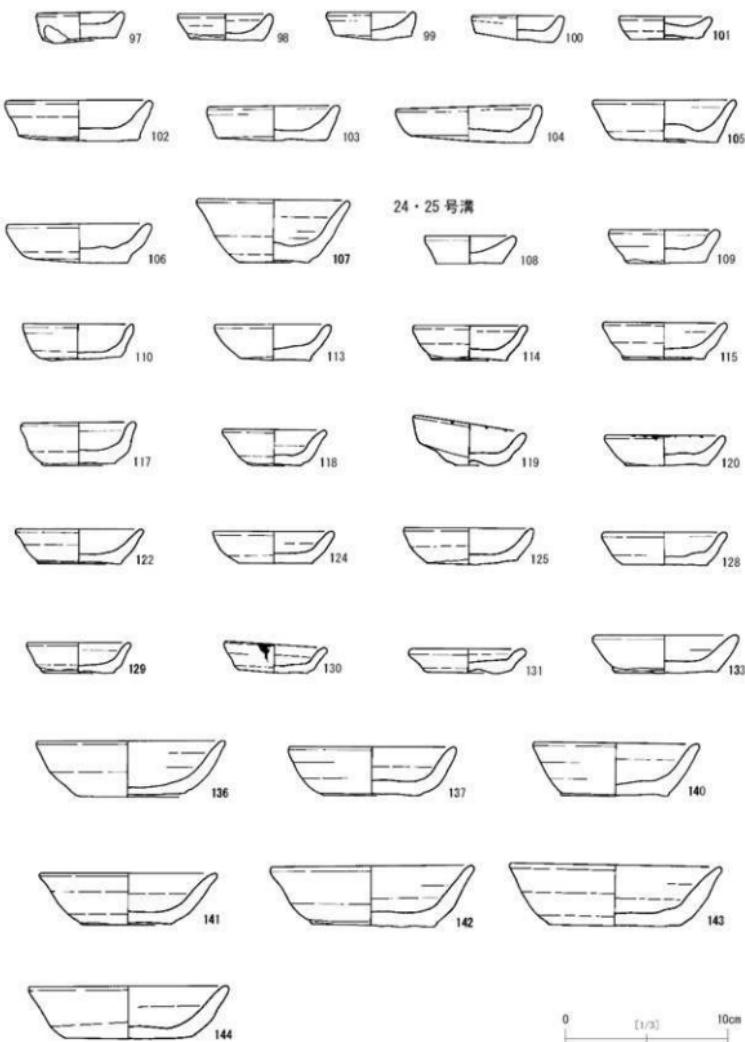
第1図 かわらけ (1)

神奈川県の県央地域の中世遺跡（6）



第2図 かわらけ (2)

15号溝下層



0 [1/3] 10cm

第3図 かわらけ (3)

近世道状遺構の集成（6）

近世プロジェクトチーム

はじめに

本プロジェクトチームでは、2015 年度より近世道状遺構の集成を行っている。

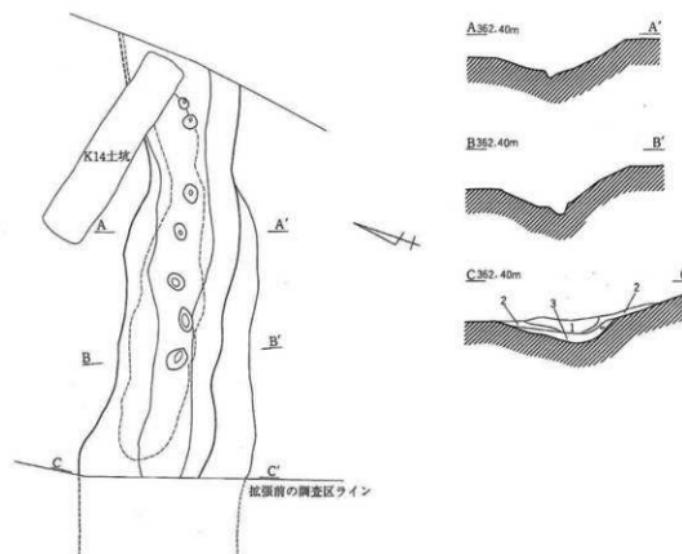
県内の遺跡で発見され、報告されている近世の道状遺構のデータを集めし、規模や構築方法等について検討していく予定である。今回は、相模原市青根馬渡№2 遺跡、青根馬渡№4 遺跡、大保戸遺跡、畠久保西遺跡、綾瀬市大塚堂遺跡、小田原市小田原城跡八幡山遺構群、足柄上郡大井町矢頭遺跡（№35）を取り上げる。

凡 例

- ・遺構名は報告書の記載に基づく。
- ・縮尺は平面図がスペースに収まるような大きさに適宜変えているため、図ごとに示した。
- ・断面図は報告書に複数記載されている例もあるが、一部を記載することにした。
- ・所在地は現市町村名に変更した。

資料No.	遺跡名	遺構名	文献名
104	青根馬渡№2 遺跡	K 1 号道状遺構	1999年『道志導水路開削遺跡 青根馬渡№1・2・3・4・5 道路 青根引山遺跡』かながわ考古学財団調査報告59
105	青根馬渡№4 遺跡	K 1 号道状遺構	1999年『道志導水路開削遺跡 青根馬渡№1・2・3・4・5 道路 青根引山遺跡』かながわ考古学財団調査報告59
106	青根馬渡№4 遺跡	K 2 号道状遺構	1999年『道志導水路開削遺跡 青根馬渡№1・2・3・4・5 道路 青根引山遺跡』かながわ考古学財団調査報告59
107	青根馬渡№4 遺跡	K 3 号道状遺構	1999年『道志導水路開削遺跡 青根馬渡№1・2・3・4・5 道路 青根引山遺跡』かながわ考古学財団調査報告59
108	青根馬渡№4 遺跡	K 4 号道状遺構	1999年『道志導水路開削遺跡 青根馬渡№1・2・3・4・5 道路 青根引山遺跡』かながわ考古学財団調査報告59
109	大保戸遺跡	K 1 号道状遺構	2013年『大保戸遺跡』かながわ考古学財団調査報告280
110	畠久保西遺跡	K 1 号道状遺構	2014年『畠久保西遺跡』かながわ考古学財団調査報告302
111	畠久保西遺跡	K 2 号道状遺構	2014年『畠久保西遺跡』かながわ考古学財団調査報告302
112	畠久保西遺跡	K 3 号道状遺構	2014年『畠久保西遺跡』かながわ考古学財団調査報告302
113	畠久保西遺跡	K 4 号道状遺構	2014年『畠久保西遺跡』かながわ考古学財団調査報告302
114	畠久保西遺跡	K 5 号道状遺構	2014年『畠久保西遺跡』かながわ考古学財団調査報告302
115	畠久保西遺跡	K 6 号道状遺構	2014年『畠久保西遺跡』かながわ考古学財団調査報告302
116	畠久保西遺跡	K 7 号道状遺構	2014年『畠久保西遺跡』かながわ考古学財団調査報告302
117	大塚堂遺跡	第1号道状遺構	2000年『大塚堂遺跡』かながわ考古学財団調査報告96
118	大塚堂遺跡	第2号道状遺構	2000年『大塚堂遺跡』かながわ考古学財団調査報告96
119	小田原城跡 八幡山遺構群	1号道状遺構	2006年『小田原城跡八幡山遺構群Ⅲ（第3次調査）』かながわ考古学財団調査報告201
120	小田原城跡 八幡山遺構群	2号道状遺構	2006年『小田原城跡八幡山遺構群Ⅲ（第3次調査）』かながわ考古学財団調査報告201
121	矢頭遺跡（№35）	第1号道	1997年『宮焼遺跡（№34） 矢頭遺跡（№35） 大久保遺跡（№36）』かながわ考古学財団調査報告25
122	矢頭遺跡（№35）	第2号道	1997年『宮焼遺跡（№34） 矢頭遺跡（№35） 大久保遺跡（№36）』かながわ考古学財団調査報告25

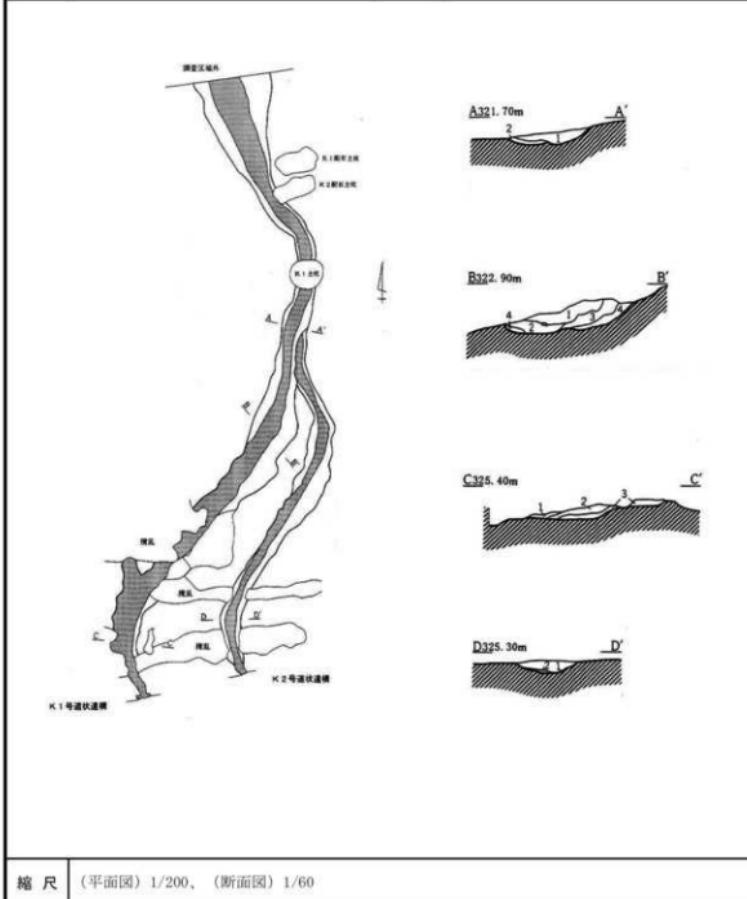
資料No.	104	遺跡名	青根馬渡No.2遺跡
所在地	相模原市緑区青根		
遺構名	K1号道状遺構		
道幅	約1.3m		
年代			
備考	検出長約5m、溝状に掘り込まれた道、掘り方底面7箇所にピット状の掘り込みあり		

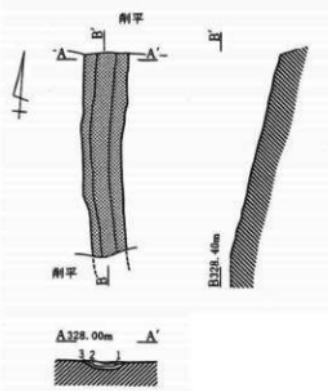
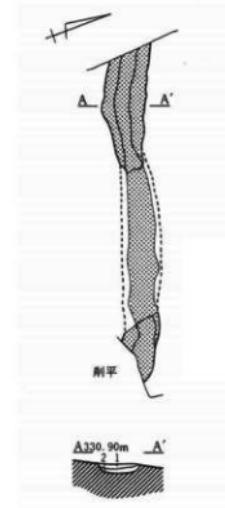


縮尺	(平面図) 1/60、(断面図) 1/60
----	-----------------------

近世道状遺構の集成（6）

資料No.	105	遺跡名	青根馬渡No.4遺跡	資料No.	106	遺跡名	青根馬渡No.4遺跡
所在地	相模原市緑区青根	所在地	相模原市緑区青根				
遺構名	K 1 号道状遺構	遺構名	K 2 号道状遺構				
遺幅	0.8~1.3m	遺幅	0.5~1.0m				
年代	宝永山噴火以後	年代	宝永山噴火以前か				
備考	検出長28m、道志川へ下るための道、地形が急な所は斜面を斜行して下るようになっている。K 2 号道状遺構を切る	備考	検出長14.6m、K 1 号道状遺構に切られる				

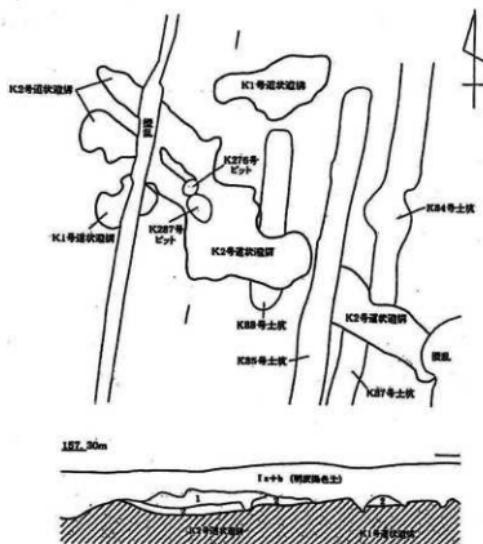


資料No.	107	遺跡名	青根馬渡No.4遺跡	資料No.	108	遺跡名	青根馬渡No.4遺跡
所在地	相模原市緑区青根	所在地	相模原市緑区青根	遺構名	K 3 号道状遺構	遺構名	K 4 号道状遺構
道幅	0.4~0.5m	道幅	0.3~0.5m	年 代		年 代	
備 考	検出長2.5m、硬化面2枚、K 1号・K 2号道状遺構のどちらかと同一の道	備 考	検出長4.0m、硬化面1枚				
							
縮 尺	(平面図) 1/60、(断面図) 1/60	縮 尺	(平面図) 1/60、(断面図) 1/60				

近世道状遺構の集成（6）

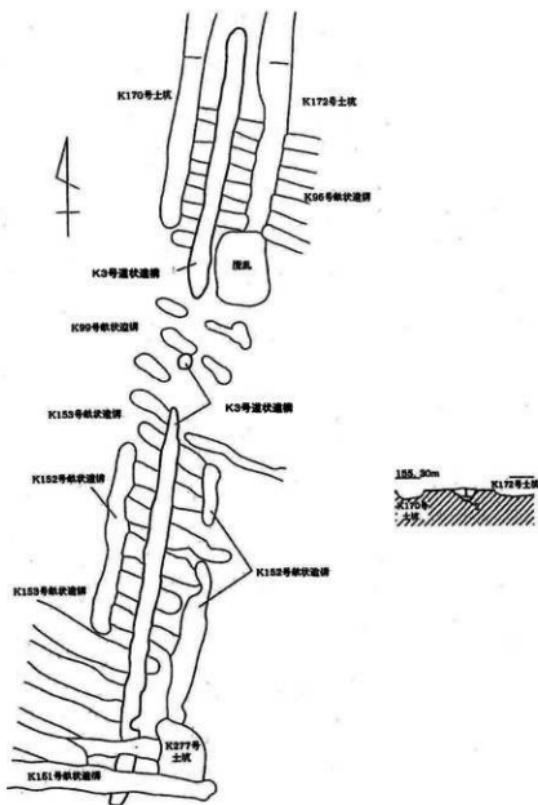
資料No.	109	遺跡名	大保戸遺跡
所在地	相模原市緑区小倉		
遺構名	K 1 号道状遺構		
道幅	0.28~0.56m		
年代			
備考	検出長約14.1m、硬化面厚さ10cm、側溝と考えられる溝が硬化面の両側にあり、溝の規模は幅0.2~0.74m・深さ8~9cm		
縮尺	(平面図) 1/80、(断面図) 1/80		

資料No.	110	遺跡名	相模原西遺跡	資料No.	111	遺跡名	相模原西遺跡
所在地	相模原市緑区城山	所在地	相模原市緑区城山	遺構名	K 1 号道状遺構	遺構名	K 2 号道状遺構
遺幅	0.8m	遺幅	0.72m	年代		年代	
備考	検出長4.6m、硬化面の一部確認、K 2 号道状遺構と交差している	備考	検出長7.12m、硬化面の一部のみ確認、断面レンズ状を呈する				



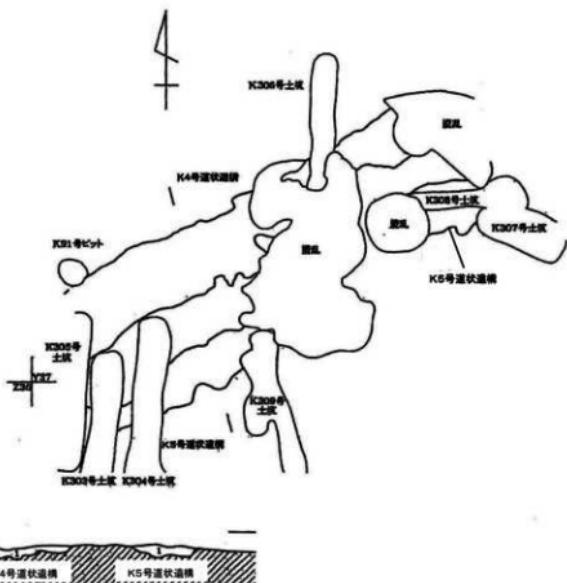
縮尺	(平面図) 1/80、(断面図) 1/60
----	-----------------------

資料No.	112	遺跡名	細久保西遺跡
所在地	相模原市緑区域山		
遺構名	K3号道状遺構		
道幅	0.3m		
年代			
備考	検出長12.84m、硬化面の一部のみ確認、断面やや開いたU形を呈する		



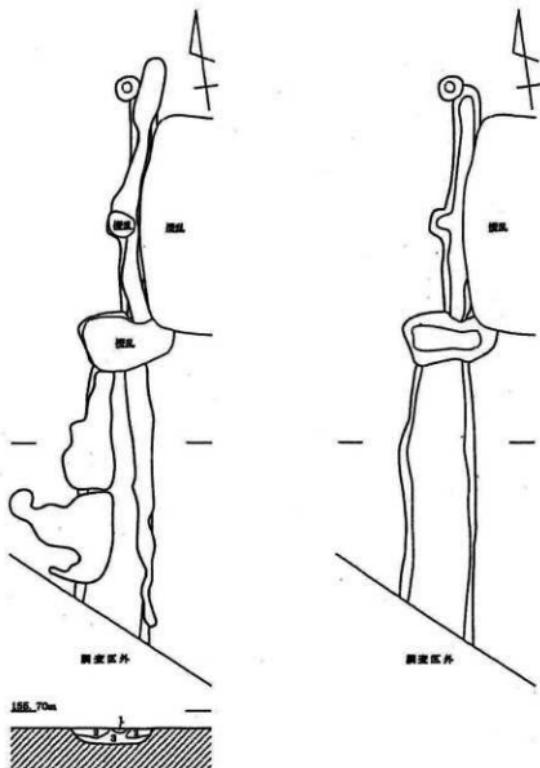
縮尺	(平面図) 1/80, (断面図) 1/60
----	------------------------

資料No.	113	遺跡名	相模原西遺跡	資料No.	114	遺跡名	相模原西遺跡
所在地	相模原市緑区城山	所在地	相模原市緑区城山	遺構名	K 4 号道状遺構	遺構名	K 5 号道状遺構
道幅	0.96m	道幅	0.62m	年代		年代	
備考	検出長6.24m、硬化面の一部のみ確認、断面レンズ形を呈する	備考	検出長7.84m、硬化面の一部のみ確認、断面レンズ形を呈する				



縮尺	(平面図) 1/80、(断面図) 1/60
----	-----------------------

資料No.	115	遺跡名	湘久保西遺跡
所在地	相模原市緑区城山町		
遺構名	K 6号道状遺構		
道幅	0.35m		
年代			
備考	検出長約6.85m、硬化面の一部のみ確認、断面U字形を呈する		

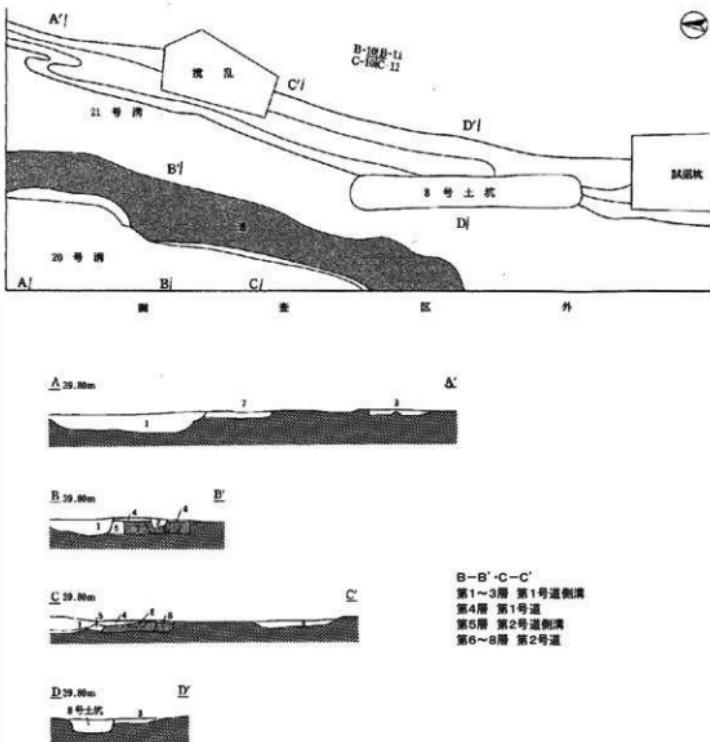


縮尺	(平面図) 1/60、(断面図) 1/60
----	-----------------------

資料No.	116	遺跡名	相模原西遺跡
所在地	相模原市緑区城山町		
遺構名	K 7号道状遺構		
道 幅	0.5m		
年 代			
備 考	検出長約36.2m、硬化面が確認されたのみ		
縮 尺	(平面図) 1/200		

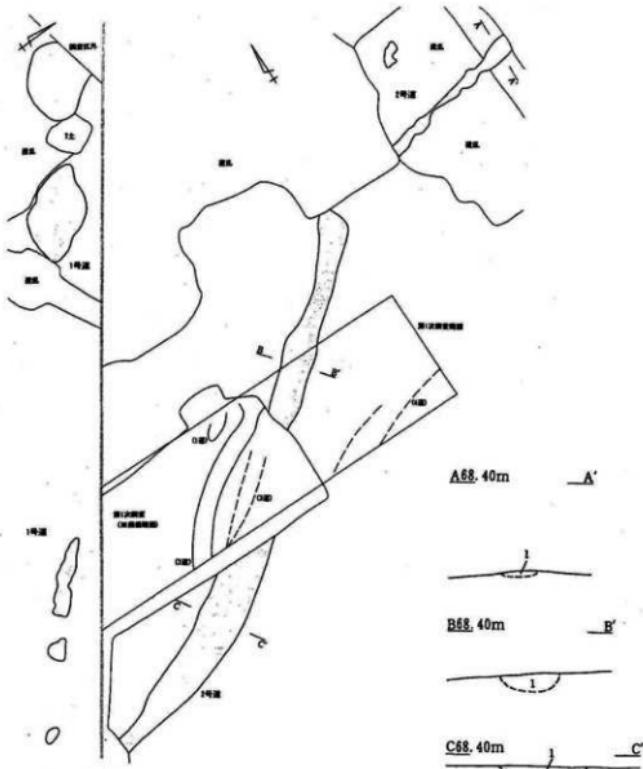
近世道状遺構の集成（6）

資料No.	117	遺跡名	大塚堂遺跡	資料No.	118	遺跡名	大塚堂遺跡
所在地	綾瀬市深谷落合	所在地	綾瀬市深谷落合	遺構名	第1号道状遺構	遺構名	第2号道状遺構
遺幅	1.2m	遺幅	1.2m	年代	近世以降	年代	中世以降
備考	検出長11m、第20号・21号溝状遺構が側溝として機能	備考	第1号道状遺構の下層に位置する、西側に側溝を持つ				



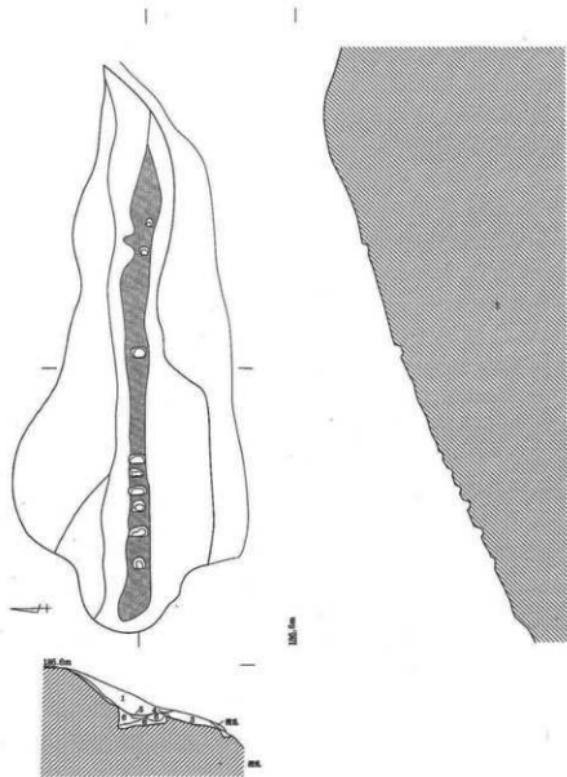
縮尺	(平面図) 1/120、(断面図) 1/80
----	------------------------

資料No.	119	遺跡名	小田原城跡八幡山遺構群	資料No.	120	遺跡名	小田原城跡八幡山遺構群
所在地	小田原市城山	所在地	小田原市城山				
遺構名	1号道状遺構	遺構名	2号道状遺構				
道幅	0.4~1.4m	道幅	0.2~1.2m				
年代		年代					
備考	検出長約17.2m、硬化面ブロック5箇所	備考	検出長南側14.1m・北側3.9m、擾乱を挟んで分断されているため一連の遺構が不明、硬化面ブロック4箇所				



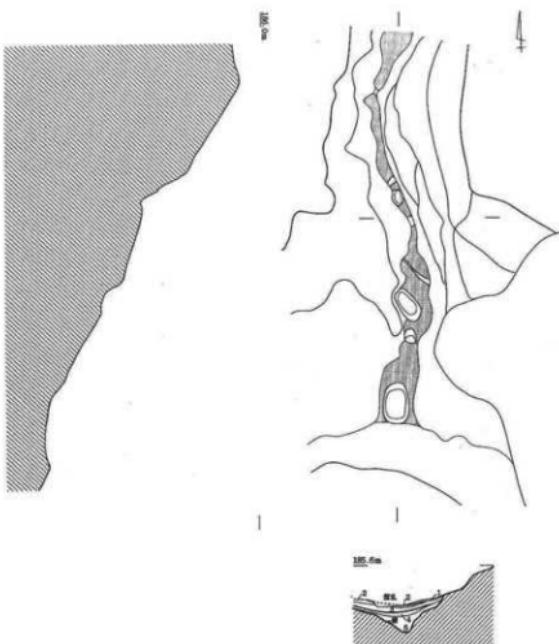
縮尺	(平面図) 1/100、(断面図) 1/60
----	------------------------

資料No.	121	遺跡名	矢頭遺跡（№35）
所在地	足柄上郡大井町大字柳字下矢頭		
遺構名	第1号道		
道幅	0.5～0.9m		
年代	宝永スコリア降灰以前		
備考	検出長17.75m、斜面を下る道、階段状の小さい掘り込み9カ所、断面台形の掘り方上面に硬化面、第2号道と直交するが前後関係は不明		



縮尺	(平面図) 1/150、(断面図) 1/150
----	-------------------------

資料No.	122	遺跡名	矢頭遺跡（№35）
所在地	足柄上郡大井町大字山田字大久保		
遺構名	第2号道		
道幅	0.42m		
年代	宝永スコリア降灰以前		
備考	検出長14.6m、硬化面が部分的に残る、第1号道と直交するが前後関係は不明		



縮尺	(平面図) 1/150、(断面図) 1/150
----	-------------------------

ブナ科種子同定方法の開発（その2）

相良 英樹

はじめに

本研究課題は、2018年度に申請した「ブナ科種子同定方法の開発」の続編である。2019年度の着目点は3つある。1つ目は、サンプルの拡充である。これまでのブナ科種子の形態学的な研究から、同じ種であっても樹木によって種子の形態に差があることが示されている。このため、1種につき、異なる地域の10母樹程度から試料採取するのが望ましいが、今回は可能な限り採集を実施した。特に九州・四国にのみ自生するハナガガシについては分布調査を九州に拡大し、分布リストの作成と試料の採集を実施し、大幅な試料の追加採集を行った。サンプルの採集は、分布リストの中で採集が期待出来ると考えられた神奈川、東京、山梨、長野、熊本、宮崎の社寺林を中心に、2019年6月から2019年12月にかけて実施した。

2つ目は、形態観察である。前回の論文では、子葉の大きさ（体軸・放射軸・最大径長・頂端長）、子葉の幼根と上胚軸の形状（砲弾形・かぶ形・水滴形）から分類を試みたが、今回は過去の研究成果を踏まえ、植物形態学的な観点から見直す。また、新たな分類ポイントとして果皮に注目し、電子顕微鏡による表面の微細な構造にも目を向ける。そして、研究経過を振り返り、同定に必要な観察ポイントを再確認する。さらに現生標本との比較研究を通して、遺跡から出土したブナ科種子が持つ形態や構造の特徴を明らかにしてみたい。

3つ目は、現生試料の炭化実験である。現生種子を遺跡から出土した遺物に近い状態にすることで、新たな同定ポイントを探る。

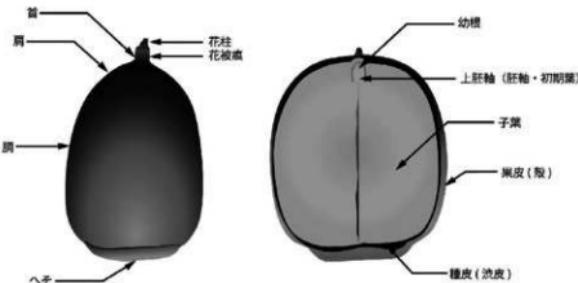
1. 試料採取と計測

より多くのデータを取る必要から、関東地方および東海地方、九州においても現生標本の採取を行い、試料の増加に努めた。今回は、標本数が少ない種を中心にコナラ属コナラ亜属6種、アカガシ亜属7種の合計11種（ウバメガシ、クヌギ、アベマキ、カシワ、ミズナラ、ナラガシワ、イチイガシ、アカガシ、ハナガガシ、ツクバネガシ、アラカシ、ウラジロガシ、シラカシ）の採取を実施した。

計測した試料は、大きさによって、1ヵ月から3ヵ月程度天日干しにして十分に乾燥させた。その後、果皮から種子だけを取り出し、体軸・放射軸・最大径長・頂端長を計測した（第1表）。

また、前回の論文では、コナラ属と報告された相模原市の矢掛・久保遺跡の資料について、アカガシ亜属のアカガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシの3種に絞り込んだ。この3種については、より多くの情報を得るために、乾燥前および乾燥後の計測を行い、形状変化についても記録した（第2図）。体軸に関しては、アカガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシとともに採集直後の水分を含んだ状態と比べ、乾燥時には86.3%から87.5%の減少率となった。概ね13%前後の減少率であるのに対し、頂端長は74.2%から83.2%を測る。体軸に比べ、17%から25%程度の減少率となり、収縮が著しい結果となった。頂端長は種によって異なることは前回の論文で指摘したが、炭化した資料について復元する場合、上述の結果から復元値を推測できると考えられる。

コナラ亜属では特にナラガシワの標本数を大幅に増やすことが出来た。ナラガシワは本州（岩手県・山形



第1図 ブナ科種実の各部位名称

県以南)・四国・九州に分布する。関東平野では現在、ほとんど観察されないが、各地の出土遺物から見ると、縄文時代には普通に生育していたと考えられる(佐々木2007)。現生のものと比べても大型と言われ、今回の採集した試料も、確かに体軸22cmを超える大型の種実はナラガシワ以外には見当たらなかった。

アカガシ亜属では特にイチイガシとハナガガシの標本数を増やすことが出来た。イチイガシは本州(関東地方以西の太平洋側)・四国・九州・琉球に分布する。関東地方では弥生時代から出土がみられ、平安時代頃までは分布がみられたと言われる(百原1997)。今回は九州を中心に採集できたが、前回、東京および京都で採集した試料を比べ、体軸が15cmを超える大型の個体が目立った。同じ種ではあるが、地域によりかなり生育状況が異なると考えられる。

ハナガガシは四国(高知県)・九州(大分県・宮崎県・熊本県・鹿児島県)に分布する。個体数は少なく、関東には自生していない。前回の採集では和歌山県の植樹からの採集のみであったが、今回は宮崎県内の自生地より採集することが出来た。体軸は平均で16cm前後、放射軸(幅)は10cm前後を測る。他のアカガシ亜属と比べ、比較的大きいのが特徴である。

2. 形態観察

(1) 実生の形態

ここでは、ブナ科種実の実生の形態に着目して観察・分類を行う。前回の論文(相良2019)では、子葉の幼根および上胚軸をその形状から弾形、かぶ形、水滴形の3種類に分類したが、岡本潔治によれば、ブナ科は実生の種類によってE型、H-I型、H-II型、H-III型の4種類に分類される(岡本1976・原2019)。その概要について説明すると、E型は地上子葉性で、ブナ属を含む。H-I型は地下子葉性で、上胚軸の初期葉は鱗片葉、かつ発芽前には初期葉の原基がまだ形成されていないタイプで、クリ属、シイ属、マテバシイ属、イチイガシを含む。H-II型は、地下子葉性で、上胚軸の初期葉は普通葉となる。イチイガシを除くコナラ属アカガシ亜属、クヌギ、アベマキを含む。ただし、クヌギとアベマキでは、鱗片が観察されるが、子葉の腋芽に由来する突起と考えられている。H-III型は地下子葉性で、上胚軸上の初期葉は鱗片葉、かつ発芽前にその原基が形成されている型で、クヌギとアベマキを除くコナラ属コナラ亜属を含む。地上あるいは地下子葉性については省略するが、初期葉については、同定する上で、重要なポイントと考えられるので、今回は

ブナ科種子同定方法の開発（その2）

第1表 ブナ科種子計測値

試料No.	種名	採取地	株番号	a: 体積	b: 最大径長	c: 放射軸	d: 頂端長	試料数
1	ウバメガシ	愛知県田原市田原町	7	10.7~19.5	7.4~11.7	5.5~9.5	2.0~3.9	38
2	クヌギ	長野県長野市塙崎	5	10.9~18.5	13.1~17.9	4.1~9.1	2.1~3.5	42
3	アペマキ	愛知県田原市田原町	5	14.5~19.8	10.5~18.6	5.2~9	3.1~4.7	30
4	カシワ	山梨県甲府市下向山町	1~②	13.5~15.9	5.1~8.1	9.1~12.8	2.2~3.5	20
5	カシワ	長野県千曲市大字扇代	3	14.1~18.8	5.3~7.8	10.2~14.1	2.1~3.8	42
6	ミズナラ	長野県長野市戸隠中社	4	13.5~20.1	8.1~13.0	4.1~6.5	3.2~7.0	42
7	コナラ	東京都町田市相原町	6	14.9~21.9	6.4~11.4	8.8~13.3	1.5~2.8	42
8	ナラガシワ	熊本県熊本市中央区黒瀬	6	15.2~22.4	8.9~13.2	8.8~21.7	2.2~4.2	30
9	ナラガシワ	東京都八王子市西寺方町	7	22.7~27.4	10.3~14.2	8.9~14.2	2.0~5.6	42
10	ナラガシワ	東京都八王子市西寺方町	8	10.4~23.9	8.5~12.0	9.5~21.3	1.5~3.9	42
11	ナラガシワ	東京都八王子市西寺方町	9	12.3~25.3	9.2~11.5	9.1~20.5	1.8~3.9	42
12	イチイガシ	熊本県中央区黒瀬	7	12.2~16.4	7.7~10.1	5.9~7.0	0.6~1.5	42
13	イチイガシ	熊本県中央区黒瀬	8	12.5~18.1	8.0~10.5	5.9~7.5	0.7~1.7	42
14	イチイガシ	宮崎県東臼杵郡椎葉村下福良字	9	13.9~17.3	8.2~10.4	6.0~7.9	0.7~1.6	42
15	アカガシ	東京都世田谷区中町	5	13.4~17.7	7.5~10.3	6.1~8.0	2.0~3.5	42
16	アカガシ	東京都世田谷区中町	6	15.2~18.8	8.0~10.5	6.3~8.7	2.4~3.9	42
17	ハナガシワ	宮崎県日向市東郷町山陰乙	4	13.9~17.6	7.8~9.8	6.7~9.2	2.1~3.3	50
18	ハナガシワ	宮崎県日向市東郷町山陰乙	5	14.6~17.9	8.2~11.1	6.5~9.6	1.1~2.6	50
19	ハナガシワ	宮崎県西都市大字妻	6	14.2~17.6	10~13.4	6.2~9.0	1.7~3.1	50
20	ハナガシワ	宮崎県西都市大字妻	7	13.8~17.8	8.4~11.9	6.7~9.3	2.6~3.9	50
21	ツクバネガシ	東京都町田市相原町	9	12.2~14.5	9.0~10.7	5.8~7.5	1.8~3.1	42
22	アラカシ	熊本県中央区黒瀬	7	9.4~12.3	6.0~6.8	6.5~9.3	1.1~2.0	42
23	アラカシ	熊本県中央区黒瀬	8	11.9~14.1	5.6~6.7	7.7~9.5	1.2~1.6	50
24	アラカシ	熊本県中央区黒瀬	9	10.9~14.2	6.6~7.1	6.7~8.6	1.0~1.8	42
25	アラカシ	宮崎県西都市大字妻	10	8.9~12.3	5.6~6.9	7.7~9.7	1.2~1.7	42
26	アラカシ	愛知県豊橋市大岩町	11	7.9~10.4	5.6~6.10	5.7~8.8	1.0~1.8	42
27	ウラジロガシ	神奈川県相模原市緑区城山	8	15.0~18.2	8.4~11.7	6.5~8.9	1.4~2.4	42
28	シラカシ	東京都町田市相原町	5	12.5~16.2	5.9~8.1	6.5~8.7	1.2~2.1	42

コナラ亜属については、クヌギ、アペマキ、ミズナラ、ナラガシワ、アカガシ亜属については、イチイガシ、アカガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシの上胚軸部分の初期葉について形態観察を改めて行った。

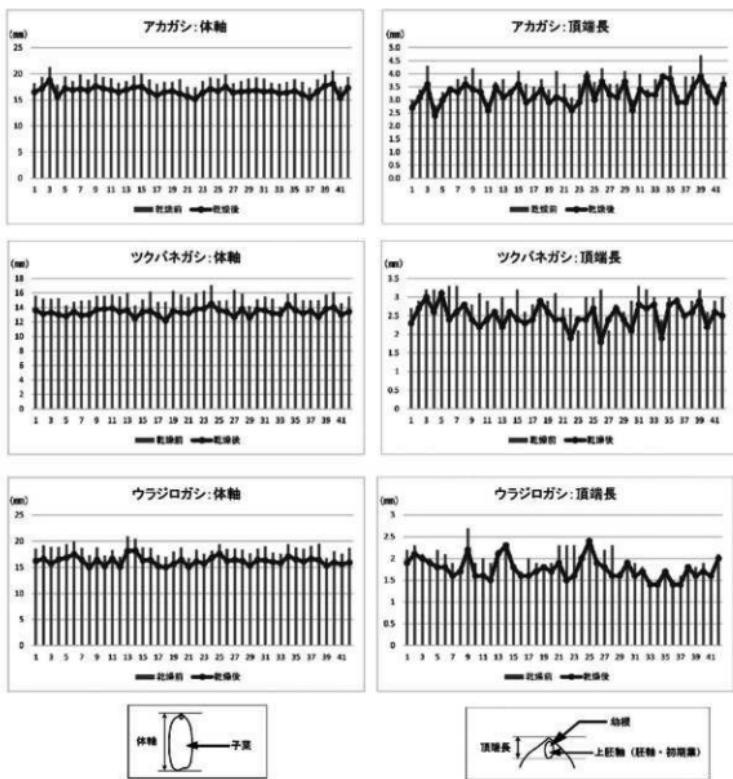
第2図にあるように、コナラ亜属のクヌギとアペマキには鱗片葉の腋芽部分と考えられる突起が確認された。また、ミズナラとナラガシワには鱗片葉が観察された。アカガシ亜属については、アカガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシには普通葉とみられる突起がわずかに観察された。イチイガシは発芽するまでは初期葉の原基が形成されていないと言われており、今回の観察でも初期葉とみられる突起部分は観察されなかった。

以上のように、ブナ科種実の上胚軸部分については、亜属、あるいは種ごとに形状が異なることが観察された。炭化した場合、腋芽と鱗片葉の区別は判別するのは難しいが、幼根および胚軸、初期葉部分の発達度合いにより、先端部分から初期葉までの大きさに差が出ることも確認された。第1表にもあるように、初期葉が形成されていないイチイガシに関しては、頂端長が他の種に比べ短く、2mmを超える個体は前回と今回の採集した試料でも確認されなかった。

(2) 微細構造

矢掛・久保遺跡のように、炭化子葉以外にも多数の炭化果皮片が出土した例を考えると、果皮についても形態観察を行い、同定するポイントを探るのは重要と考える。ここでは、ブナ科種実の果皮表面の形態観察を行い、種ごとに変化があるのか観察した。対象はアカガシ亜属（イチイガシ・アカガシ・ハナガシ・ツクバネガシ・アラカシ・ウラジロガシ・シラカシ）とし、試料はすべて乾燥させた。果皮の表面の様子を走査型電子顕微鏡（JEOL JSM-6490LV）で観察した。実施方法については以下のとおりである。

①試料の選定と試料台への装着



第2図 アカガシ亜属乾燥前・乾燥後収縮変化

②試料の蒸着処理（第4図写真1・2）

電子顕微鏡の観察では試料に電子線を照射するため、植物などの帶電性が無いものは、真空状態では試料表面に電子が蓄積され、帯電障害を起こす。このため、試料表面に金属をコーティングさせる金属コーティング方法によりプラチナコーティングを行った。今回はイオンスタッパー（日立ES-2030）を使用した。処理条件設定は、放電電流20mA、放電時間は120秒である。

③試料の観察（第4図写真3・4）

走査型電子顕微鏡（以下、SEM）を用いて、ブナ科果皮の表面観察を行う。SEMは、実体顕微鏡にくらべ、より高倍率での観察が可能であり、被写界深度が深く明瞭な画像が得られるのが特徴である。

以下に果皮を観察した結果を報告する。表面からの観察のみであるが、アカガシ亜属については、すべての種において、表皮細胞はロウなど膜状組織と考えられる細胞が観察された。また、下表皮細胞に垂直方向

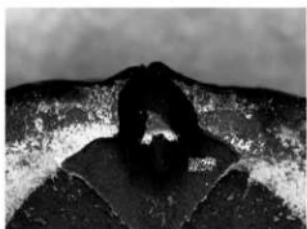


写真1 クヌギ



写真2 アベマキ



写真3 ミズナラ



写真4 ナラガシワ



写真5 イデイガシ



写真6 アカガシ



写真7 ツクバネガシ



写真8 ウラジロガシ

第3図 上胚軸拡大



写真1 イオンスタッパーによるコーティング



写真2 プラチナコーティングした試料



写真3 電子顕微鏡



写真4 試料の観察と撮影

第4図 電子顕微鏡での観察

に柵状あるいは網目状の細胞がはつきりと確認されたのは、このうち、ハナガガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシ、シラカシの4種であった。細胞間隙に富む組織が認められるのはウラジロガシとシラカシで、柵状細胞1本の幅は、ウラジロガシが約11ミクロンであるのに対し、シラカシは7ミクロン程度を測る（第6図写真3～6）。ハナガガシとツクバネガシは表皮細胞が厚いのか、網目状細胞が不明瞭である（第5図写真5～8）。

種によって固定された形質であるかどうかは、引き続き観察が必要であるが、ウラジロガシやシラカシなど一部の種については、同定の際の参考になる可能性がある。

（3）炭化試料による比較

現代と古代の資料（試料）を比較するには現生種子を炭化させることで試料と同一の条件にする必要がある。直接、ブナ科種実で炭化実験を行った研究は少ないが（小畠2003）、クリなどの実験報告も参照した（吉川2011）。

炭化させた現生試料と比較するドングリは、前回用いた相模原市および横浜市の資料に加え、調布市の入間町城山遺跡の資料を用いた。入間町城山遺跡は入間川左岸の武藏野段丘上に位置する。東・南・西の三方を崖線に画された細長い舌状台地となっている。

入間町城山遺跡の資料を用いた理由は、種が細かく同定されていること、また、遺構の年代が古墳時代前期と明確であることから比較が妥当と判断されたからである。資料の実見は令和2年2月に調布市郷土博物

ブナ科種子同定方法の開発（その2）

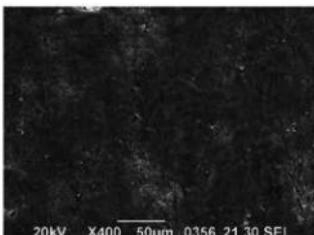


写真1 イチイガシ果皮 (400倍)

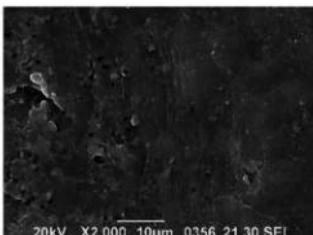


写真2 イチイガシ果皮 (2000倍)

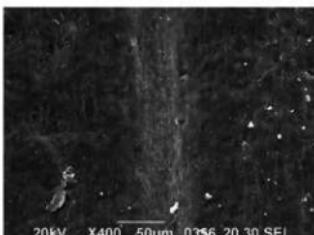


写真3 アカガシ果皮 (400倍)

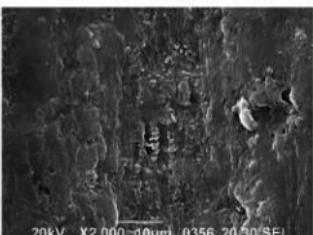


写真4 アカガシ果皮 (2000倍)



写真5 ハナガシ果皮 (400倍)

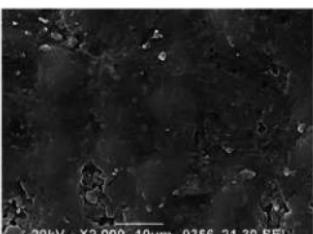


写真6 ハナガシ果皮 (2000倍)

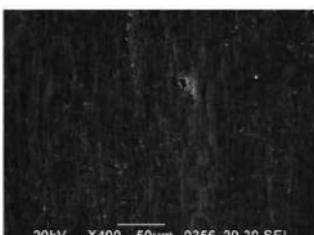


写真7 ツクバネガシ果皮 (400倍)

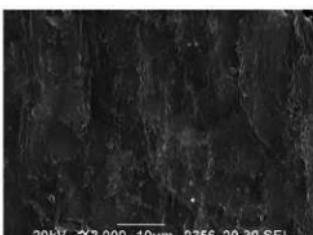


写真8 ツクバネガシ果皮 (2000倍)

第5図 果皮の微細構造 (1)

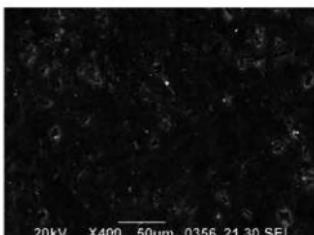


写真1 アカシ果皮 (400倍)

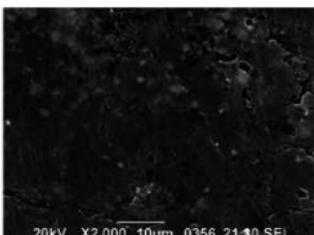


写真2 アラカシ果皮 (2000倍)

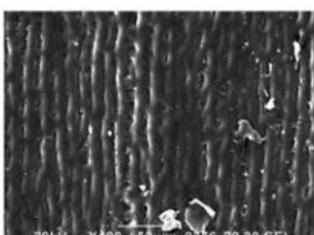


写真3 ウラジロガシ果皮 (400倍)

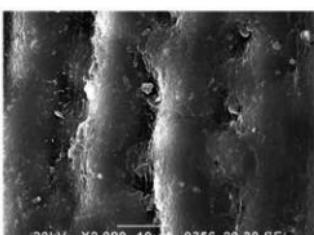


写真4 ウラジロガシ果皮 (2000倍)

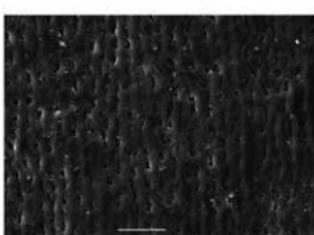


写真5 シカシ果皮 (400倍)

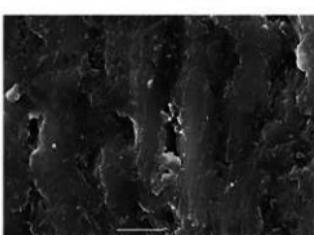


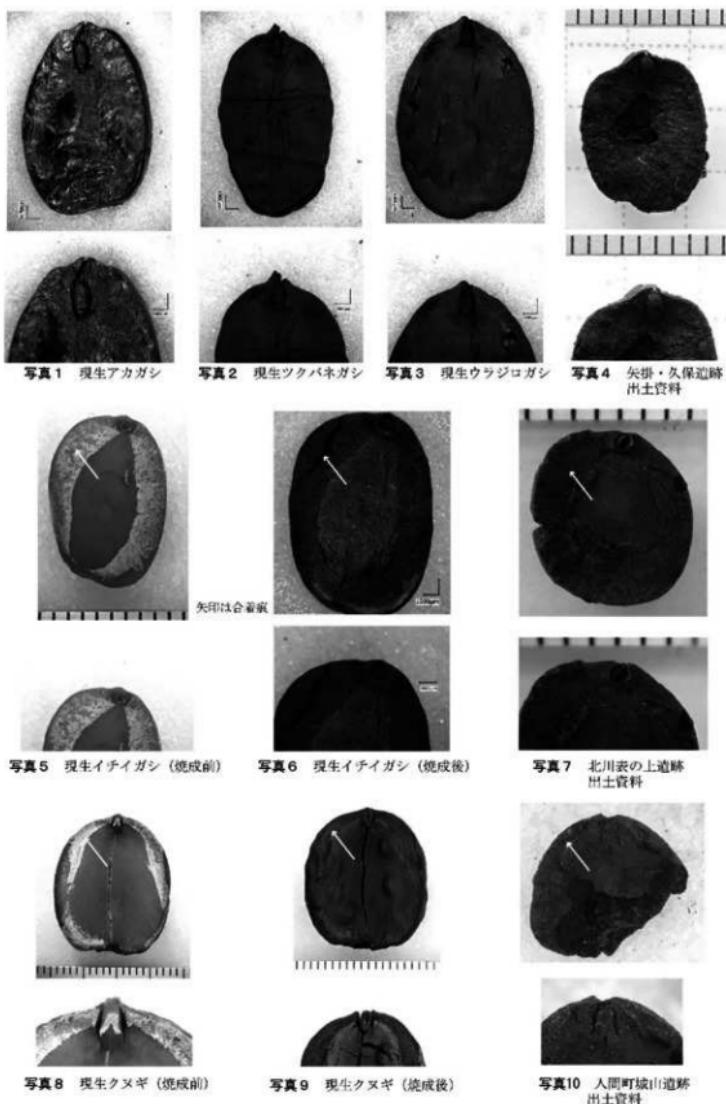
写真6 シカシ果皮 (2000倍)

第6図 果皮の微細構造 (2)

館で行った。遺存状態の良い資料を中心に再計測を行ったほか、頂端長など、報告書には記されていない観察箇所も記録した。

前回の論文で扱った相模原市の矢掛・久保遺跡の資料は、平安時代の住居跡から出土しており、報告書によればコナラ属と同定されている。前回の研究助成論文では、幼根部分の特徴から、アカガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシの3種に絞り込んだ（相良2019）。北川表の上遺跡は、古墳時代後期の住居跡から出土しており、アカガシ亜属と同定されている。前回の研究助成論文では、幼根および上胚軸の大きさ、子葉の完形割合か

ブナ科種子同定方法の開発（その2）



第7図 炭化試料と出土資料の比較

ライチガシと考えた。今回は、同定に向けたより多くのデータを提供することを目的として、炭化実験を行った試料と比較した。

あらかじめ水分がほとんどないくらい乾燥させた果実を低酸素状態で炭化させた。予備的な実験では温度が350～400°C程度の場合、灰化することが分かった。このため、いくつかの場合分けを行い、最終的に200～230°C、90分から2時間程度加熱した場合、内部にほとんど空隙が無く緻密な状態で炭化し、出土遺物に近い状態を復元出来た。炭化に際しては、小型電気炉（日陶社製mini-I半自動式）を用いた。

現生のアカガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシの炭化試料と矢掛・久保遺跡の出土資料を比較した（第7図写真1～4）。炭化時の子葉の合わせ目の様子は比較的平滑で出土資料と類似する。結論としては、アカガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシの3種の上胚軸部分の様相からだけでは判別が難しい。矢掛・久保遺跡の場合は、ブナ科種実に伴い、大量の果皮が出土している。出土資料の果皮を電子顕微鏡で観察することはできなかつたが、観察を進めれば同定の参考となる可能性がある。今後の検討課題としたい。なお、観察中にウラジロガシは胚軸の幅が他の2種に比べ細い印象を受けた。計測値は1mm以下と考えられることから、ノギスでの簡易計測では差がつきにくいと考えられる。計測方法についても今後検討が必要である。

イチイガシなど合着子葉性(Syncotylous)の性質をもつ5種(クヌギ・アベマキ・イチイガシ・マテバシイ・シリプカガシ)は、現生試料をみると、2枚の子葉の合わせ目に特徴的な合着の痕跡が観察された（第7図写真5・8）。これらは炭化後にもリング状の合着痕跡が観察することが出来た。北川表の上遺跡のコナラ属および入間町城山遺跡出土資料について実見したところ、やはり合着痕跡が観察される個体も確認された（第7図写真10）。合着痕があれば、破片であっても同定可能な場合がある。このため、同定する上で重要なポイントと位置付けられる。また、合着子葉性を持つブナ科種実は合着することで炭化しても完形で出土することが多い。入間町城山遺跡出土のクヌギも34点中8点が二枚の子葉が合着した状態であったことから、比較的合着している割合が高いことが観察された。

3.まとめ

以上、本研究ではブナ科種実について現生試料の子葉の構造の違いから種を同定する方法を見直し、既に報告されているブナ科種実の報告結果について再確認するとともにより細かな同定案を提示した。

入間町城山遺跡出土のクヌギについては、炭化実験の結果、2枚の子葉の合わせ目に特徴的な合着の痕跡が確認された。このことから、報告書に同定されているとおり、クヌギと特徴が一致する。ただし、夾雜物が多く、判然としない資料も多い。確実な洗浄が種同定を行う上で重要であると認識した。北川表の上遺跡から出土したコナラ属については、前回、イチイガシの可能性があると指摘したが、今回の炭化実験等から現生試料のイチイガシと酷似する特徴を示すことが分かった。同定するポイントは頂端長の長さと二枚の子葉の合着痕にあると考える。矢掛・久保遺跡から出土したコナラ属については、前回の論文ではアカガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシの3種に絞った。今回の論文ではそれ以上に絞ることは困難であったが、果皮表面の微細な構造の差、および胚軸部分の幅に差がある可能性を指摘することができた。

今回の結果と遺跡の立地について見てみる。炭化種実が出土する遺跡の環境を沖積低地、台地、山地と考えた場合、例えばアカガシ亜属では、イチイガシやツクバネガシはより沖積低地に近い台地斜面下部に植生分布の中心がある。ウラジロガシは台地斜面上部、アラカシは山地にまで植生分布が広がっているといわれる。また、ナラガシワやコナラは沖積低地の河畔林に広く優占することが知られている（野崎2001・吉川

2007）。矢掛・久保遺跡の炭化種子がツクバネガシであった場合、沖積低地に近い台地斜面下部周辺で採集されていたと考えられる。また、ウラジロガシであった場合、台地斜面上部にまで採集活動が及んでいたことが推測される。クヌギは丘陵地や台地上に植生が広がっていたと考えられ、武藏野段丘上に位置する入間町城山遺跡の周辺でも採集可能な種類であることが分かる。

古墳時代前期にはクヌギ、後期にはイチイガシ、平安時代にはアカガシあるいはツクバネガシ、ウラジロガシが利用されていたことが窺えた。野生堅果類利用の民俗事例を見ると、コナラ亜属ではコナラやミズナラの事例が多いが、クヌギに関しては大分県に一例がみられる（栗田1997）。アカガシ亜属では、イチイガシの事例は九州を中心とみられ、その他、アカガシやシラカシ、アラカシの事例も多い（和田2007）。ツクバネガシの民俗事例は見当たらない。クヌギに関しての食用事例は朝鮮半島に多くみられるが、日本では廃れてしまった。あるいはほとんど選ばれなかつた可能性がある。

おわりに

民族誌によれば、カリフォルニア先住民に利用されるブナ科種実の種類は部族によって異なることが知られている。部族によって異なる理由は、嗜好や不作時の対策と言われている（細谷2016）。日本においても、ブナ科種実の種類を明らかにすることで、先史時代に利用されるブナ科種実の時期や地域ごとの選択についてより細かな理解が進むことが期待される。特にイチイガシは関東地方では弥生時代以降に出土例が多くなると言われる。炭化した資料を確実に同定することができれば、イチイガシが関東に出現する時期についても明らかにすることが可能となる。

遺跡の立地について重要な知見を得ることができる。今回、取りあげることはなかったが、ナラガシワは有機物が多く出土したことで有名な下宅部遺跡などからの出土が知られており、遺跡が立地する低地部周辺で集中的に採取されていたと考えられる。他の遺跡について炭化した種実について種までの同定例が増えれば、集落周辺の環境についてもより理解が進むことが期待される。

謝 辞

本研究を行うにあたっては、以下の方々にお世話になった。岡山理科大学の那須浩郎氏には多大なご助言をいただきました。国立大学法人総合研究大学院大学の本郷一美氏には大学院での器材使用の許可にあたり多くの便宜を図っていただきました。同大学院の松下敦子氏には器材使用方法について多くの助言をいただきました。相模原市教育委員会の中川真人氏、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財團埋蔵文化財センターの古屋紀之・山田光洋両氏、調布市教育委員会長瀬 出氏には資料実見の際に手配していただき、有意義なご意見をいただきました。相模原市教育委員会教育局生涯学習部文化財保護課、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財團、調布市教育委員会には資料掲載のご許可をいただいた。以上の方々に篤く御礼申し上げます。

〈参考文献〉

- 岡本素治1976「ブナ科の分類学的研究—実生の形態—」『大阪市立自然史博物館研究報告』30
- 小畠弘己2011『東北アジアの古民族植物学と論文農耕』
- 栗田勝弘1997「九州地方における野生堅果類、根茎類利用の考古・民俗学的研究」『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要』8
- 相良英樹2019「ブナ科種子同定方法の開発」「かながわの考古学』24、公益財団法人かながわ考古学財团

- 佐々木由香2007「種実と土木用材からみた縄文時代中期後半～晩期の森林資源利用－関東平野を中心として－」安斎正人・高橋龍三郎編『縄文時代の社会考古学』、同成社
- 野崎玲児ほか2001「ナラガシワ群落について－沖積低地の自然林植生の一型として－」大野啓一編『奥田重俊先生追憶記念論集「沖積地植生の研究」』
- 能代修一ほか2012「弥生時代から古墳時代におけるイチイガシの木材資源利用」『植生史研究』21－1、日本植生史学会
- 原正利2019『ドングリの生物学－ブナ科植物の多様性と適応戦略』、京都大学出版会
- 細谷葵2016「先史時代の堅果類加工再考－世界的な比較研究をともなう民族考古学をめざして－」『古代』138、早稲田大学出版会
- 百原一新1997「弥生時代終末から古墳時代初頭の房総半島中部に分布したイチイガシ林」『千葉大園学報』51、千葉大学2004「自然にみられる特性」『千葉県の自然誌本編8：変わりゆく千葉県の自然』県史シリーズ47
- 吉川純子2011「縄文時代におけるクリ果実の大きさの変化」『植生史研究』18、日本植生史学会
- 吉川正人ほか2007「練度河川の河畔林としてのコナラ林－その立地と種組成について」『森林立地学会誌』49、森林立地学会
- 和田穂三2007『日韓における堅果食文化』、第一書房

研究紀要26

かながわの考古学

発行日 2021（令和3）年3月30日

発行 公益財団法人かながわ考古学財団

〒232-0033 神奈川県横浜市南区中村町3-191-1

TEL : 045-252-8689 FAX : 045-261-8162

<https://www.kaf.or.jp>

印刷 アンクベル・ジャパン株式会社